徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第97集

和 食 城 跡

床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

徳　　島　　県
公益財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第97集

和 食 城 跡

床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

徳　　島　　県
公益財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

序　　文

この度、床上浸水対策特別緊急事業に伴う和食城跡の発掘調査の正式報告書がまとまりましたのでここに刊行いたします。

遺跡の所在地である那賀町は町内の中央部を流れる那賀川によって谷底の盆地部分に河岸段丘が形成されており、その平坦地を利用して集落が営まれてきました。文献上から当地域には那賀山荘の荘園が設置されるとともに、室町・戦国期には多くの城館が築かれたことが江戸時代の文献である『阿波志』の文中に記述されています。今回報告する発掘地点も「和食城」と記述された場所に推定されており、蛭子神社境内には土塁が残ります。調査においては土塁や櫓台等の中世城館に関わる遺構だけで無く弥生時代の遺構遺物を確認いたしました。

今後、本書が当該地域及び本県の歴史を解明する上で貴重な資料として活用され、広く文化財保護の一助となることを期待したいと思います。

末尾ではありますが、この度の発掘調査の実施により、貴重な成果を上げることができましたのも、関係諸機関ならびに地元の皆様の多大な御理解、御協力のお陰であり、心から感謝申し上げる次第です。また、発掘調査及び報告書作成等に当たっては、徳島県をはじめ関係各位から貴重な御指導・御教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、今後も当センターの事業について一層御支援下さるようお願い申し上げます。

令和４年２月

公益財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

理事長　福　家　清　司

例　　言

1　本書は床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）に伴い、令和２（2020）年度に実施した和食城跡（那賀郡那賀町所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、徳島県からの委託により公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査および報告書作成期間は次の通りである。
・発掘調査期間　　令和２年度：令和２年４月１日～６月30日
・整理作業・報告書作成期間　　令和３年度：令和３年４月１日～８月31日

4　遺構番号は調査時のものを基本的に踏襲しているが一部変更を加えた。遺物番号は通し番号とし、土器・土製品には1、2、3…、金属製品にはM1、M2、M3…、石器にはS1、S2、S3…と、材質によってそれぞれ番号を付与しており、本文・挿図・観察表・図版と一致する。

5　図２は、国土地理院発行の１：50,000のhttp://maps.gsi.go.jp/#16/33.859805/134.499950/&base=std&ls=std%7Clcmfc2&blend=1&disp=10&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=mに加筆したものである。図４は、国土地理院発行の１：25,000の地形図「阿井」「馬場」を転載・改変した徳島県教育委員会発行の『徳島県遺跡地図』を改変したものである。第79図は国土地理院地図電子国土（Web）陰影起伏図 <iframe frameborder="0" scrolling="no" marginheight="0" marginwidth="0" width="500" height="400" src="http://maps.gsi.go.jp/?hc=hic#15/33.854148/134.501324/&base=blank&ls=blank%7Cslopemap&blend=1&disp=11&vs=c0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0"></iframe> を加工。

6　本書の執筆はⅠ－１を徳島県文化資源活用課、Ⅰ－2、3、4、5を大橋育順、Ⅳ－１を辻佳伸、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ－２の執筆と編集は栗林誠治が担当した。遺構写真は調査担当者が、遺物写真は栗林誠治が担当した。

7　本書に収録した遺物及び写真・図版などの記録の一切は、徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番２に所在する徳島県立埋蔵文化財総合センターに保管している。

8　調査に係る協力者
　吉田道明・杉原賢治・中元祥夫・蛭子神社・那賀町教育委員会・那賀町まち・ひと・しごと戦略課ドローン推進室・徳島県南部総合県民局県土整備部〈那賀〉

凡　　例

1　遺構の表示は（公財）徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。
　SD：溝　SK：土坑　SP：柱穴・小穴　ST：埋葬施設　SX：性格不明遺構

2　遺構番号は､4 桁で表示する。4 桁目の番号は遺構面数を表し､以下の 3 桁が遺構の通し番号を表す。

3　遺構掲載サイズは、遺構平面図は 1/40 を基本とし、各スケールに縮尺を表示している。自然流路等大型遺構に関しては、遺構平面図は 1/50、1/100、遺構覆土層図は 1/50、1/75 にて掲載した。

4　方位、座標は世界測地系に準拠するが、調査時に設定したグリッドにて表示する。標高は東京湾標準潮位（T.P）に準拠する。

5　本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版土色帳』2011 年度版、および細野尚久編『標準色彩図表 A』に準拠する。

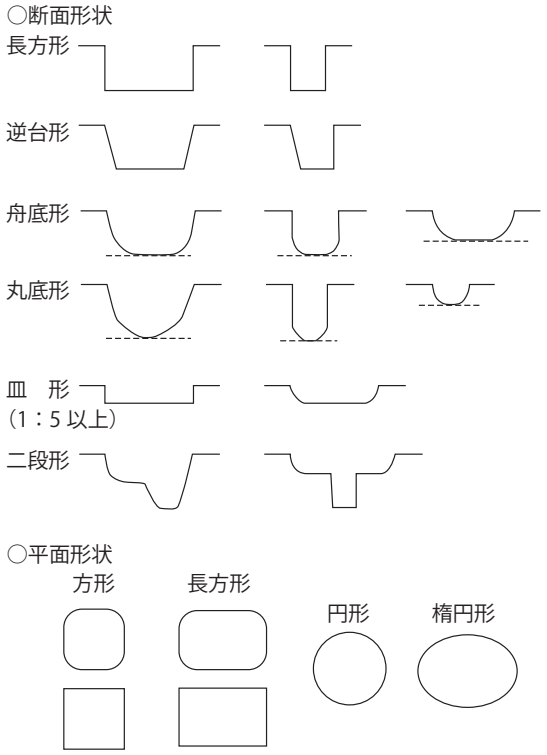
6　遺物の掲載サイズは、原則下記のものに統一した。
　土器：1/3　土製品：1/1　鉄器：2/3　ガラス製品：1/1　礫石器・石製品：1/3

7　図版・挿図及び表は基本的に通し番号である。

8　観察表中の弥生土器に関しては以下の文献を参考にして記載している。
（公財）徳島県埋蔵文化財センター 2014『南蔵本遺跡－徳島県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』

9　土器観察表中の胎土（含有物）の略号は下記の通りである。
　結：結晶片岩　石：石英　　長：長石　チ：チャート　雲：雲母　金雲：金雲母　角：角閃石
　赤：赤色斑粒　砂：砂岩粒　泥：泥岩粒　黒：黒色粒　花：花崗岩

10　遺構の平断面形状の記載は下記の通りである。



※断面形状・平面形状ともにその他については「不整形」とする

目　次

第Ⅰ章　調査及び整理の経緯 …… 1
1　発掘調査及び整理に至る経緯 …… 1
2　発掘調査の方法 …… 3
3　発掘調査の経過 …… 4
4　発掘調査・整理作業の体制 …… 4
5　調査日誌 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 6
1　地理的環境 …… 6
2　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査成果 …… 8
1　遺跡の現況 …… 8
2　基本層序 …… 9
3　調査成果 …… 11
(1)　第１遺構面 …… 11
１号鍛冶炉 …… 11
東堀 …… 18
土橋 …… 18
東土塁 …… 18
虎口 …… 23
櫓台 …… 23
北土塁 …… 23
西土塁 …… 24
(2)　第２遺構面 …… 34
溝状遺構 SD …… 34
土坑 SK …… 34
小穴・柱穴 SP …… 46
性格不明遺構 SX …… 51
包含層出土遺物 …… 68

第Ⅳ章　まとめ …… 73
1　仁宇山城の所在について …… 73
2　まとめ …… 73

挿図目次

図 1　和食城跡位置図(S = 1/500,000)…… 1
図 2　和食城跡調査地点(S = 1/50,000) …… 2
図 3　和食城跡調査地点(S = 1/750) …… 2
図 4　和食城跡グリッド配置図(S = 1/500) …… 4
図 5　和食城跡周辺遺跡図(S = 1/25,000) …… 7
図 6　調査区と周辺地形測量図及城館名称
(S = 1/500) …… 8
図 7　調査区土層図(S = 1/30) …… 9
図 8　北土塁・櫓台・虎口・東土塁地形図
(S = 1/150) …… 10
図 9　1 号鍛冶炉(SH1001)遺構図及び周辺出土遺物図(1)
…… 12
図 10　1 号鍛冶炉(SH1001)周辺出土遺物図 (2) …… 13
図 11　1 号鍛冶炉(SH1001)周辺出土遺物図 (3) …… 14
図 12　1 号鍛冶炉(SH1001)周辺出土遺物図 (4) …… 15
図 13　1 号鍛冶炉(SH1001)周辺出土遺物図 (5) …… 16
図 14　虎口・土橋付近土層図(1)(S = 1/75) …… 16
図 14　虎口・土橋付近土層図(2)(S = 1/75) …… 17
図 15　虎口付近土層図(S = 1/50) …… 18
図 16　東側土塁土層(S = 1/75) …… 19
図 17　櫓台土層図(S = 1/75) …… 20
図 18　北土塁土層図(1)(S = 1/50) …… 21
図 19　北土塁土層図(2)(S = 1/50) …… 22
図 20　土塁出土遺物図(1) …… 25
図 21　土塁出土遺物図(2) …… 26
図 22　土塁出土遺物図(3) …… 27
図 23　土塁出土遺物図(4) …… 28
図 24　土塁出土遺物図(5) …… 29
図 25　土塁出土遺物図(6) …… 30
図 26　土塁出土遺物図(7) …… 31
図 27　土塁出土遺物図(8) …… 32
図 28　北側土塁下部集石 …… 33
図 29　西側土塁地形測量図(S = 1/75) …… 33
図 30　第 2 遺構面遺構配置図(S = 1/400) …… 34
図 31　溝状遺構(SD)遺構図 …… 35
図 32　溝状遺構(SD)出土遺物図 …… 36
図 33　土坑(SK)遺構図・遺物図(1) …… 36
図 34　土坑(SK)遺構図・遺物図(2) …… 37
図 35　土坑(SK)遺構図・遺物図(3) …… 38
図 36　土坑(SK)遺構図・遺物図(4) …… 40
図 37　土坑(SK)遺物図(5) …… 41
図 38　土坑(SK)遺構図・遺物図(6) …… 42
図 39　土坑(SK)遺構図・遺物図(7) …… 43
図 40　土坑(SK)遺構図・遺物図(8) …… 44
図 41　土坑(SK)遺物図(9) …… 45
図 42　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図(1) …… 46
図 43　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図(2) …… 47
図 44　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図(3) …… 48
図 45　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図(4) …… 49
図 46　1 号性格不明遺構(SX2001)遺構図 …… 52
図 47　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(1) …… 53
図 48　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(2) …… 54
図 49　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(3) …… 55
図 50　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(4) …… 56
図 51　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(5) …… 57
図 52　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(6) …… 58
図 53　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(7) …… 59
図 54　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(8) …… 60
図 55　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(9) …… 61
図 56　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(10) …… 62
図 57　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(11) …… 63
図 58　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(12) …… 64
図 59　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(13) …… 65
図 60　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(14) …… 66
図 61　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(15) …… 67
図 62　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図(16) …… 68
図 63　包含層出土遺物図(1) …… 69
図 64　包含層出土遺物図(2) …… 70
図 65　包含層出土遺物図(3) …… 71
図 66　包含層出土遺物図(4) …… 72
図 67　SX1001 出土土器群(S = 1/8) …… 75
図 68　阿波東部Ⅲ段階土器群(S = 1/8)…… 76
図 69　阿波東部Ⅳ－ 1 段階土器群(S = 1/8)…… 76
図 70　阿波東部Ⅳ－ 2 段階土器群(1) …… 77
図 71　阿波東部Ⅳ－ 2 段階土器群(2) (S = 1/8)…… 78
図 72　阿波東部Ⅳ－ 2 段階土器群(3) (S = 1/8)…… 79
図 73　阿波東部Ⅳ－ 3 段階土器群(1) (S = 1/8)…… 80
図 74　阿波東部Ⅳ－ 3 段階土器群(2) (S = 1/8)…… 81
図 75　阿波東部Ⅴ－ 1 段階土器群(S = 1/8)…… 82
図 76　阿波中世期の遺跡 …… 83
図 77　小仁宇城跡主要土器群 …… 84
図 78　円通寺遺跡・重清城跡との比較 …… 85
図 79　和食城跡縄張推定 …… 86
図 80　鷲敷の中世城館と川湊 …… 87

表 目 次

表 1　土器観察表 …… 90
表 2　土製品観察表 …… 96
表 3　石器観察表 …… 97
表 4　鉄器・関連遺物観察表 …… 98

写真図版目次

図版 1　和食城跡遠景　虎口・土橋・東堀 …… 99
図版 2　西土塁　北土塁土層　土橋北側東堀 …… 100
図版 3　1 号鍛冶炉 …… 101
図版 4　1 号鍛冶炉遺物出土状況　2 号溝状遺構　第 2 遺構面完掘状況 …… 102
図版 5　第 2 遺構面完掘状況　1 号性格不明遺構遺物出土状況 …… 103
図版 6　1 号性格不明遺構遺物出土状況 …… 104
図版 7　出土遺物 …… 105
図版 8　出土遺物 …… 106

第Ⅰ章　調査及び整理の経緯

1　発掘調査及び整理に至る経緯

和食城跡は那賀郡那賀町北東部の和食字南川に所在し、那賀川右岸の標高約 54 mの河岸段丘上に位置する。遺跡の現況は蛭子神社の境内地及び社叢で、その北側を東へ流れる那賀川の河床との比高差は約 10 mである。『徳島県遺跡地図』（徳島県教育委員会 2006）では「和食城跡」（遺跡番号 368-4）として記載されている。また社叢のクスノキなどの樹上にはボウランが着生し県指定天然記念物(植物)「ボウランの北限自生地」として昭和 38 年（1963）に指定を受けている。

遺跡の北を流れる那賀川は、その源を徳島県那賀郡の剣山山系ジロウギュウ（標高 1,930m）に発し、徳島・高知両県の県境山地の東麓に沿って南下した後に東へと流れを変え、支川を合わせて那賀川平野に出た後に紀伊水道に注ぐ、幹川流路延長 125km、流域面積 874k㎡の一級河川である。流域は平成 16 年に日降雨量 1,317mm の日本記録を観測するなど国内で最も降水量の多い地域の一つであり、急流河川であることも相まって浸水被害が度々発生する地域である。

平成 26 年 8 月の台風 11 号により、那賀川流域では甚大な浸水被害が発生した。那賀町の和食水位観測所において、昭和 25 年のジェーン台風規模洪水の水位 52.9m を大きく上回る 54.1m の水位を記録するなど未曾有の大出水となり、那賀町和食・土佐地区では 279 戸の家屋浸水被害があった。こう

図Ⅰ　和食城跡位置図（S=1/500,000）

図２　和食城跡調査地点（S=1/50,000）

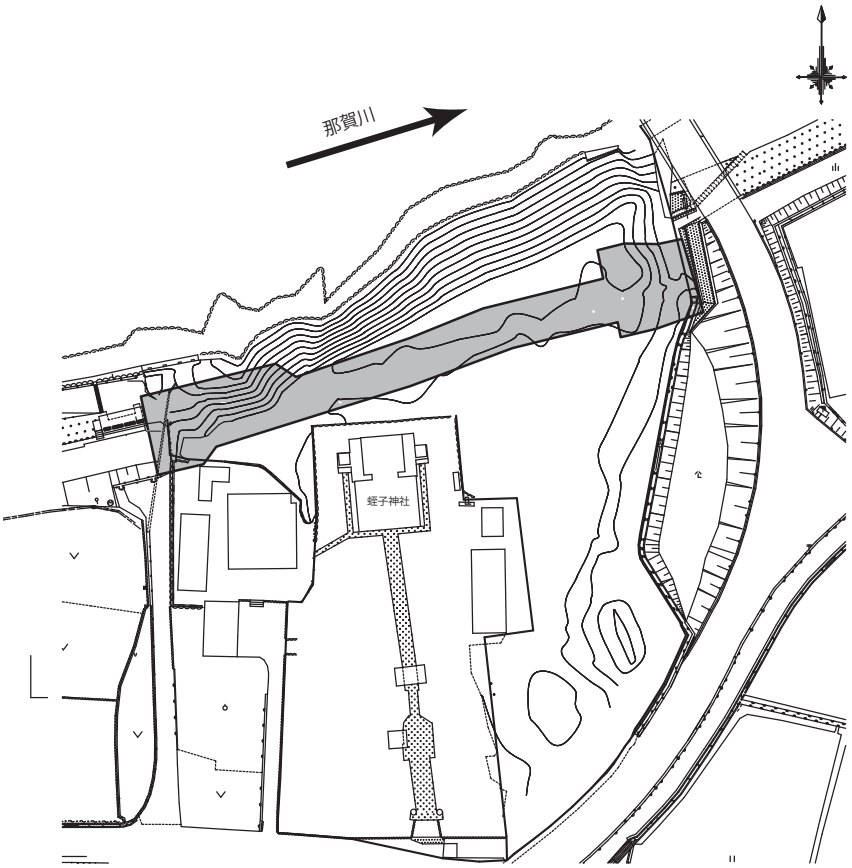


図３　和食城跡調査地点（S=1/750）

した記録的浸水被害の対策として、徳島県では「再度災害防止対策」、「事前防災・減災対策」として無堤地区の早期解消を図るべく、国に対して政策提言を行ってきた。その結果、平成 27 年度より平成 31 年度までの 5 年間で集中的に堤防を整備し、「再度災害」の防止を図るための床上浸水対策特別緊急事業の新規採択を受け、堤防の建設計画が事業化されることとなった。

床上浸水対策特別緊急事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成 27 年 9 月 3 日に徳島県県土整備部河川整備課（以下「河川整備課」という。）と徳島県教育委員会教育文化政策課（平成 28 年 4 月「教育文化課」、令和元年 5 月「県民環境部スポーツ・文化局文化資源活用課」を経て、令和 2 年 4 月より「未来創生文化部文化資源活用課」となる。）の間で協議が持たれ、起業地内の遺跡の有無とその取扱いについて早急に決定する必要性があるため、条件が整った箇所から順次現地確認と試掘調査を行うこと、堤防建設によって遺跡が損なわれる部分については工事着手前に埋蔵文化財発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることで合意した。これらの協議を経て、徳島県南部総合県民局（以下「南部総合県民局」という。）から教育文化政策課に試掘調査の依頼（平成 27 年 12 月 15 日南総第 35865 号）があり、教育文化政策課が承諾（平成 27 年 12 月 22 日教文課第 652 号）し試掘調査を開始した。

和食城跡については令和2年 3 月 3 日付けで地権者の承諾を得て、同年 3 月 24 日に堤防工事予定地内の 4 箇所にトレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、各トレンチにおいて城跡の土塁盛土とその下層に弥生時代中期末から中世の包含層と遺構面を確認した。この結果により文化資源活用課は河川整備課と調査面積、期間及び開始時期などについて協議し、令和 2 年度に発掘調査を実施することとした。

堤防予定地は蛭子神社本殿北側の社叢内を東西に横断する形で設定されており、境内にはスギをはじめクスノキ、イヌマキなど巨樹が立ち並び、中低木が密生する。また、蛭子神社の境内地は県指定天然記念物「ボウランの北限自生地」の範囲にあたることから、試掘調査については令和 2 年 3 月 6 日に現状変更許可申請書が徳島県知事から提出され、同年 3 月 24 日の許可後に実施した。また、発掘調査と堤防建設工事については令和 2 年 4 月 1 日に現状変更許可申請書が提出され、同年 4 月 13 日に許可された後の着手となった。起業地内の樹木については南部総合県民局により伐採されたが、社叢であるため存置されるものもあり、調査を実施する際にその保守に細心の注意を払った。

この発掘調査については、徳島県が公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」という。）に委託して実施した。発掘調査は令和 2 年 5 月 1 日から令和 2 年 6 月 30 日までの 2 ヶ月間で、表面積 650 ㎡、延べ面積 1,220 ㎡について実施した。土塁や堀の規模や構造を把握するとともに、土塁の下層から平安時代から室町時代、さらに下層において弥生時代中期末から後期初頭の遺構を確認し、総数 8,990 点、コンテナ 53 箱分の遺物が出土した。

出土品整理業務については、文化資源活用課と河川整備課との協議により、令和 3 年度に 5 ヶ月間で実施すること、埋蔵文化財センターに委託して実施することなどを決定し、令和 3 年 4 月 1 日から令和 3 年 8 月 31 日まで、遺物の洗浄、注記、接合復元などの基礎整理を中心に実施したほか、遺物・遺構のトレース、写真撮影、報告文執筆等、報告書の刊行に向けて作業を行った。（文化資源活用課）

2　発掘調査の方法

和食城跡の内、今回発掘調査対象区は床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）に伴う堤防建設予定地である蛭子神社本殿北側の社叢内を東西に横断する形で設定した。調査によって検出した遺構・

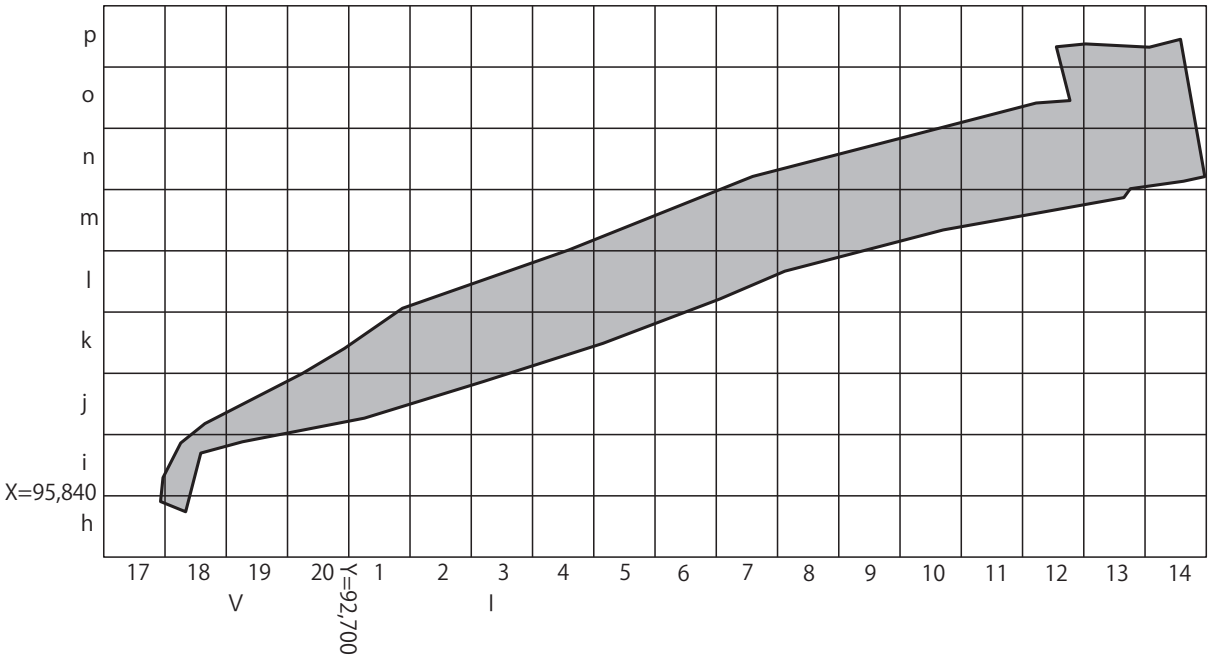


図４　和食城跡グリッド配置図（S=1/500）

遺物などの測量・図化に関しては世界測地系を基準に用いた。高さについては東京湾中等潮位（T.P）を用いた。

グリッド設定に関しては、平成 29 年度小仁宇城跡発掘調査時に設定されたグリッドを延長・使用した。小仁宇城跡調査地点の南西側にあたる X=95,700.000、Y=91,300.000 を基点として、一辺 500m の大グリッド及び一辺 100m の中グリッドを設定した。調査対象地の一辺 5m の小グリッドは X=95,839.000 、Y = 92,684.000 を南西隅の基点として、5m 毎に北方向に a ～ t、東方向に 1 ～ 20 を付与し、アルファベットと数字の組み合わせにより小グリッド一つずつを a1、b2 のように表記した。

3　発掘調査の経過

床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）に伴う発掘調査は令和 2 年 4 月 1 日～ 6 月 30 日までの 3 ヶ月、それぞれ 1 班体制で実施した。その内、小仁宇城跡は 4 月 1 日～ 4 月 30 日である。和食城跡は 5 月 1 日～ 6 月 30 日に表面積 650 ㎡、第 1 遺構面 650 ㎡、第 2 遺構面 570 ㎡、延べ 2,220 ㎡に着手した。

4　発掘調査・整理作業の体制

令和 2 年度（2020 年度）

・事務局

理事長　福家清司　　事務局長　湯浅利彦　　（総務課）課長　藤川智之

庶務係主査　島田佳世子　　事務嘱託員　岩塚章代　谷口絵梨子　八木恵里

(事業課)課長　氏家敏之

・発掘調査業務担当
　研究主査　　辻佳伸　　研究補助員　飯田悠衣
令和３年度（2021 年度）
・事務局
　所　長　福家清司　　事務局長　湯浅利彦　　次長　藤川智之　　(総務課)課長　原田明博
　庶務係主任　藤田吉則　　事務嘱託員　岩塚章代　大尾梨絵　八木恵里
　(事業課)第２課長　氏家敏之
・整理業務担当
　研究主幹　大橋育順

5　調査日誌

2020（令和２）年
４月１日(水) 雨　　辞令交付
４月２日(木) 曇晴　リース現説
４月３日(金) 晴　　小仁宇城跡・現地打ち合わせ
４月７日(火) 晴　　伐採樹木の確認
４月13日(月) 雨／曇　　小仁宇城跡機械掘削開始
４月16日(木) 晴　　小仁宇城跡人力掘削
４月17日(金) 晴／曇　　小仁宇城跡土橋断ち割り・土橋写真撮影
４月21日(火) 晴　　小仁宇城跡曲輪西端測量
４月28日(火) 晴　　小仁宇城跡空堀完掘
４月30日(木) 晴　　小仁宇城跡完掘写真撮影

和食城跡
５月１日(金) 晴　　虎口・土橋機械掘削
５月８日(金) 晴　　人力掘削
５月12日(火) 晴　　北側及び東側土塁・堀・人力掘削
５月19日(火) 晴　　西側土塁人力掘削
５月20日(水) 晴　　北側、東側及び西側土塁･堀･虎口人力掘削
５月21日(木) 晴　　小仁宇城跡埋め戻し
５月27日(水) 晴　　西側土塁、虎口、北側土塁 10-20m 地点人力掘削
５月28日(木) 晴　　北側土塁撤去機械掘削開始（西側から）
５月30日(土) 晴　　北側土塁 35-45m 地点人力掘削
６月１日(月) 晴　　虎口周辺精査及び掘削
６月４日(木) 晴　　B 地区 C 地区精査、D 地区遺構掘削
６月５日(金) 晴　　虎口周辺空撮
６月６日(土) 晴曇　測量
６月８日(月) 晴　　蛭子神社氏子説明会
６月９日(火) 晴　　B 地区機械掘削、C 地区遺構検出、D 地区遺構掘削
６月14日(日) 晴　　東側土塁断ち割り、虎口鍛冶炉跡
６月16日(火) 晴　　土橋断ち割り
６月20日(土) 晴　　B 地区遺構掘削、虎口機械掘削
６月22日(月) 晴　　SP・SK・北側土塁測量
６月29日(月) 晴　　北側土塁精査、SB 完掘
６月30日(火) 雨　　撤収

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

四国東部には、吉野川北岸の讃岐山脈南麓を東西に横断する中央構造線が存在する。この中央構造線は、境界断層であり、地質構造の違いからこれより北側を西南日本内帯、南側を西南日本外帯と呼んでいる。西南日本内帯のうち、四国には領家帯が存在し、中央構造線に接している。領家帯は、和歌山沖の南海トラフで沈み込むフィリピン海プレートの影響によって、マグマ上昇に伴い発生した高温低圧の変成岩や花崗岩で形成される。また、西南日本内帯の南縁部には、和泉層群が領家帯の上に帯状に堆積している。それは松山平野の南西から徳島県と香川県境にある讃岐山脈南麓、淡路島南部の諭鶴羽山地を通り大阪府と和歌山県の境にある和泉山脈に至るまで、東西 300 ㎞、南北幅最大 15 ㎞にわたっている。この和泉層群は、主に海底で堆積した砂岩・礫岩・泥岩からなり、中央構造線の左横ずれ断層運動による沈降で形成された海盆への堆積層である。

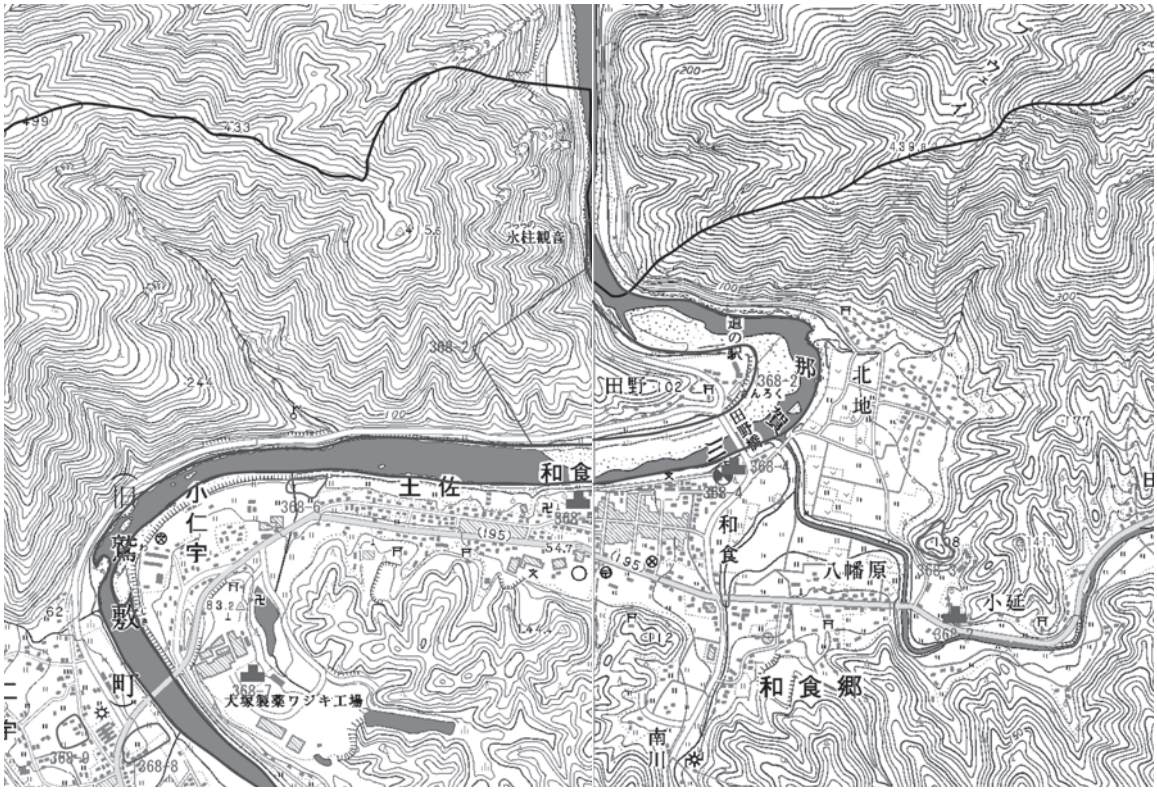
西南日本外帯のうち、四国には北から順に三波川帯・御荷鉾帯・秩父帯・四万十帯が形成されている。御荷鉾帯は、三波川帯と秩父帯との境界に断続的に弱く帯状に分布する地層である。それらの間には、西南日本内帯との境界をなす中央構造線、三波川帯と秩父帯の境界をなす御荷鉾構造線、秩父帯と四万十帯の境界をなす仏像構造線が東西方向に延びている。三波川帯はフィリピン海プレートの沈み込を受け低温高圧型の変成を受け、緑色結晶片岩、緑色片岩と泥質片岩が重なり合う層から成る。吉野川にこれらの岩石が認められるのはこのためである。西南日本外帯は壮年期の険しい地形で平地が極めて少なく、急峻な四国山地がそびえている。そのため、徳島県は、面積 4,144.23 ㎢のうち、約 8 割を山地で占め、平野は約 2 割である。

徳島県の河川は、四国山地北側の吉野川水系と南部の那賀川水系、勝浦川など四国山地から東流して紀伊水道に注ぐ河川が代表的である。これら河川は境界断層による構造線の影響を受けており、吉野川は中央構造線、勝浦川は御荷鉾構造線、那賀川は仏像構造線に沿うように流れている。小仁宇城跡の所在する那賀町の中央部には那賀川が流れている。那賀川は剣山山系に源を発し、高の瀬峡を経て南流し、やがて東へと向きを変える。中流域においては蛇行を繰り返し、阿南市域の平野部に達すると再び東へ向きを変えて紀伊水道へと注いでいる。中流域である那賀町域では河岸段丘が形成されており、確認されている遺跡の多くは段丘上に立地している。

和食城跡は、那賀川と支流である中山川や菊川の合流部分に位置しており、河岸段丘縁の標高約 55m 地点に立地している。

2　歴史的環境（図 5）

那賀川流域に最初に人類の痕跡が現れるのは後期旧石器時代にまで遡る。那賀町延野大原の段丘上からサヌカイトとチャートのナイフ形石器が採集されている（高島 1995）。縄文時代の遺跡としては古屋岩陰遺跡から早期の土器が出土している。また阿南市域に入ると加茂町加茂宮ノ前遺跡や深瀬町深瀬遺跡などでは前期～後期にかけての集落が形成されており、長期間にわたり生活が営まれていたことがわ



368-2：岡城跡　368-3：茨ヶ岡城跡　368-4：和食城跡　368-5：鶴城跡　368-6：小仁宇城跡
368-7：柳谷塁跡

図５　和食城跡周辺遺跡図（S=1/25,000）

かる（原 2015、田川 2018・2019）。弥生時代には辰砂原産地である若杉山遺跡周辺において水銀朱の生産活動が盛んとなり、加茂宮ノ前遺跡では多量の水銀朱生産関連遺物が出土している（田川 2018）。

旧鷲敷町域においては、これまでに発掘調査は行われていないが、那賀町内においても阿井から仁宇にかけての地域では縄文時代遺物が採集されている（高島 1995）。平安時代、那賀川流域一帯には広大な国衙領那賀山が成立していたが、鎌倉時代初めに長講堂領とされた。室町時代には守護細川氏や天龍寺などが材木の権益を求めて進出する。室町・戦国期になると土佐街道の要衝である旧鷲敷町域には多くの城が築かれている。『鷲敷町史』の中では、『阿波志』、『阿波国那賀郡村誌』の記述の引用などから、小仁宇城、仁宇城、柳谷塁、鶴城、和食城、岡城、茨ヶ岡城などが、それぞれ比定されている。

参考文献

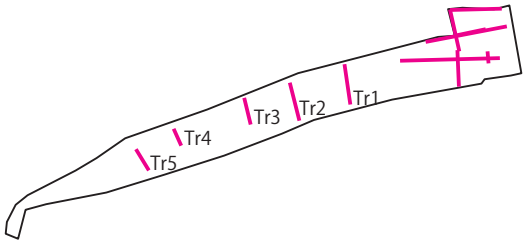
鷲敷町 1981『鷲敷町史』徳島県那賀郡鷲敷町町史編纂委員会
阿波学会 1983『総合学術調査報告　鷲敷町　郷土研究発表会紀要』第 29 号
氏家敏之 2021『小仁宇城跡　床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 95 集
高島芳弘他 1995「那賀川流域における縄文遺跡の分布とその遺物」『徳島県立博物館研究報告』第 5 号
徳島県教育委員会 2011『徳島県の中世城館』
原芳伸 2015『深瀬遺跡－那賀川河川改修事業（深瀬堤防）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（公財）徳島県埋蔵文化財センター
田川憲 2018「加茂宮ノ前遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.29　（公財）徳島県埋蔵文化財センター
田川憲 2019「加茂宮ノ前遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.30　（公財）徳島県埋蔵文化財センター
向井公紀 2019『若杉山遺跡発掘調査報告書』阿南市

第Ⅲ章　調査成果

1　遺跡の現況（図 6）

和食城跡は、那賀郡那賀町和食字南川 157-1 に所在する。那賀川右岸の標高約 54m の河岸段丘上に展開し、小仁宇城跡から那賀川沿いに約 1.2 ㎞隔たった地点に位置する。現在は蛭子神社境内である。蛭子神社本殿北側の社叢が堤防建設予定地と重なることにより、調査にあたって対象地内に密生する巨木や中低木は、徳島県南部総合県民局により伐採されたが、社叢であるために存置される樹木もあり、その保守に努めた。また蛭子神社境内地は徳島県指定天然記念物「ボウランの北限自生地」に該当することから発掘調査と堤防建設工事について事前に徳島県南部総合県民局から徳島県に現状変更許可申請が提出され、許可後の作業着手となった。

図 6　調査区と周辺地形測量図及城館名称（S=1/500）



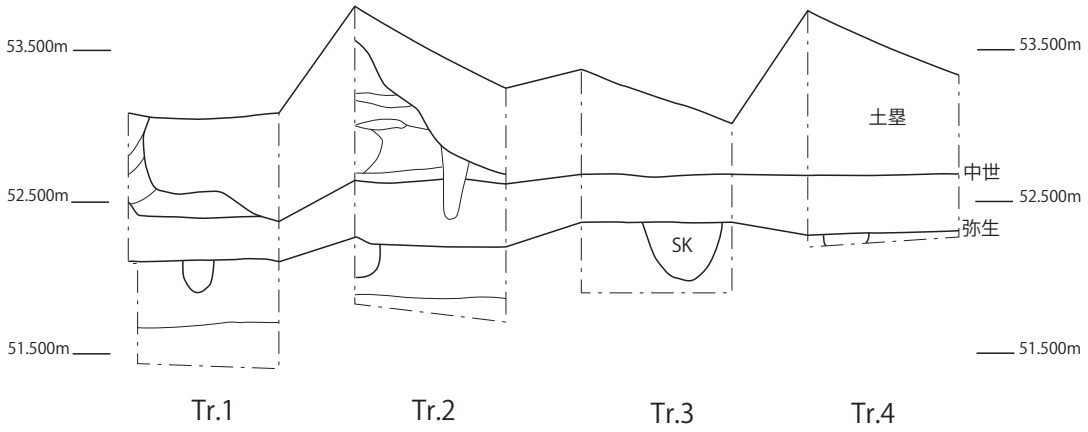


図 7　調査区土層図（S=1/30）

2　基本層序（図 7）

北側土墨では表土直下で土墨盛土が確認された。表土を除去した土墨確認面が第 1 遺構面となる。土墨盛土は第 1 トレンチにおいて厚さ約 1.5m 程度盛られている。土墨下層 T.P52.5m 付近からは鉄分を多く含む黄灰色～青灰色粘質土層が厚さ 5 ～ 10 ㎝程度堆積していることが確認された。この粘質土層は調査区全域の土墨基底部直下において検出されており、粘質土層直下のにぶい黄褐色シルト質土面が土墨構築直前の中世から近世初頭にかけての遺構面に該当し第 2 遺構面である。このにぶい黄褐色シルト質土層中には弥生時代中期末から後期初頭に属する土器等が含まれており、遺物包含層である。その下層の T.P52.1m 付近のにぶい黄褐色細砂混じりシルト質土上面が弥生時代中期末～後期初頭の遺構面に該当し第 3 遺構面である。第 3 遺構面以下は黄褐色系砂混じりシルト層から砂層への漸移的に変化する無遺物自然堆積層である。

調査区東端では第 3 遺構面黄褐色細砂混じりシルト質土が T.P50m 付近まで堆積し、T.P49.5m 付近には黒色粘質土層、T.P48.5m までは明黄褐色粘質土が、以下は明黄褐色砂混じり粘質土が堆積する。第 3 遺構面黄褐色細砂混じりシルト質土は西から東へと緩やかに傾斜している。

土墨直下の第 2 位遺構面においては遺構密度は疎であり、蛭子神社本殿背後付近を中心に平安時代から室町時代の遺構・遺物が確認されただけである。本報告では、第 3 遺構面と併せて第 2 遺構面としてまとめて記載することとする。

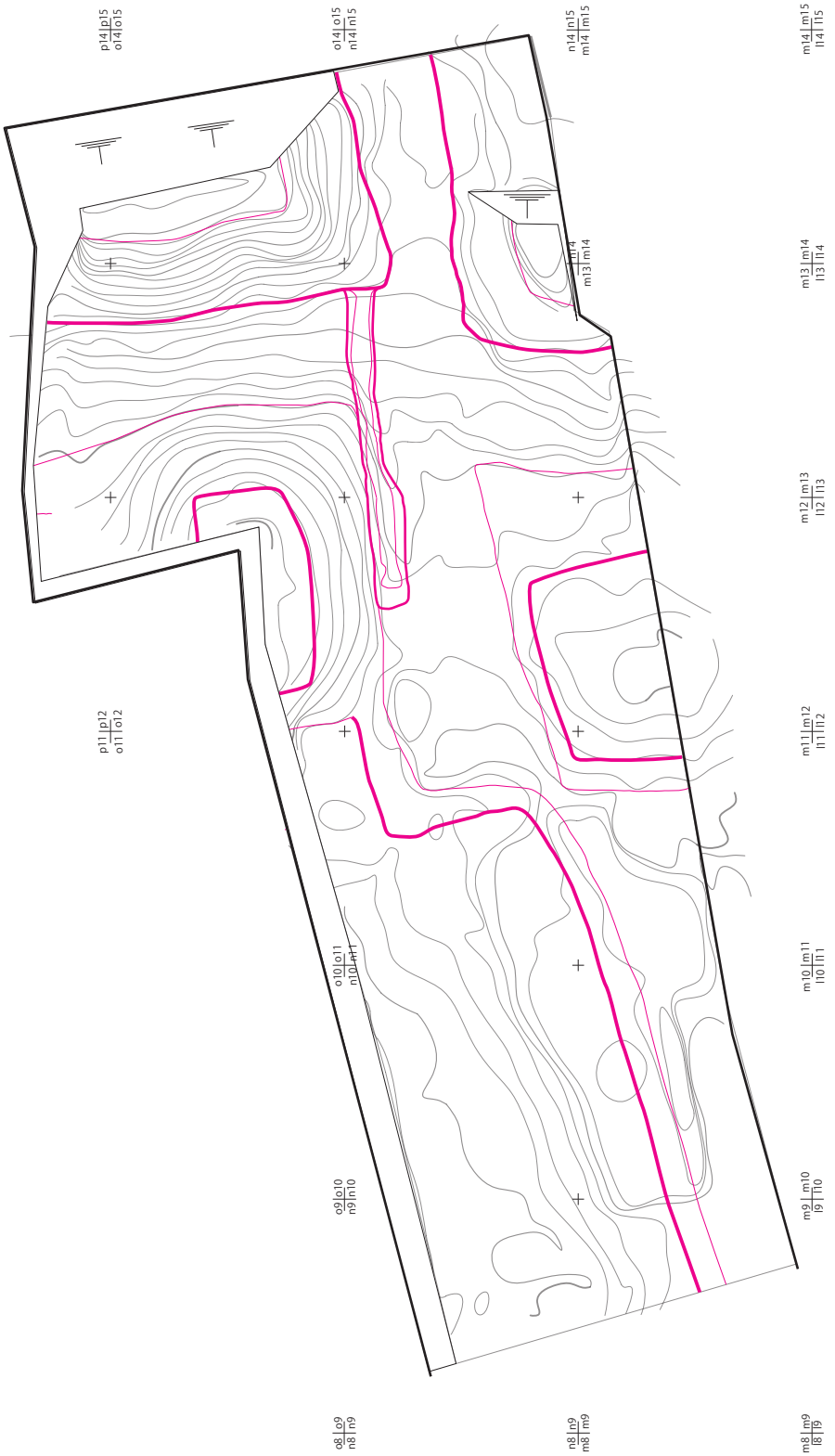


図８　北土塁・櫓台・虎口・東土塁地形図（S=1/150）

3　調査成果

(1) 第 1 遺構面（図 8）

第 1 遺構面では、北土塁・東土塁・西土塁、及び東堀・土橋・虎口の調査を行った。

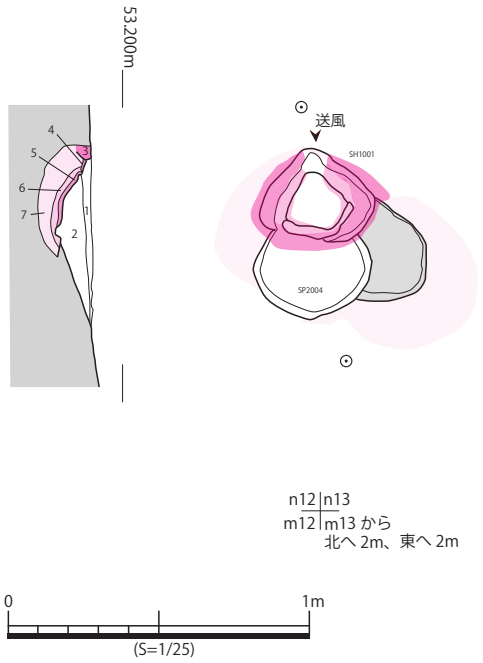
1 号鍛冶炉（SH1001）（図 9 ～）

n13 グリッドにて検出された鍛冶炉である。平面形態は不正三角形、断面形態は皿形を呈し、主軸 30.7 ㎝、直交軸 37.5 ㎝、深度 9.6 ㎝を測る。木炭ピットが敷設されている。

遺構覆土、1 層は灰黄褐色（10YR5/2）シルト質土で炭化物や鉄滓を含む。2 層は暗褐色（10YR3/3）シルト質土で炭化物､焼土粒､木炭を多く含み､鉄滓も含む。3 層は赤褐色（5YR4/6）シルト質土である。4 層は橙色（5YR7/6）シルト質で被熱硬化赤変する。5 層は明赤褐色（5YR5/8）シルト質土で被熱硬化赤変する。6 層は黒褐色（10YR3/1）シルト質土で被熱硬化する。7 層は灰白色（10YR8/1）シルト質土で被熱硬化する。

不整三角形の頂点部分は、浅く掘り込まれているが、被熱赤変は少ないことから送風のための鞴羽口敷設箇所となる。羽口先端直下の平坦面は橙色に被熱赤変し、炉基底部は灰白色まで被熱している。東側の木炭ピットは浅く木炭が堆積しており、操業時に使用する木炭を除湿保温するための保管場所、もしくは操業後の清掃に伴う廃棄土坑の可能性がある。

1 は東堀から出土した管状土錘である。3、4、5 は肥前系碗および皿である。2、6、7、8、9 は鞴羽口である。外面には同一幅の平坦面があることから簾成形による。M1 は鍛造の鋤先である。M3 は環状留金具である。棒状鉄器を環頭部を折り曲げて形成しており、足先端部は尖ることから柱等に打ち込んで使用したと推定される。M4 ～ M7、M10 は椀形滓で、いずれも推定直径は 15 ㎝弱となる。身は椀形滓であるが推定直径 20 ㎝を超える。M9、M11、M12、M13 は板状を呈しメタルを多く残すことから素材の可能性がある。S1 は粘板岩薄片である。S2 はチャート製石鏃である。



椀形鉄滓にはメタルが残ることや羽口法量から精錬鍛冶に伴う炉であり、構築面や関連遺物が東堀内や土塁崩落土内から出土することから、慶長期の蛭子神社遷宮以降の操業に伴う遺構および遺物と位置づけられる。

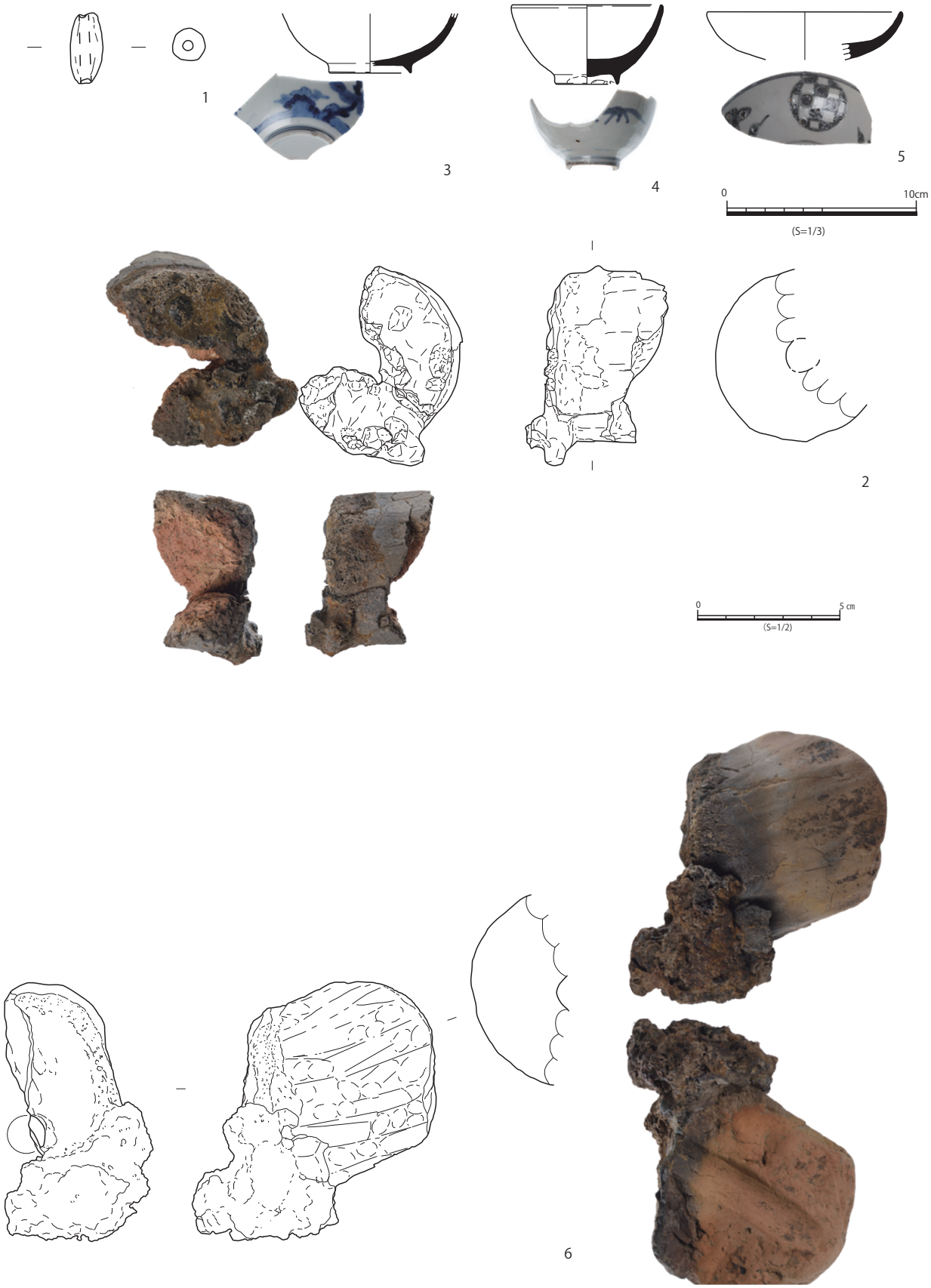


図９　１号鍛冶炉（SH1001）遺構図及び周辺出土遺物図（1）

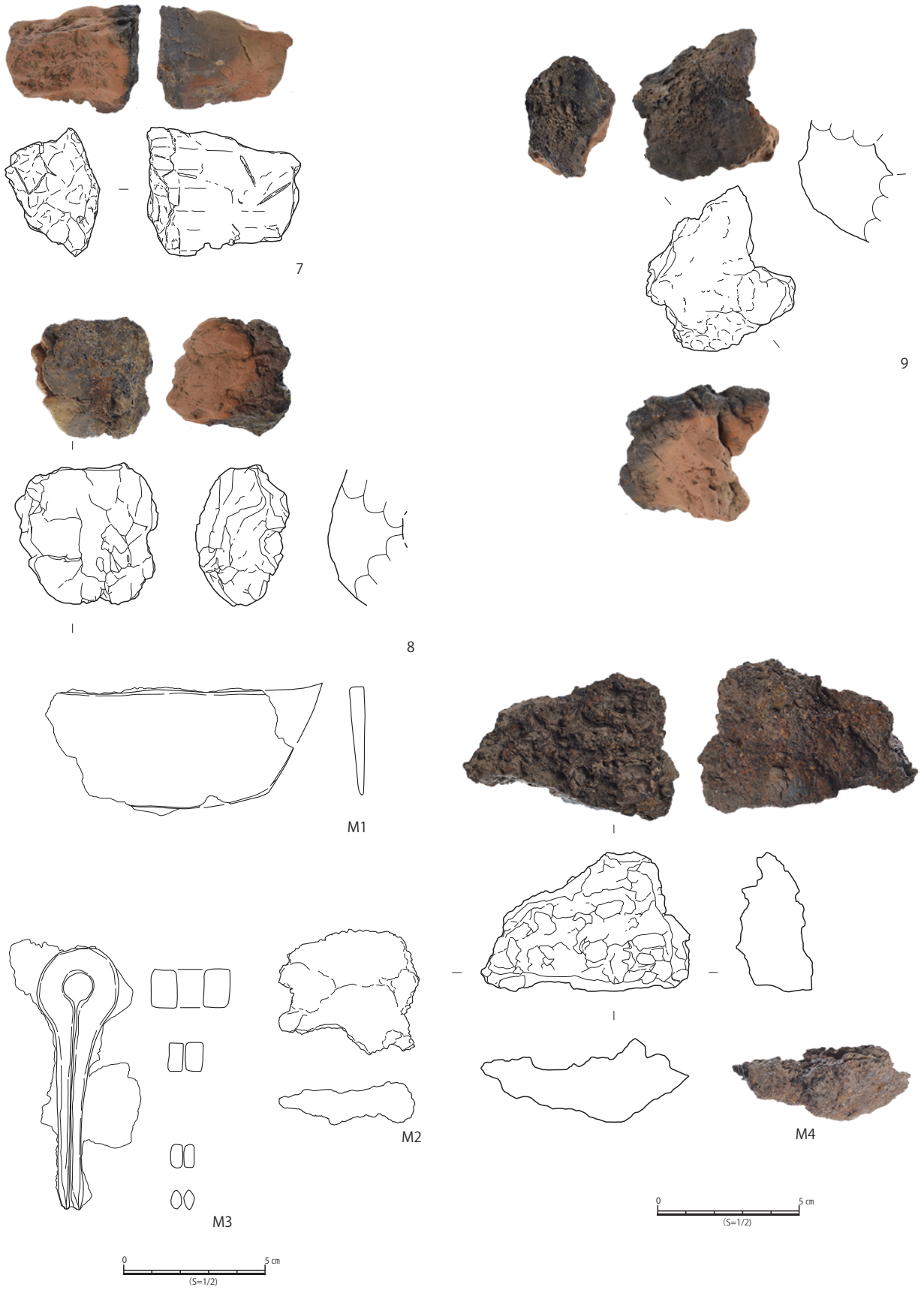


図 10　1 号鍛冶炉（SH1001）周辺出土遺物図（2）

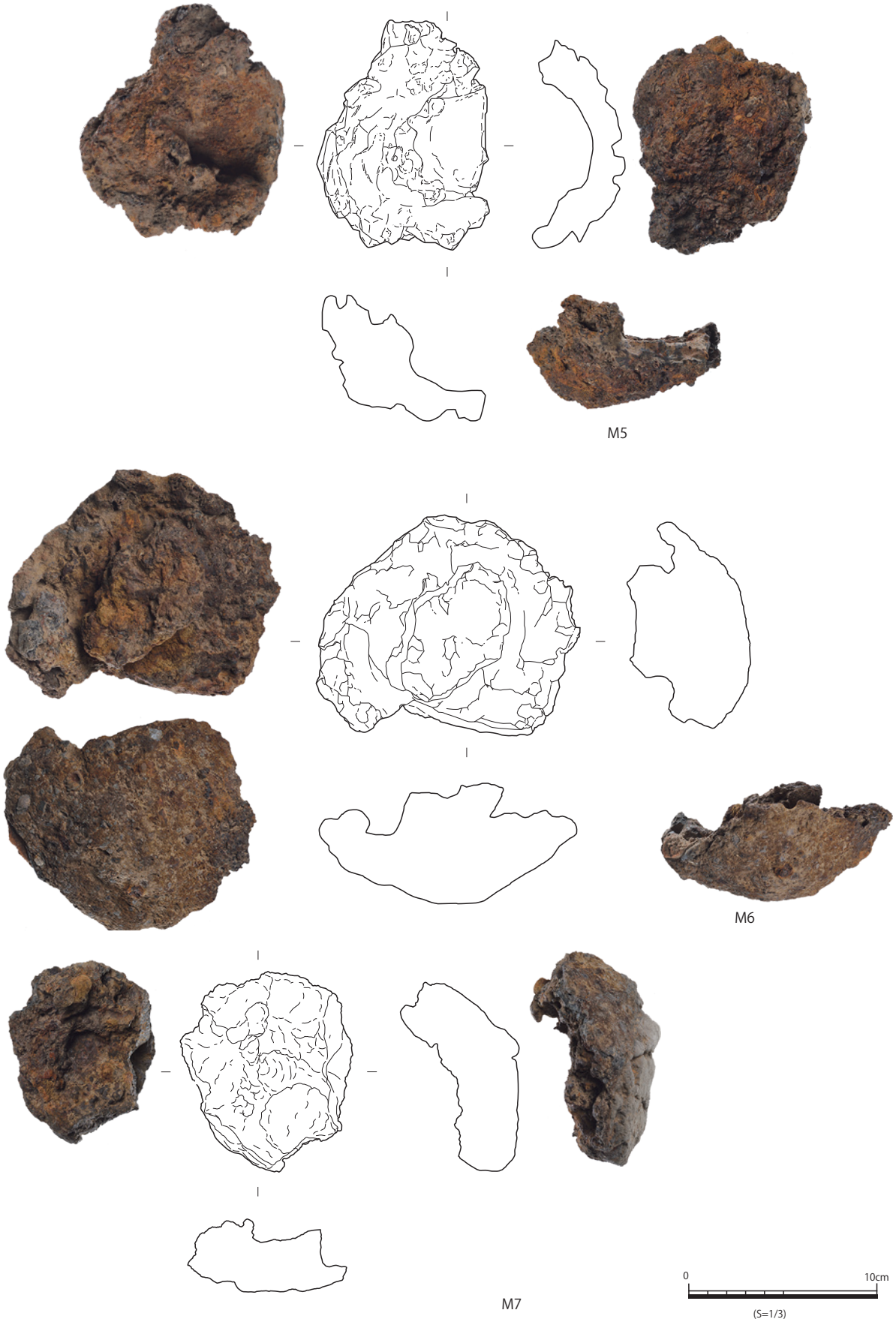


図11　1号鍛冶炉（SH1001）周辺出土遺物図（3）

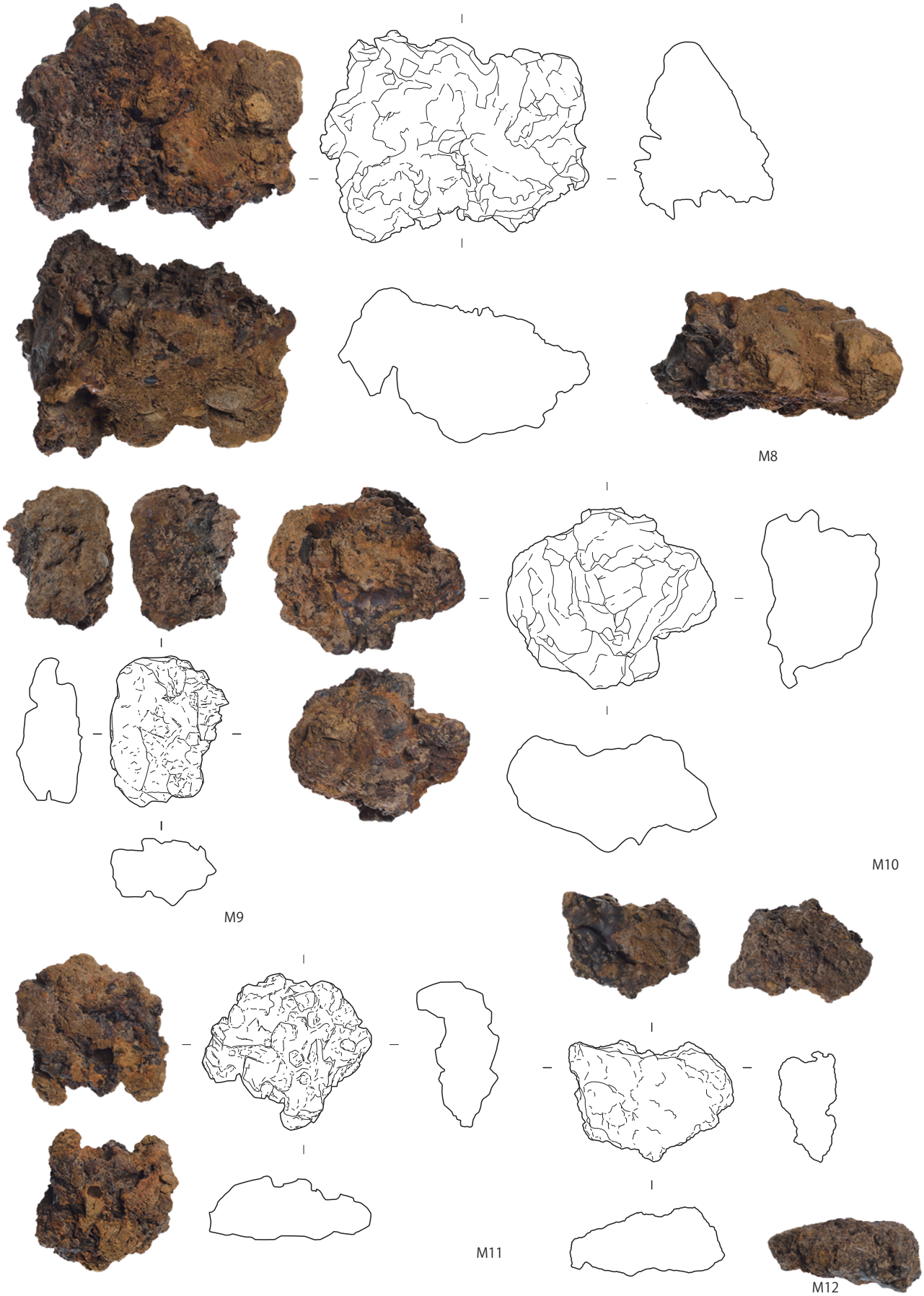


図 12　1 号鍛冶炉（SH1001）周辺出土遺物図（4）

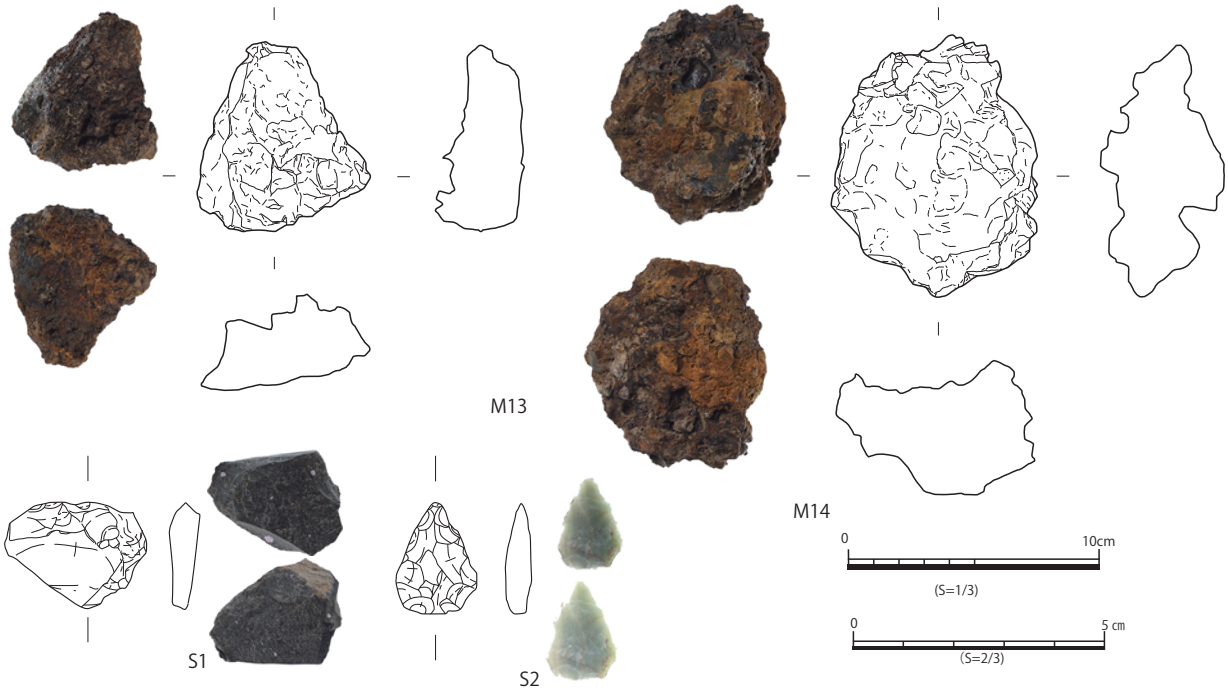


図 13　1 号鍛冶炉（SH1001）周辺出土遺物図（5）

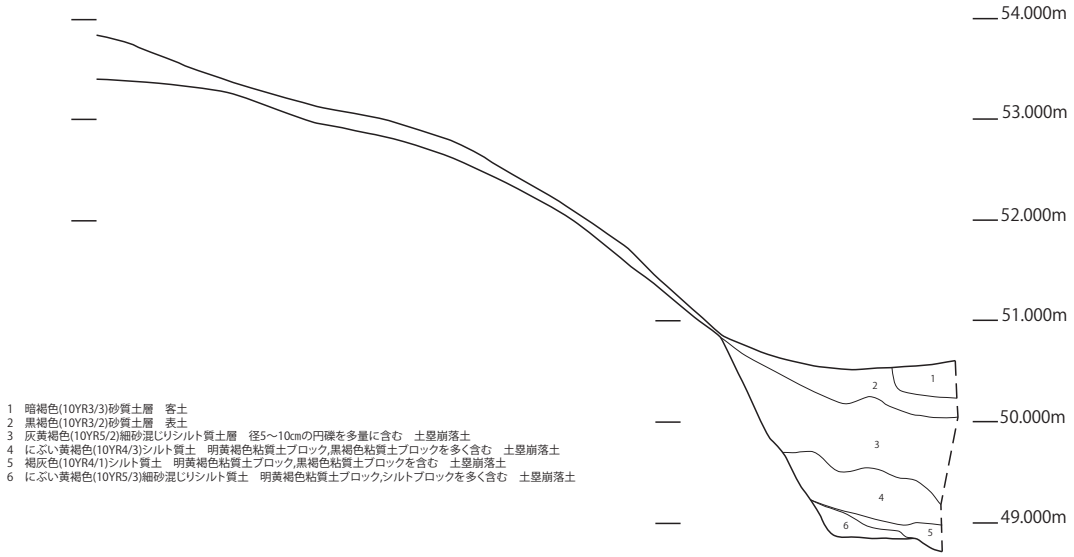
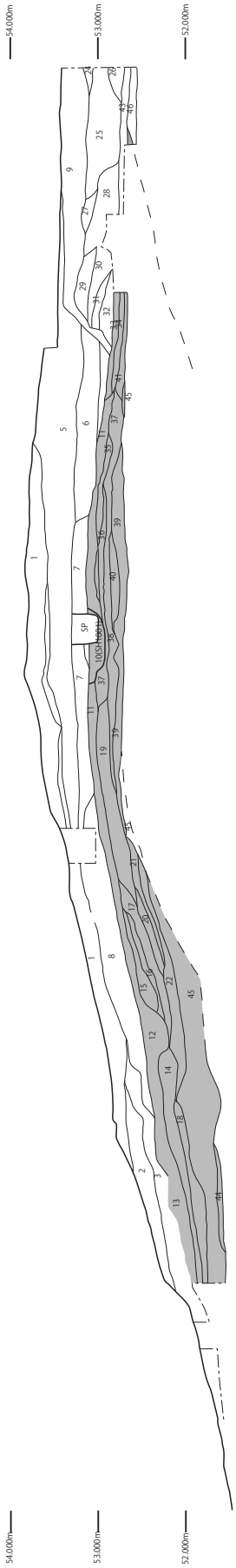


図 14　虎口・土橋付近土層図（1）（S=1/75）



1　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　表土
2　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂　径5～40㎜円礫多く含む30㎝大円礫を含む
3　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
4　にぶい黄褐色（10YR5/3)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
5　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　炭化物含む
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混じりシルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
8　灰黄褐色(10YR4/2)砂礫層　径1～4㎝円礫を多く含む
9　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土
10　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　炭化物,焼土ブロックを多く含む　炉覆土
11　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土
　　黒褐色粘質土ブロック、黒色粘質土ブロック含む表面が焼き締まる　鉄分沈殿　微小鉄片炉周辺に拡がる
12　明黄褐色(10YR6/8)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質土
14　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
15　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
16　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
17　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
18　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土　黒褐色粘質土ブロックと明黄褐色粘質土の混合層
19　黄褐色(2.5Y5/3)細砂混じりシルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
20　黄褐色(2.5Y5/3)細砂混じりシルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
21　黄灰色(2.5Y6/1)シルト質土
22　黄灰色(2.5Y6/1)細砂混じりシルト質土
23　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒褐色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
24　暗褐色(10YR3/3)砂質土　径1～4㎝の円礫を含む粗砂
25　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　径4～6㎝大の円礫角礫を多く含む
26　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　径1～3㎝の円礫を含む
27　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
28　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　径4～6㎝大の円角礫を含む
29　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
30　褐灰色(10YR4/1)細砂混じりシルト質土
31　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
32　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
33　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
34　黒褐色(10YR3/2)シルト質土　径1㎝円礫,粗砂を多く含む
35　黒褐色(10YR3/1)砂礫　径1～4㎝の円礫を含む粗砂
36　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黄褐色シルトブロックを多く含む
37　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
38　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
39　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを多く含む
40　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
41　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土
43　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
44　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土　黄灰色シルトブロック含む
45　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土　粘性,しまりあり　土塁基盤面　上面中世遺構面
46　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂混じりシルト質土　土塁基盤面　上面中世遺構面

図 14　虎口・土橋付近土層図（2）（S=1/75）

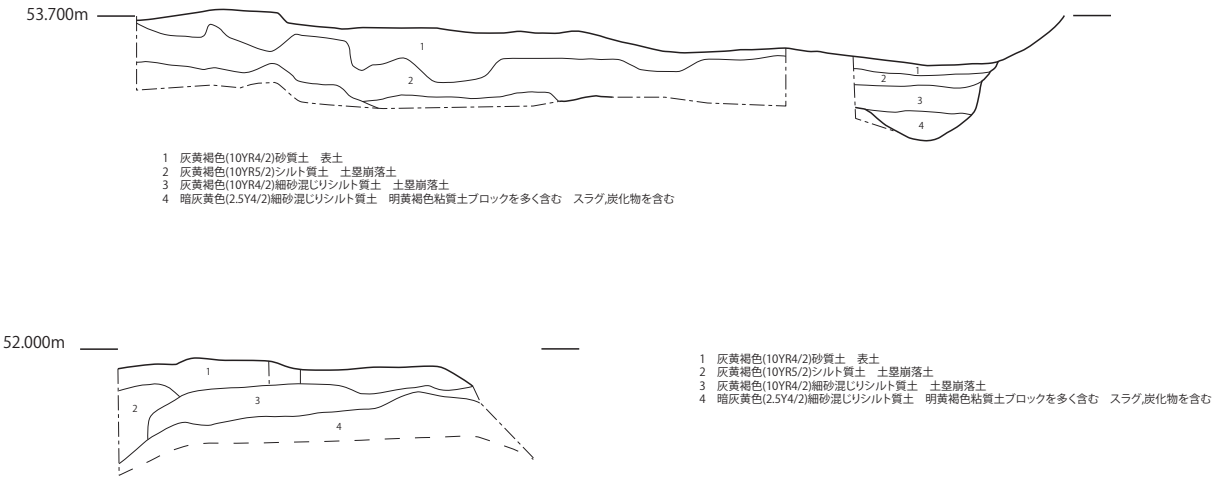


図 15　虎口付近土層図（S=1/50）

東堀

東堀は、北土塁の東端から、東土塁に平行して城域の東辺を画する。土橋を境に北側と南側に分かれる。埋没した東堀と推定される南北に連続する凹地は、土橋北側は那賀川まで延び、土橋南側は蛭子神社南辺の玉垣、町道まで連続する。土橋北側では、堀基底部標高 48.750m となり、土塁基底面から深さ 1m までは 45 度程度、以下は 60 度程度の傾斜で地山を掘り込んでおり、深さ 2.9 m（T.P.48.850m）で幅 0.7 mの平坦面を設けている。基底部は東へ向かって傾斜している。また遺構覆土は、土塁崩落土と推定される灰黄褐色細砂混じりシルト質土層やにぶい黄褐色シルト質土、褐灰色シルト質土等が主体であるが、調査区内では東側肩を想定される東側からの堆積は認められないことから、堀幅が広い可能性と、段丘崖を利用した切岸状であった可能性が想定される。

堀内覆土上層より鉄滓や鞴羽口が出土した。1 号鍛冶炉 SH1001 に関連する一群である。

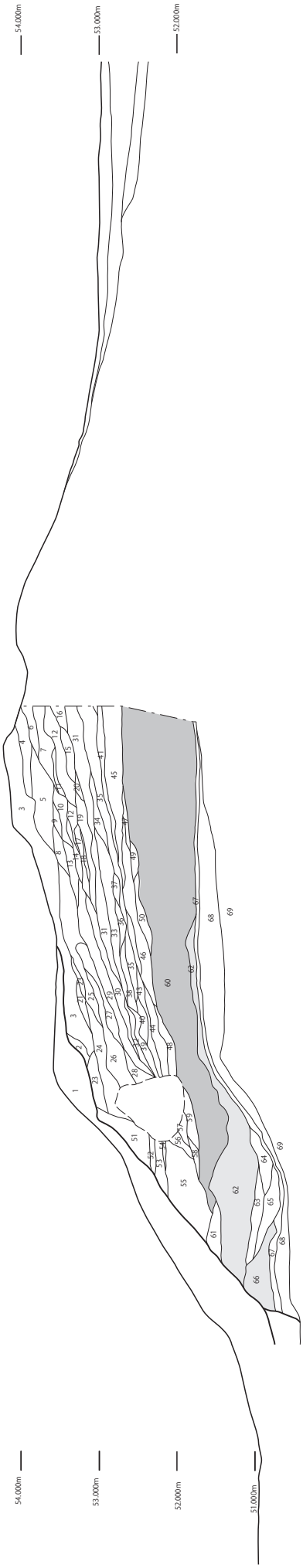
土橋

土橋は東堀を掘削する過程で地山を掘り残して造られた所謂掘り残し土橋である。上端幅 1.8 ～ 2.0 m、下端幅 4.8m を測る。虎口に向かい緩やかな登り坂となる。

東土塁

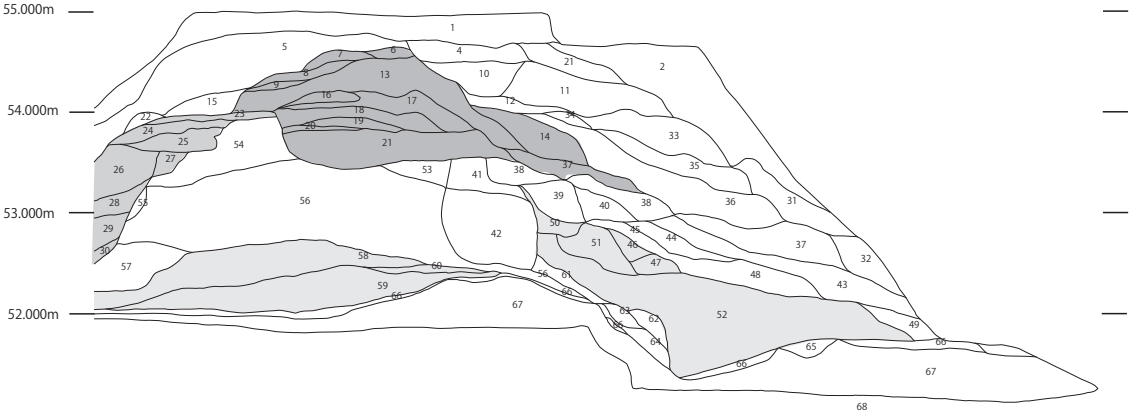
東土塁は、旧地形の河岸段丘崖に平行しする南北方向の土塁である。北端部のみを測量調査した。東西方向の断面では、基底面からの比高差 2.2m、下幅 6.0m、上幅 4.5m を測る。

土塁構築に当たっては、最初に段丘縁辺の低い箇所東端に幅 1m、高 0.4m の土手状盛土（66 層）を盛り、その内側にシルト質土（63 ～ 65 層）を充填することで徐々に平坦面を構築する。更に黄褐色粘質土（62 層）を充填することにより段差を解消する。土塁基盤層として明黄褐色シルト質土（60 層）を最大高 0.9m 盛る。この 60 層に厚 0.1 ～ 0.2m の帯状の盛土を外（東）側から被せるように傾斜して盛り掛けられる。

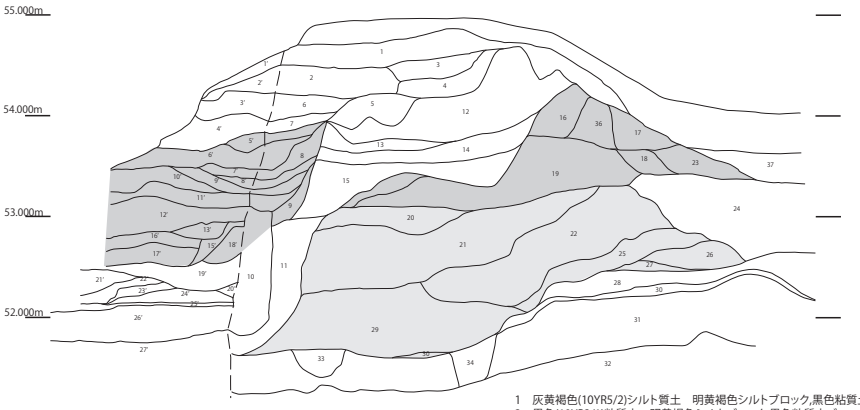


1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　表土
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
4　黄褐色(10YR5/6)シルト質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　暗褐色シルトブロック,明黄褐色シルトブロックを多く含む
6　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
7　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
8　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,黒褐色粘質土ブロックを多く含む
9　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
10　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
11　暗褐色(10YR3/3)粘質土　暗褐色粘質土ブロックと明黄褐色粘質土ブロックを主体とする
12　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,暗褐色シルトブロックを多く含む
13　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,土器粒を含む
14　褐色(10YR4/4)シルト質土
15　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
16　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
17　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
18　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
19　にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　暗褐色シルトブロック,土器粒を含む
20　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　暗褐色シルトブロックを含む
21　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　灰色シルトを含む
22　褐灰色(10YR5/1)シルト質土
23　灰黄褐色(10YR5/2)細砂混じりシルト質土
24　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
25　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
26　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
27　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
28　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
29　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
30　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
31　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロック,土器粒を含む
32　灰黄褐色(10YR6/2)シルト質土
33　褐灰色(10YR5/1)シルト質土
34　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
35　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
36　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
37　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
38　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　灰色シルトを含む
39　明黄褐色(10YR7/6)シルト質土　灰色シルトを含む
40　灰黄褐色(10YR6/2)細砂混じりシルト質土　明黄褐色粘質土ブロック,土器粒を含む
41　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
42　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土
43　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　灰色シルト質土,鉄分を含む
44　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　灰色シルトブロック,鉄分を含む
45　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
46　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
47　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
48　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　灰色シルトブロックを含む
49　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
50　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
51　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　暗褐色粘質土ブロック,明黄褐色シルトブロックを含む
52　黒色(10YR2/1)粘質土
53　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
54　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
55　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロックを含む
56　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
57　灰黄褐色(10YR6/2)細砂混じりシルト質土
58　褐灰色(10YR4/1)細砂混じりシルト質土　灰色シルトを含む
59　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土
60　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　灰色シルトブロックを含む
61　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂混じりシルト質土
62　黄褐色(10YR5/6)粘質土　10×20㎝大の黒色・暗褐色・明黄褐色粘質土ブロックが斑状に積まれる
63　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　暗褐色・明黄褐色粘質土ブロックを含む
64　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土
65　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　土器含む　中世遺構か?
66　灰色(5Y6/1)細砂混じりシルト質土　上面に土器を含む　中世遺構面
67　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　弥生土器含む　中世遺構面
68　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂混じりシルト質土　上面弥生遺構面

図 16　東側土塁土層（S=1/75）



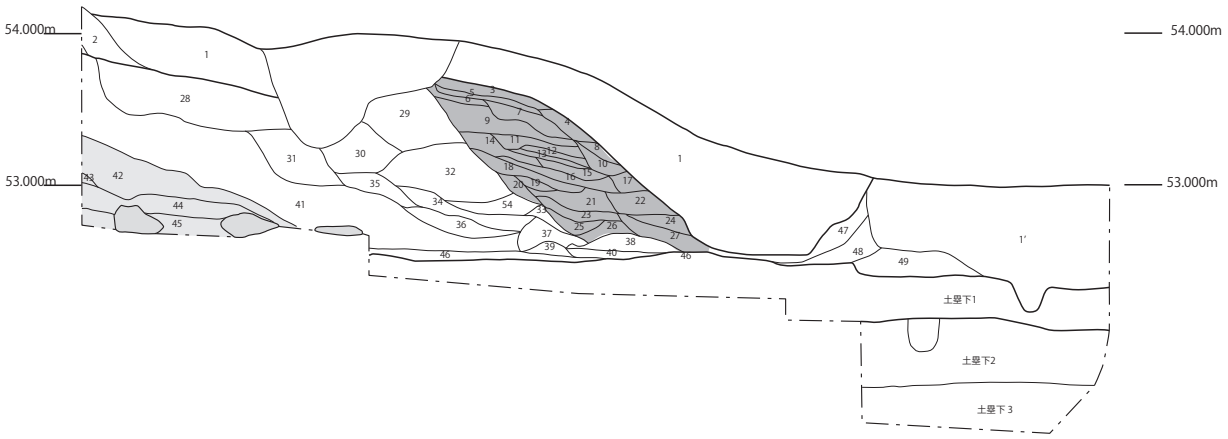
1　表土
2　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロックを含む
4　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黒色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを多く含む
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを含む
6　黒色(10YR2/1)粘質土
7　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘質土　黒色粘質土を層状に含む
8　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
9　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質土
10　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
11　黒色(10YR2/1)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを多く含む
12　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロックを含む
13　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロックを含む
14　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロックを多く含む
15　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
16　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
17　暗褐色(10YR3/3)粘質土
18　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
19　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト質土　暗褐色シルトブロックを層状に含む
20　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
21　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　計5cm程度の黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
22　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
23　褐灰色(10YR6/1)シルト質土　黒色粘質土を層状に含む
24　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,灰色シルトを含む
25　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロック,灰色シルトブロックを含む
26　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
27　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
28　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロック,灰色シルトブロックを層状に含む
29　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,灰色シルトブロックを層状に含む
30　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
31　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
32　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
33　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　径5～10cm大の黒色粘質土ブロックを多く含む
34　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
35　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを多く含む
36　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
37　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土,暗褐色粘質土を層状に含む
38　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土　黒色粘質土ブロックを含む
39　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　径5～10cm大の黒色粘質土ブロックを多く含む
40　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
41　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
42　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　灰色シルトブロックを層状に含む
43　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
44　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土　灰色シルトを含む
45　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土
46　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質土
47　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂混じりシルト質土暗褐色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを含む
48　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　灰色シルトブロックを層状に含む
49　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　径2cmの黒色粘質土ブロックを多く含む
50　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土　黒色粘質土ブロックを含む
51　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　黒色粘質土,暗褐色粘質土を多く含む
52　褐色(10YR4/4)粘質土　黒色粘質土,暗褐色粘質土を多く含む
53　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　黒色粘質土,灰色シルトを含む
54　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
55　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
56　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　灰色シルトを含む
57　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　粘性あり
58　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　暗褐色粘質土ブロック,炭化物を含む
59　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土　炭化物を含む
60　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト質土　鉄分を多く含む
61　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土　灰色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
62　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト質土
63　褐灰色(7.5YR6/1)粘質土
64　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土
65　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　土器含む　中世遺構か?
66　灰色(5Y6/1)細砂混じりシルト質土　上面に土器を含む　中世遺構面
67　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　弥生土器含む　中世遺構面
68　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂混じりシルト質土　上面弥生遺構面



1'　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
2'　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを多く含む
3'　黒色(10YR2/1)粘質土　黒褐色粘質土ブロック,灰黄褐色シルトブロックを含む
4'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
5'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを多く含む
6'　暗褐色(10YR3/3)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
7'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　黒褐色粘質土ブロック,明黄褐色シルトブロックを多く含む
8'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土
9'　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを含む
10'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
11'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
12'　黄褐色(10YR5/6)シルト質土
13'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロック,細砂を層状に含む
15'　灰色(5Y6/1)細砂混じりシルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
16'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロック,細砂を層状に含む
17'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　灰色細砂を層状に含む　土器粒を含む
18'　暗褐色(10YR3/3)粘質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを含む
19'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
20'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
21'　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　土器粒を含む
22'　暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂混じりシルト質土　炭化粒を含む
23'　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　明黄褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロックを主体とする
24'　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色シルトを層状に含む
25'　灰色(5Y6/1)細砂混じりシルト質土　土器片を含む　中世遺構面
26'　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　弥生土器含む　中世遺構面
27'　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂混じりシルト質土　上面弥生遺構面

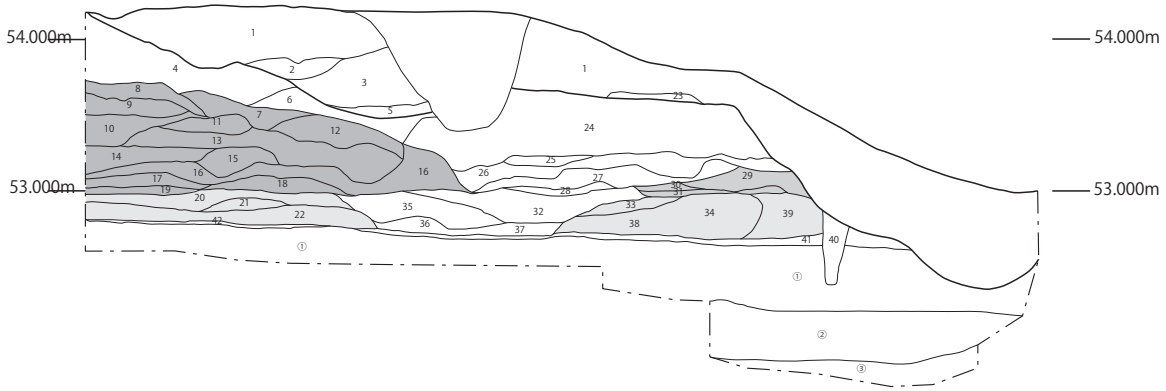
1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
2　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
3　にぶい黄褐色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　暗褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
4　にぶい黄褐色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　暗褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを多く含む
5　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　暗褐色シルトブロックを多く含む
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土　暗褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
7　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロックを多く含む
8　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロック,灰色シルトブロックを多く含む
9　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　暗褐色シルトブロック,黒色粘質土ブロックを含む
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロック,灰色シルトブロックを多く含む
11　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　灰色シルトブロックを層状に含む
12　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロックを多く含む
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロック,灰黄褐色シルトを層状に含む
14　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,黒色粘質土ブロックを多く含む
15　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
16　暗褐色(10YR3/4)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
17　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを含む
18　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
19　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　暗褐色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを含む
20　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
21　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土　灰色シルト,炭化粒を含む
22　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土　粘性あり
23　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質土
24　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　炭化粒を含む
25　黄褐色(2.5Y5/4)細砂混じりシルト質土
26　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　粘性あり
27　にぶい黄褐色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　灰色シルトを多く含む
28　黄褐色(2.5Y5/4)細砂混じりシルト質土　灰色シルト,鉄分を含む
29　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土
30　灰色(5Y6/1)細砂混じりシルト質土　土器片を含む　中世遺構面
31　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　弥生土器含む　中世遺構面
32　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂混じりシルト質土　上面弥生遺構面
33　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　炭化物,土器を含む(中世遺構)
34　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　炭化物,土器を含む(中世遺構)
35　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
36　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
37　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土

図 17　櫓台土層図（S=1/75）



1　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　表土
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
3　褐色(10YR4/6)粘質土
4　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色シルトブロック,炭化物を含む
5　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　土器粒含む
6　褐色(10YR4/6)粘質土
7　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　黄褐色粘性砂質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
8　褐灰色(10YR4/1)粘質土　灰黄色粘質土ブロックを含む
9　灰黄色(2.5Y6/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,黒褐色粘質土ブロックを含む
10　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
11　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　灰黄色シルトブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
12　黄褐色(10YR5/6)シルト質土
13　灰黄色(2.5Y6/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,黒褐色粘質土ブロックを含む
14　灰黄色(2.5Y6/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
15　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　粘性あり　暗褐色シルトブロックを含む
16　黒褐色(10YR2/2)シルト質土
17　黒褐色(10YR3/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
18　黄褐色(10YR5/6)シルト質土
19　灰黄色(2.5Y6/2)シルト質土
20　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
21　灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質土　粘性あり　黄褐色粘質土ブロックを含む
22　暗褐色(10YR3/3)シルト質土
23　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
24　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
25　灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロック,暗褐色シルトブロックを含む
26　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
27　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色シルトブロック,炭化物を多く含む
28　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
29　明黄褐色(10YR6/8)細砂混じりシルト質土
30　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
31　灰黄褐色(10YR5/2)細砂混じりシルト質土　黄褐色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
32　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　褐灰色シルトブロック,黄褐色シルトブロック含む　サヌカイト含む
33　褐灰色(10YR4/1)粘質土
34　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂混じりシルト質土　褐灰色シルトブロックを含む
35　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
36　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　灰白色シルトブロック,褐灰色シルトブロック,炭化物を含む
37　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質土　鉄分多い
38　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　径1cm大の角礫を多く含む　灰黄色シルトブロックを含む
39　灰黄色(2.5Y6/2)粘質土
40　灰オリーブ(5Y6/2)シルト質土　粘性あり
41　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　炭化粒を含む
42　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　暗褐色粘質土ブロック,黒褐色粘質土ブロック,炭化物,弥生土器を含む
43　灰黄褐色(10YR5/2)細砂混じりシルト質土
44　灰黄褐色(10YR5/2)細砂混じりシルト質土　鉄分,土器片を含む
45　褐灰色(10YR6/1)シルト質土　粘性あり　径2～5cmの円礫を多く含む
46　黄灰色(2.5Y6/1)粘質土　全体に鉄分を多く含む　土塁基底部
47　灰黄褐色(10YR4/2)細砂混じりシルト質土　黄灰色シルトブロックを含む
48　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　黄灰色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロック,炭化物,土器を含む
49　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色シルトブロック,炭化粒,土器粒を含む
50　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　土器粒を含む
51　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
52　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト質土　鉄分を含む
53　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
54　黄褐色(2.5Y5/3)シルト質土　褐灰色シルトブロック,黄褐色シルトブロック,土器粒を含む
1'　褐灰色(10YR4/1)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
土塁下1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　上面中世遺構面,弥生土器を含む
土塁下2　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　上面弥生時代遺構面
土塁下3　にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　締まりあり

Tr1.南北方向土層

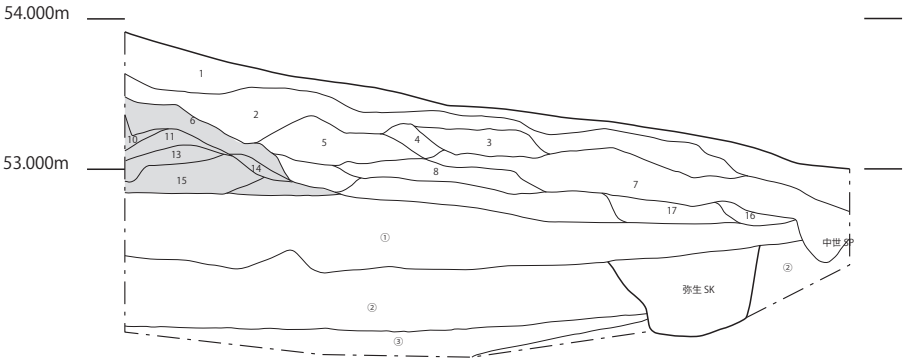


1　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　表土
2　灰黄褐色(10YR4/2)細砂混じりシルト質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
5　黄褐色(10YR5/6)砂混じりシルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　粘性あり　土器粒含む
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土　暗褐色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
8　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土　暗褐色シルトブロックを含む
9　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　粘性あり　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
10　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
11　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
12　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　暗褐色シルトブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
13　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
14　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　粘性あり
15　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
16　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
17　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　粘性あり
18　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
19　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
20　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
21　黄褐色(10YR5/6)細砂混じりシルト質土
22　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
23　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　暗褐色シルトブロックを含む
24　黄褐色(10YR5/6)細砂混じりシルト質土
25　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
26　黄褐色(10YR5/6)粘質土
27　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
28　黒色(10YR2/1)シルト質土
29　黄褐色(10YR5/6)細砂混じりシルト質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
30　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　暗褐色シルトブロックを含む
31　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　径1cm大の角礫を多く含む　灰黄色シルトブロックを含む
32　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,暗褐色シルトブロックを多く含む
33　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　粘性あり
34　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　明黄褐色を含む
35　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
36　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
37　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土
38　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
39　黄褐色(10YR5/6)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
40　木根
41　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
42　黄灰色(2.5Y6/1)粘質土　全体に鉄分を多く含む　土塁基底部
43　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
44　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを含む
45　黄褐色(10YR5/6)細砂混じりシルト質土　灰黄褐色シルトブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
46　黄褐色(10YR5/6)粘質土　褐灰色シルトブロックを含む
47　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　灰黄褐色シルトブロック,黄褐色粘質土ブロックを含む
48　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
49　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　締まりあり
50　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
51　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
52　黄褐色(10YR5/6)細砂混じりシルト質土
53　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　径1cm大の角礫を多く含む　灰黄色シルトブロックを含む

①　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　上面中世遺構面,弥生土器を含む
②　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　上面弥生時代遺構面
③　にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　締まりあり

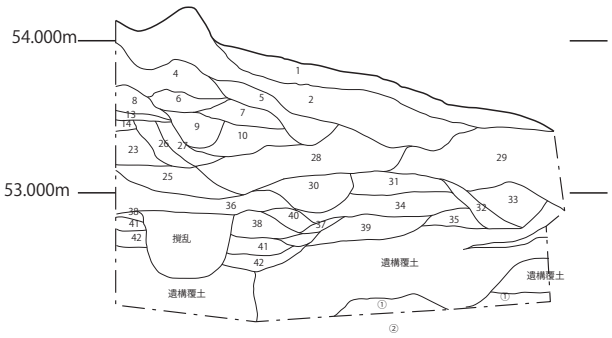
Tr2.南北方向土層

図 18　北土塁土層図（1）（S=1/50）



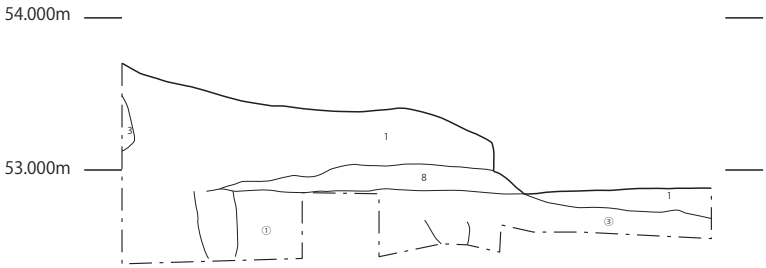
1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　表土
2　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色シルト粒,土器粒を含む
3　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　炭化物を含む
4　灰黄褐色(10YR4/2)細砂混じりシルト質土　炭化物,土器粒を含む
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黄褐色度念質土ブロックを多く含む　炭化物,土器粒を含む
6　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
7　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,炭化物,土器粒を含む
8　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
9　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色シルト粒を含む
10　黒色(10YR2/1)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
11　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　黒褐色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
12　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　黄褐色シルトブロックを含む
13　明黄褐色(10YR7/6)粘質土
14　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　粘性あり　褐灰色シルトブロックを含む
15　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　炭化物,土器粒を含む
16　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
17　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
18　褐灰色(10YR4/1)シルト質土　粘性あり　黄褐色粘質土ブロック,炭化物,土器粒を含む
19　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質土　黒褐色粘質土ブロックを多く含む
20　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黒色粘質土ブロックを多く含む
21　黒色(10YR2/1)粘質土　暗褐色粘質土ブロックを含む
22　黒褐色(10YR3/2)細砂混じりシルト質土　径2cm円礫を含む
23　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　褐灰色シルトブロックを含む
24　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　粘性あり　黒色粘質土ブロック,暗褐色粘質土ブロックを含む
25　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黄褐色粘質土ブロック,木炭物を多く含む
26　黒褐色(10YR3/2)シルト質土　暗褐色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロック,木炭を多く含む
27　褐灰色(10YR4/1)シルト質土
28　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土
29　黄褐色(10YR5/6)シルト質土　粘性あり　黒色粘質土ブロックを含む
30　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土
31　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
32　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質土
①土壁下1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　上面中世遺構面,弥生土器を含む
②土壁下2　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　上面弥生時代遺構面
③にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
④土壁下3　にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂混じりシルト質土　締まりあり

Tr3



1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　表土
2　暗褐色(10YR3/3)シルト質土　黒褐色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを含む
4　黒色(10YR2/1)シルト質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
5　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
6　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを含む
7　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを含む
8　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを含む
9　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
10　黒色(10YR2/1)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
11　黒褐色(10YR3/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
12　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
13　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒褐色粘質土ブロックを含む
14　黒色(10YR2/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを含む
15　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
16　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
17　黒褐色(10YR3/2)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
18　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　黒褐色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
19　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
20　黒褐色(10YR3/1)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
21　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
22　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,黒褐色粘質土ブロックを多く含む
23　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黒色粘質土ブロック,明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
24　褐灰色(10YR4/1)粘質土　明黄褐色粘質土ブロックを多く含む
25　黒色(10YR2/1)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
26　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　黒色粘質土ブロック,黄褐色粘質土ブロックを多く含む
27　黒褐色(10YR2/2)粘質土　黄褐色粘質土ブロックを多く含む
28　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　締まり悪し　明黄褐色粘質土ブロックを含む
29　黒色(10YR2/1)シルト質土　炭化物を含む　石積み裏込め
30　明黄褐色(10YR6/6)シルト質土　締まりあり　灰黄褐色粘質土ブロックを含む
31　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　炭化物,土器を含む
32　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　炭化物,土器を含む
33　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土　炭化物を含む
34　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　明黄褐色シルトブロック,炭化物,土器を含む
35　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土　炭化物を含む
36　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土　炭化物,土器を含む
37　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
38　褐灰色(10YR5/1)シルト質土　明黄褐色シルトブロックを含む
39　灰黄褐色(10YR4/2)細砂混じりシルト質土　明黄褐色シルトブロック,炭化物,土器を含む
40　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土　粘性あり
41　褐色(10YR4/4)細砂混じりシルト質土
42　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質土
43　灰黄褐色(10YR4/2)細砂混じりシルト質土
44　黒褐色(10YR3/2)粘質土　明黄褐色シルトブロックを多く含む
45　黒褐色(10YR3/1)シルト質土
①土壁下1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　上面中世遺構面,弥生土器を含む
②土壁下2　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土　上面弥生時代遺構面

Tr4



1　黒褐色(10YR3/2)シルト質土　表土・盛り土
2　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
3　明黄褐色(10YR6/6)粘質土　灰黄褐色シルトブロックを含む
4　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
5　黒褐色(10YR3/2)シルト質土
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　後世盛土・石積
7　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂混じりシルト質土
8　黒褐色(10YR3/1)シルト質土　炭化物,焼土塊を含む
①土壁下1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土　上面中世遺構面,近世遺構面も確認できる

Tr5

図 19　　北土塁土層図（2）（S=1/50）

なお、n13 グリッド付近では弥生時代遺構面が一段下がり、灰色細砂混シルト質土が 5 ～ 6 ㎝堆積する。このシルト質土層は水田土壌の可能性があり、土塁構築以前に段丘端部に水田が展開したと推定される。

虎口

虎口は、土橋からの延長上の北土塁と東土塁に挟まれた n12、n13 グリッドの奥行き 10.5m、幅 2.6m を測る平坦面が該当する。土橋西詰めから櫓台を右側に直線状に延びるが、北土塁・櫓台南裾が L 字状に屈曲する地点となり、東土塁との幅は 0.75m と狭くなる。虎口の形状としては、所謂「食い違い虎口」の範疇に含まれるもので、食い違い部分の一方を櫓台状に突出させている点が構造上の特徴といえる。

櫓台

北土塁東端は、上端部長軸 4.5m、短軸 2.1m を測る平坦面が形成される。北土塁上端との比高差は 1.5m を測り、土橋から虎口にかかる通路の側面に張り出していることから、櫓台としての機能を有すると想定される。櫓台の土塁盛土は、東西方向の断面では上幅約 3.6m、基底面からの高さはおよそ 2.8m を測る。

盛土は、段丘平坦縁辺が旧地形においてもにぶい黄褐色シルト質土（67 層）が土手状に盛り上がる。この 67 層上面には灰色細砂混じりシルト質土（66 層）が薄く堆積しており、中世段階の水田土壌と推定される。この水田土壌は東土塁最下層においても確認されている。67 層は大畦畔の可能性がある。大畦畔西側水田部分には明黄褐色シルト質土や褐灰色シルト質土（57 ～ 60 層）を充填・盛り土することにより平坦面を形成する。大畦畔東側の段丘縁辺低位箇所には盛り土と平坦面整地は認められず、東土塁とは整地工程に違いが認められる。その後、明黄褐色シルト質土（56 層）を厚 0.9m 程盛り、この 56 層に東（外）側より 0.3 ～ 0.5m の帯状の盛土をかぶせるように標高 54.00m 付近まで盛り上げる。その後 0.1 ～ 0.4m 厚の帯状盛土（13 ～ 20 層）で再び土手状に盛土する。その後、東（外）側に覆い被せるように盛土を行う。北土塁本体は櫓台状遺構構築後に櫓台本体を土留めとして西側に盛土（27 ～ 30 層）をほぼ水平に充填している。北土塁に先行して構築したと推定される。

なお、櫓台の上部平坦面からは柵列・構造物等を構成する柱穴は未検出である。

北土塁

北土塁は、那賀川に面した河岸段丘北辺に築造された東西方向の土塁である。北辺が調査対象地外となるために正確な規模は不明であるが、河岸段丘北辺の標高 54.00m を土塁北側下端とするならば、推定上部幅 5.8m、推定下部幅 9.5m、比高差 1.5m を測る。

Tr1 地点では、土塁構築前表土もしくは耕作土と推定される黄灰色粘質土層（46 層）に土塁中央部よりに 0.1~0.2m 粘質土ブロックや弥生土器を含む褐灰色シルト質土や灰黄褐色細砂混じりシルト質土や円礫を含む褐灰色シルト質土（42 ～ 45 層）を土手状に盛土する。この土手状盛土に南側から 0.3~0.4m 厚の帯状盛土（28 ～ 41 層）を盛り被せる。この段階で北土塁中央部上端標高は 53.800m となる。南側縁辺に 5 ～ 15 ㎝単位の薄い帯状盛土(3 ～ 27 層)を南側から盛り被せることにより土塁南縁を形成する。

Tr2 地点では、土塁中央側に 20 ～ 22 層をほぼ水平に盛ることによる高さ 25 ㎝程度の低い土手状盛土を構築し、土塁南縁にも 33、34、38、39 層による土手状盛土を構築する。両土手状盛土の内側に 32、35 ～ 37 層を充填することにより標高 53.00m の平坦面を整備する。再び中央部に帯状盛土の 7 ～

19 層を水平に盛ることにより標高 53.70m まで土塁中心部を構築する。その際、外方には土手状盛土（16 層）を盛った後に内側を充填する工法が採用されている。南縁でも同様に 29 ～ 31 層の土手状盛土と 25 ～ 28 層の水平充填盛土の工法を繰り返している。

Tr3 付近では、やや様相が異なる。土塁中央部に 6、10 ～ 15 層による 0.6m 程度の土手状盛土は築かれているが、土手状盛土南側の盛土は Tr1、2 のような薄い帯状盛土を覆い被せるのでは無く、盛土単位が粗となる。土塁本体が調査対象地点より北側に位置する可能性と、盛土が崩落土の可能性も想定される。

Tr4 では明確な構築単位を示す盛土は不明である。13、14、25、26 層が土手状盛土として盛られた可能性がある。

Tr5 では明確な盛土は観察されていない。東側から続く北土塁の一連の盛土とは考え難い。

発掘調査前の現況測量図において l5 グリッドより西側にて等高線の乱れが認められれる。櫓台に連続し食い違い虎口の地点から土塁南側等高線は、ほぼ一直線に整然と延びている。しかし、Y=92,725 以西は等高線間隔や土塁幅の不規則な減少、土塁表面に川原石を用いた石積みが認められる。土塁南北方向断面観察では、Tr3 以西において土塁構築土に違いが認められ、土塁盛土が無くなる。河原石積み裏込め土も締まりが無い。土塁が幅を減じる地点（Y=92,723.5）が北土塁の西端となり、以西の盛土は近世以降の構築と推定される。

西土塁

西土塁は城域の西辺を画する南北方向の土塁の北端部である。南側部分は現状では民家等により削平されたと推定される。しかし、北土塁自体が l5 グリッド付近で断絶することから、西土塁が北土塁へと連続することは無く、現存する西土塁が櫓台状の独立した遺構であった可能性も想定される。

なお、那賀川に面した河岸段丘崖面に一部南に向かって等高線が谷状に屈曲することや、土塁西側を那賀川に向かって延びる南北方向の町道は、一定幅で周囲より一段低い区画となっており、西堀が構築された可能性が高い。

出土遺物は、何れも土塁構築土もしくは表土中からの出土であり、土塁築造年代を示すものではない。土師質土器羽釜 10 は砂岩粒や花崗岩粒を含み搬入品である。13 は鵄尾であり、キラ粉が観察され、蛭子神社関連遺物である。土師質土器皿 11、12 は灯明皿である。14 は焼締陶器製仮面（大黒天か）である。15、17 は鞴羽口である。16、18 は炉壁である。19 は炉壁もしくは坩堝である。S3 はサヌカイト剥片である。M15 は板状鉄滓である。M16 は小型椀形鉄滓である。M17、M19、M20 は大型椀形鉄滓である。20 は土師器杯である。21 は土師器高台付椀である。22 は弥生土器壺で、焼成時破裂痕を残す鮎喰川流域からの搬入品である。23、24 は鞴羽口である。M21 は大型椀形鉄滓である。M22、M23、M27 は小型の浅い皿状の椀形鉄滓である。M29 ～ M33 は鉄製釘である。M30 は鎹の可能性がある。26 は須恵器壺体部片である。27 は弥生土器甕で、園瀬川流域からの搬入品の可能性がある。28 は弥生土器高杯である。S5 はサヌカイト剥片である。30 は焙烙で、外面に煤が付着する。31 は縄文土器深鉢で、鷹島式もしくは船元Ⅰａ式である。32 は土師質土人形である。組合せ式人形か。33 は炉壁である。

図 20　土塁出土遺物図（1）

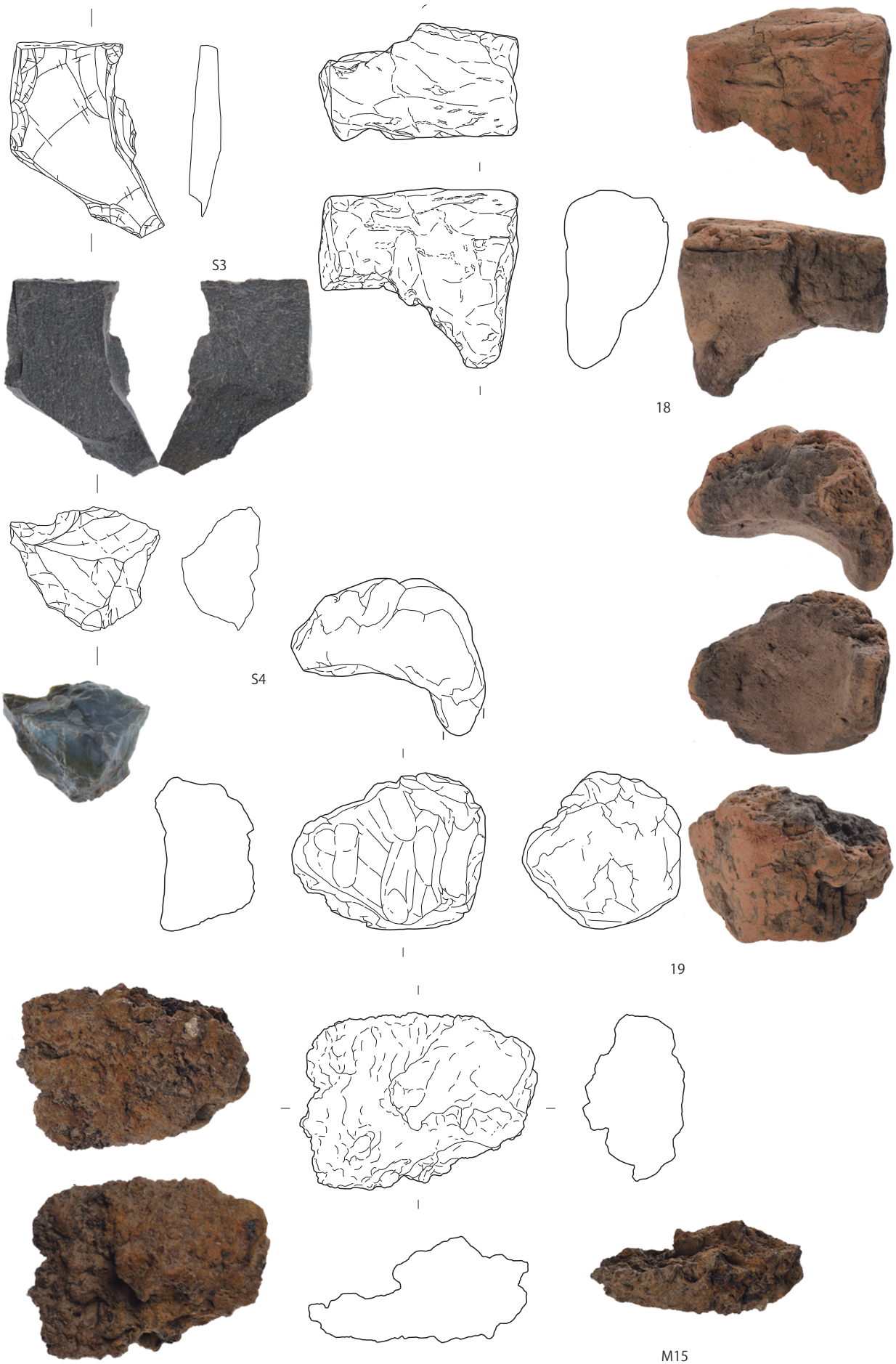


図21　土塁出土遺物図（2）

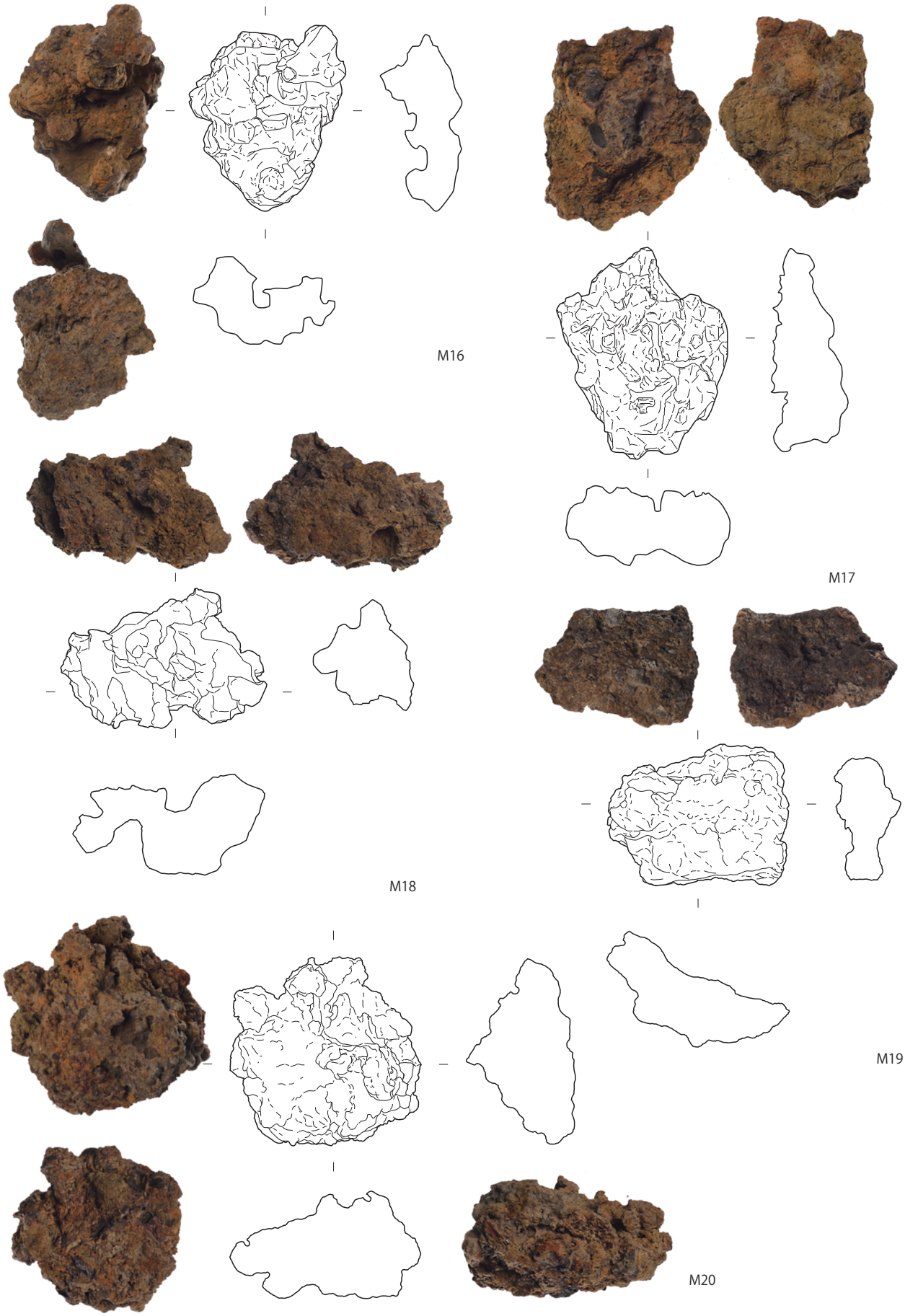


図 22　土塁出土遺物図（3）

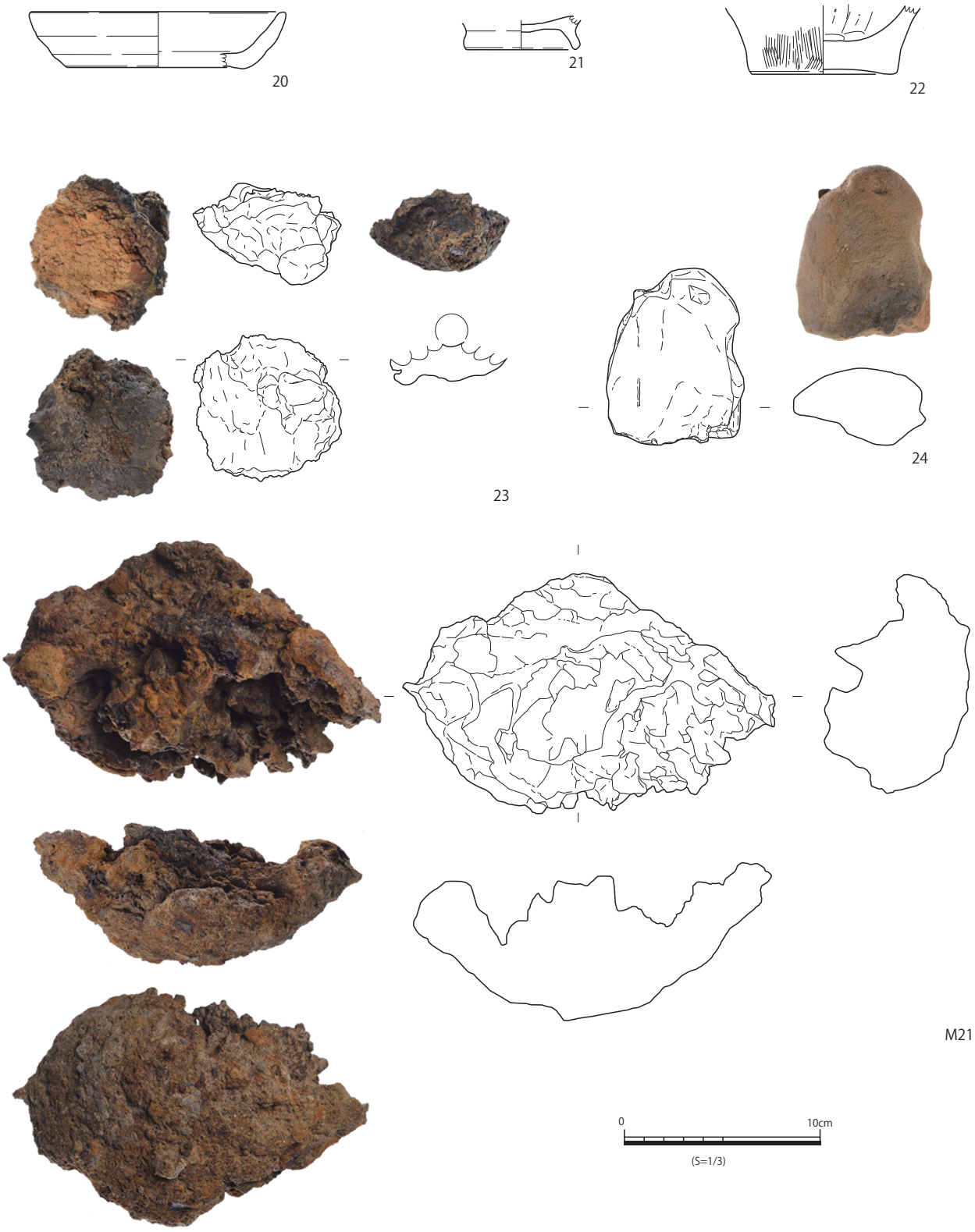


図 23　土塁出土遺物図（4）

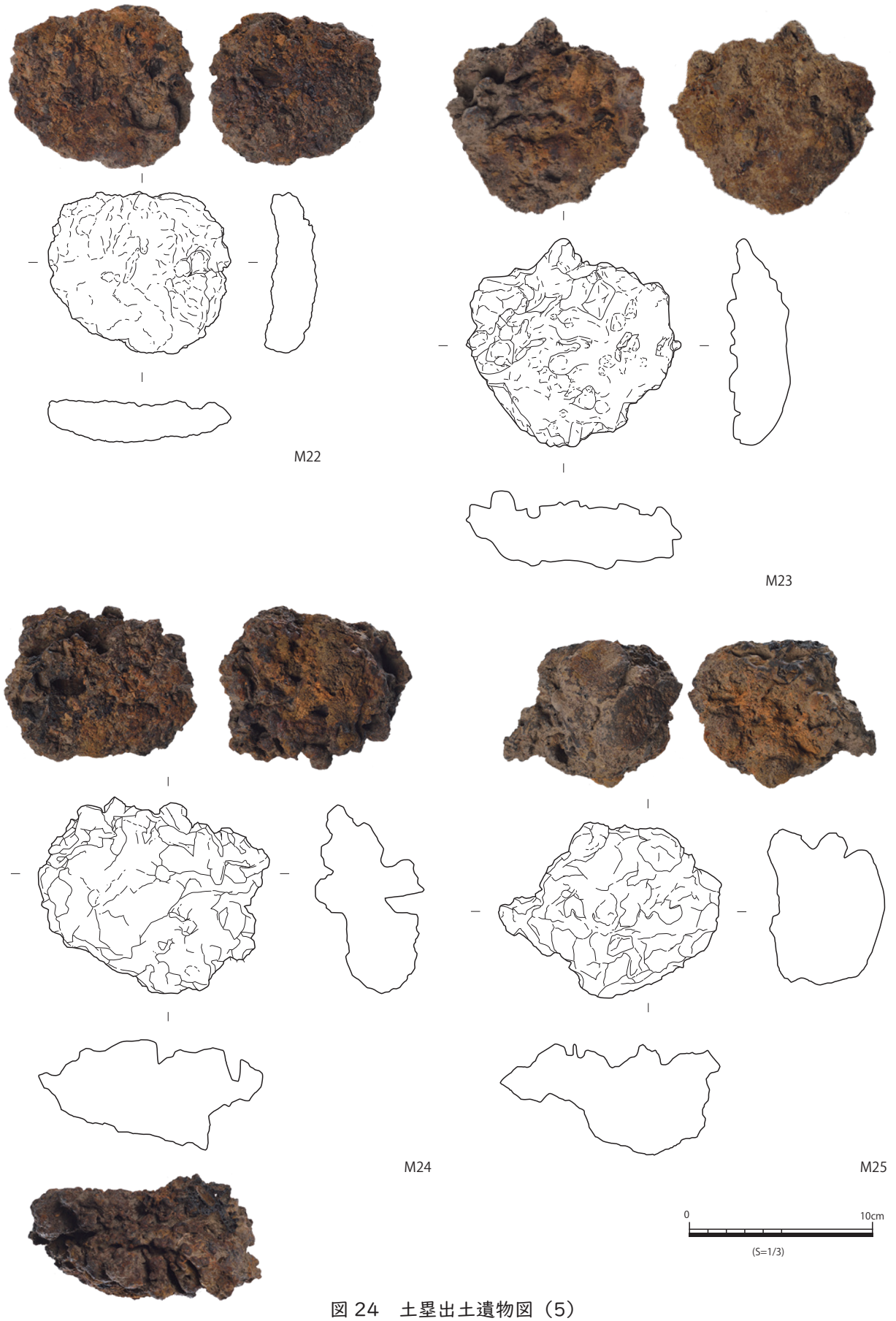


図 24　土塁出土遺物図（5）

図 25　土塁出土遺物図（6）

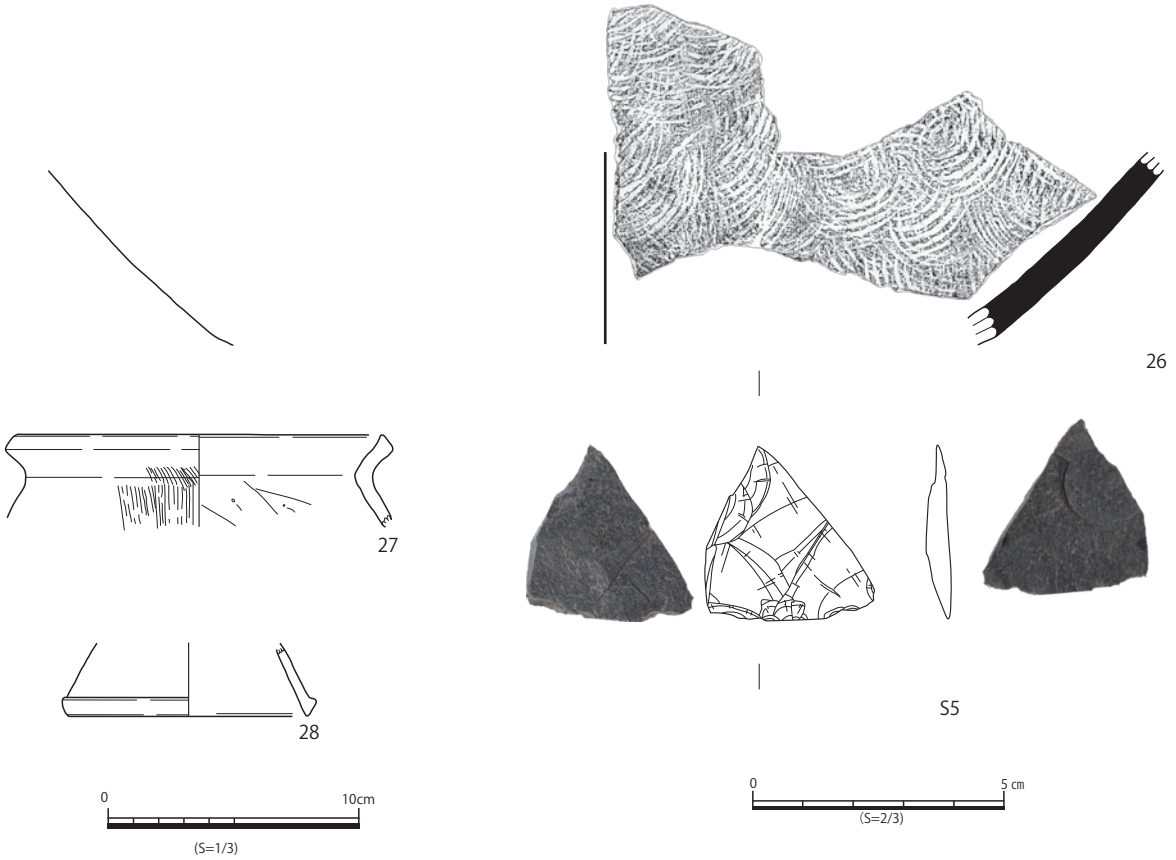


図 26　土塁出土遺物図（7）

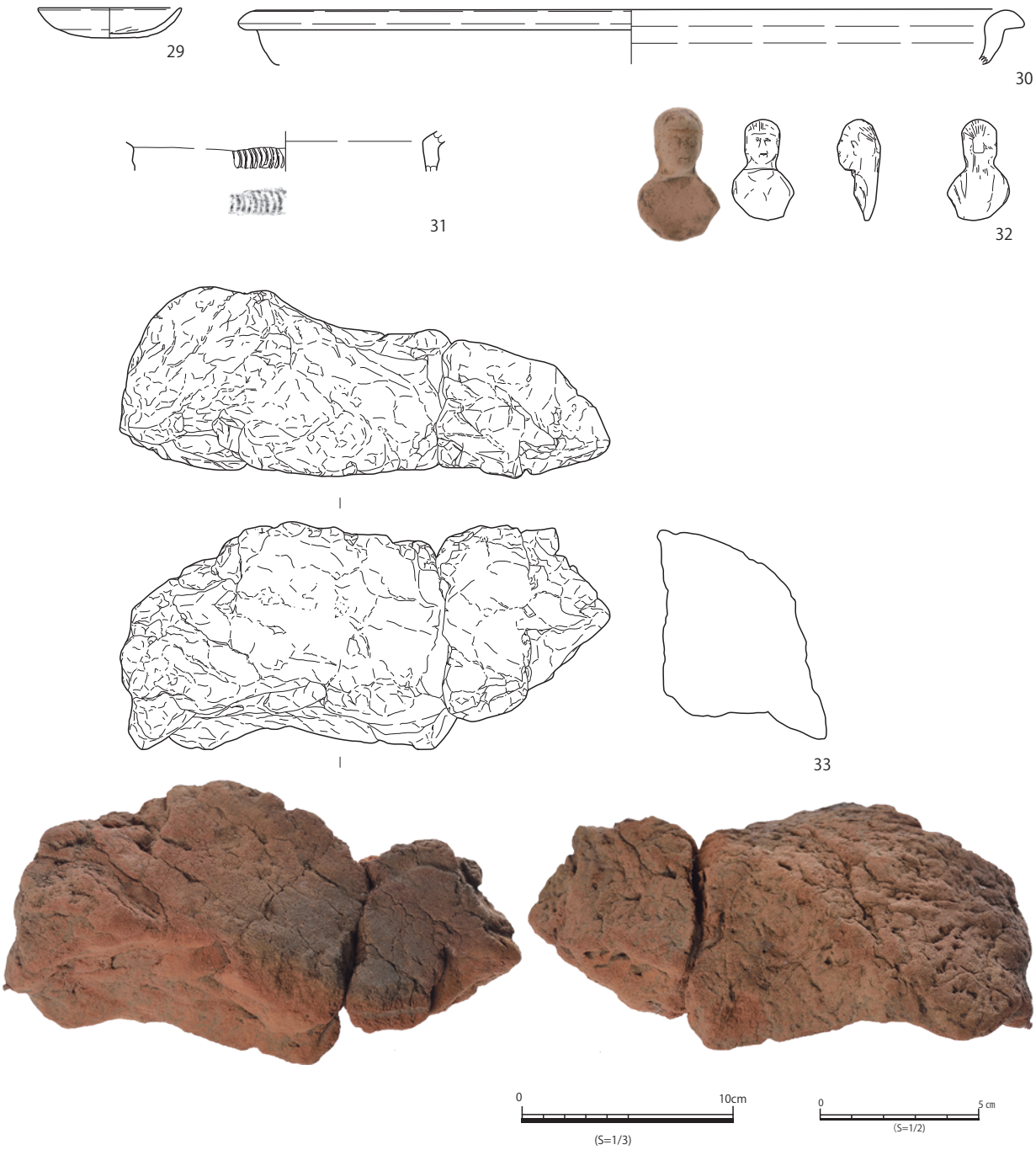


図 27　土塁出土遺物図（8）

図 28　北側土塁下部集石

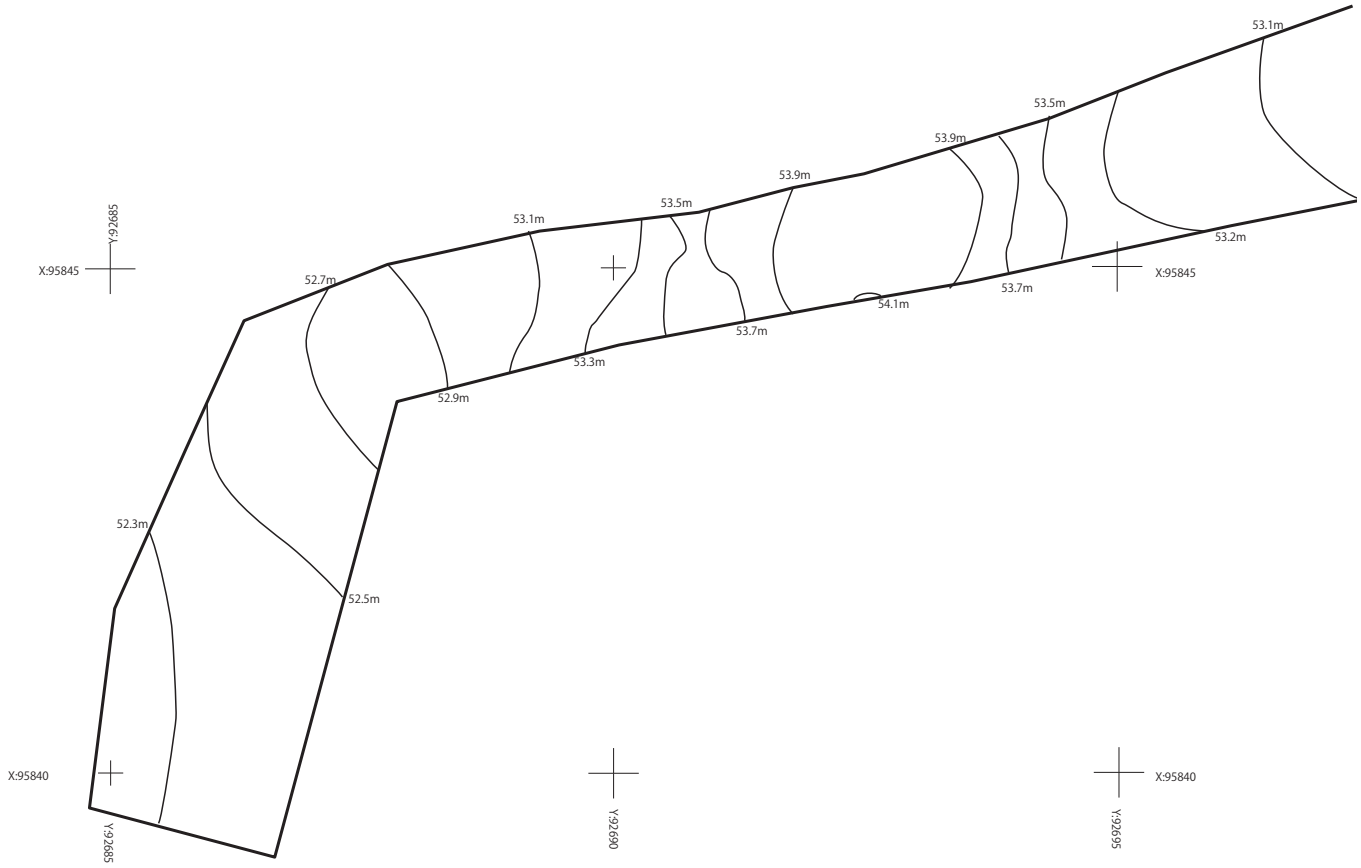


図 29　西側土塁地形測量図（S=1/75）

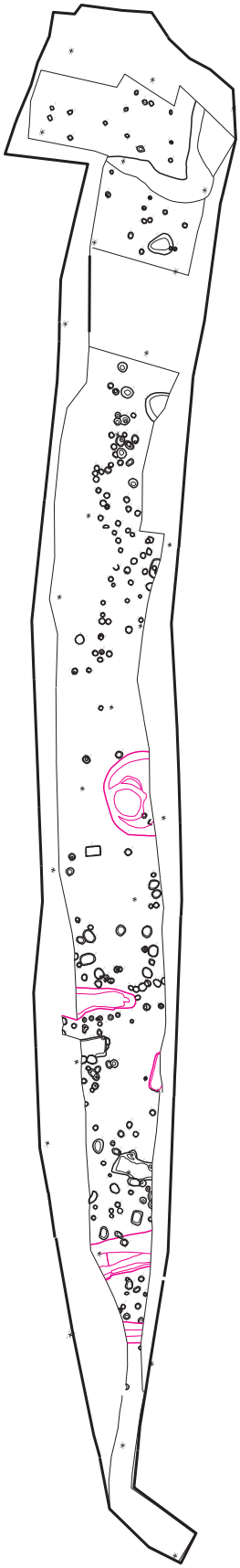


図 30　第２遺構面遺構配置図（S=1/400）

(2)　第 2 遺構面

土塁基底部の下層は、土塁構築の前段階である中世から戦国期にかけての遺構面であるが、遺構の密度は低く、蛭子神社本殿の背後を中心として平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が出土した。今回の調査では、下層の弥生時代の遺構面と合わせて第 2 遺構面として調査を行った。第 2 遺構面では柱穴（SP）202 基、土坑（SK）18 基、溝（SD）2 条、性格不明遺構（SX）1 基を検出した。

溝状遺構 SD

1 号溝状遺構 SD2001（旧 SD1001）

j20 グリッドにて検出され、南北方向に掘削された溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈する。検出長 0.97m、幅 1.16m、深度 0.35m、掘削方位 N-17°-W を測る。

遺構覆土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂混じりシルト質土である。

遺物は出土していないが、構築面および遺構覆土中の土器細片から弥生時代中期と推定される。

2 号溝状遺構 SD2002（旧 SD1002）

j20、j1 グリッドにて検出され、南北方向に掘削された溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈する。検出長 3.13 m、幅 2.2m、深度 0.92m、N-32°-W を測る。

S6 は砂岩製敲石を転用した砥石である。

弥生時代中期と推定される。

土坑 SK

2 号土坑 SK2002（旧 SK1002）

j1 グリッドにて検出された平面形態は隅丸方形を、断面形態は逆台形を呈する土坑である。長軸長 0.96m、短軸長 0.68m、深度 0.42m、主軸方位 N-82°-E を測る。

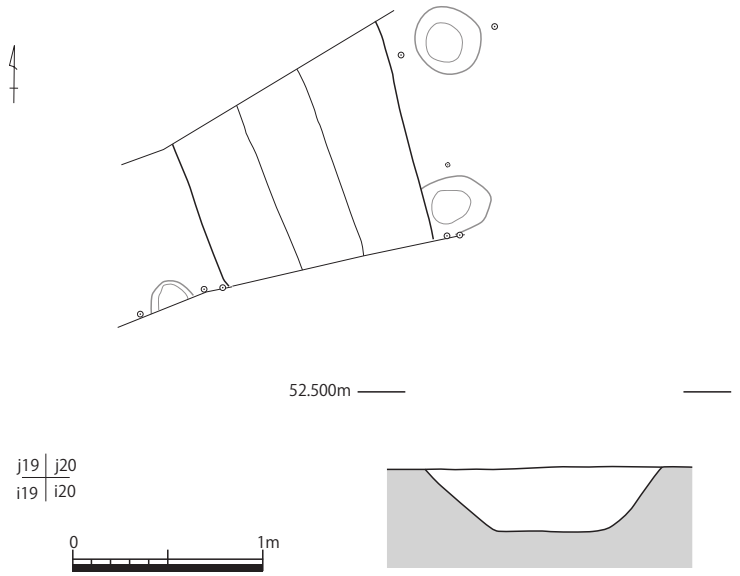
遺構覆土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂混じりシルト質土で鉄分、炭化物、土器粒含む上層と、褐色（10YR4/4）シルト質土で、黄褐色粘質土ブロック含む。

S7 はサヌカイト製石鏃片である。

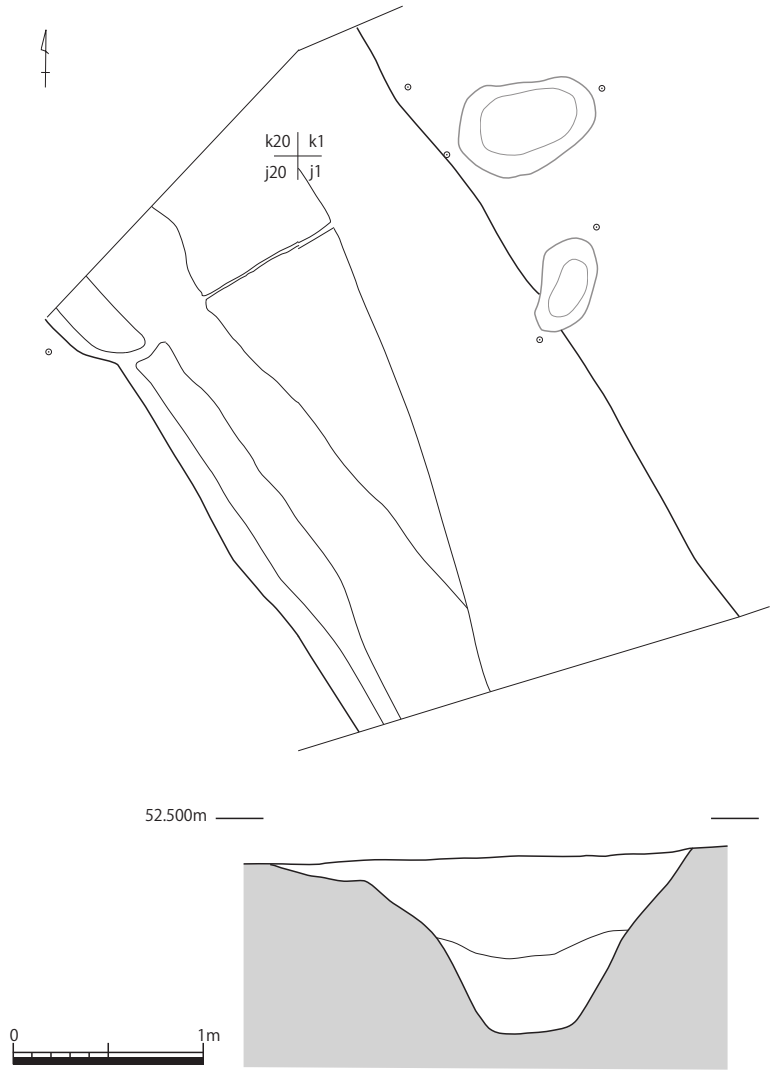
弥生時代中期と推定される。

5 号土坑 SK2005（旧 SK1005）

j1、j2、k1、k2 グリッドにて検出された平面形態は不整形、断面形態は浅い舟底型を呈する土坑である。長軸長 2.69m、短軸長 1.33m、深度 0.7m、主軸方位 N-7°-E を測る。



SD2001



SD2002

図 31　溝状遺構(SD)遺構図

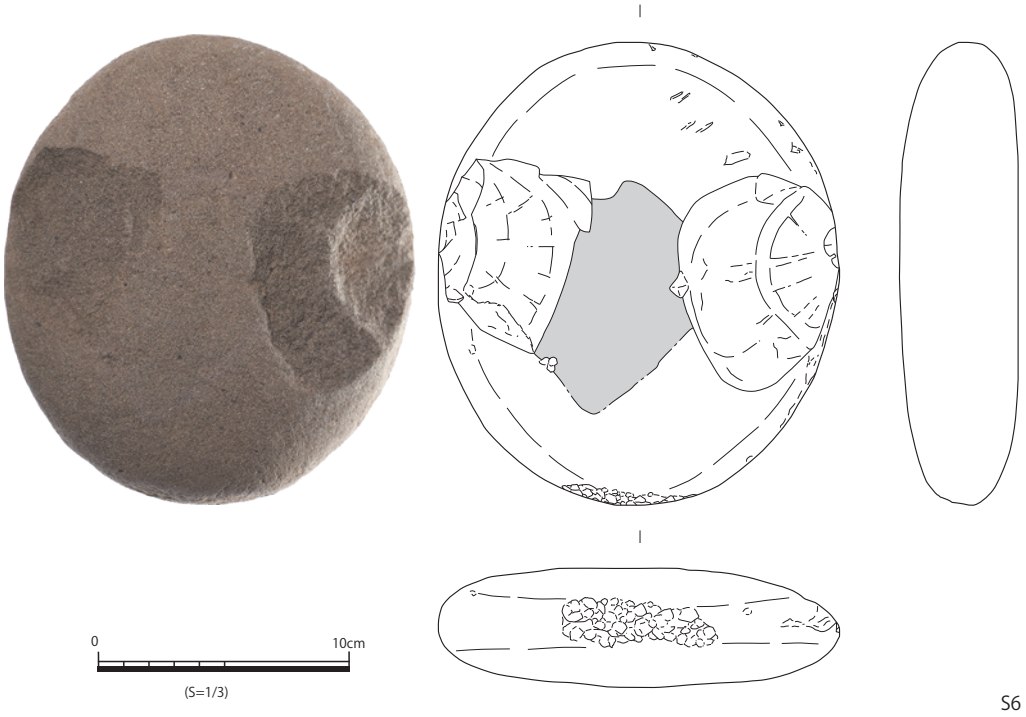


図 32　溝状遺構（SD）出土遺物図

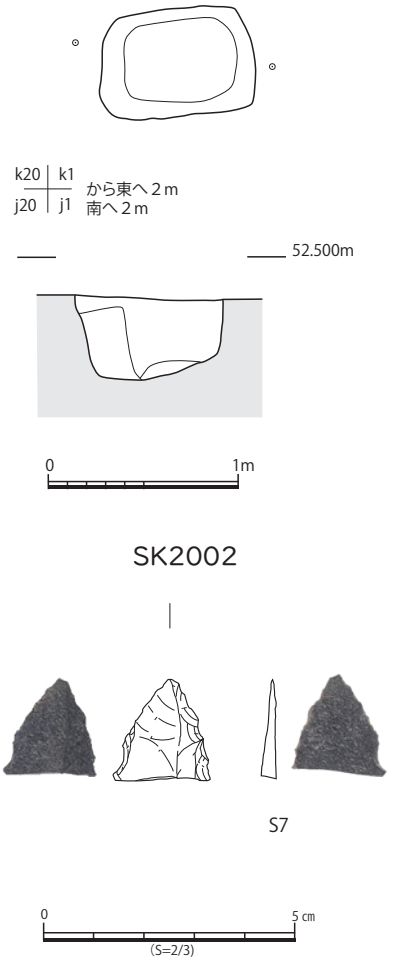


図 33　土坑（SK）遺構図・遺物図（1）

遺構覆土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂混じりシルト質土で、全体に土器粒、炭化物を含み、径 1 ～ 20 ㎝大の角礫を含む。上層は褐色（10YR4/4）シルト質土で、土器片、炭化物を含む。

S8 はサヌカイト製楔形石器である。S7 はサヌカイト製石鏃片である。34 は精錬鍛冶炉の炉壁である。

炉壁 34 は流れ込みと推定され、遺構は弥生時代中期と推定される。

7 号土坑 SK2007（旧 SK1007）

k3 グリッドにて検出された平面形態は隅丸方形、断面形態は逆台形を呈する土坑である。長軸長 2.68m、残存短軸長 0.74m、深度 0.3m、主軸方位 N-73°-E を測る。

遺構覆土は、暗褐色（10YR3/3）シルト質土で黄褐色シルトブロックを含み、土器粒、炭化物、径 10 ㎝大の角礫を含む。下層はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質土である。

甕 35 は外面にタタキが施され後期前半と推定される。

弥生時代後期後半である。

8 号土坑 SK2008（旧 SK1008）

K3、l3 グリッドにて検出された平面形態は隅丸方形、断面形態は不整舟底型を呈する土坑である。検出長軸長 1.48 m、

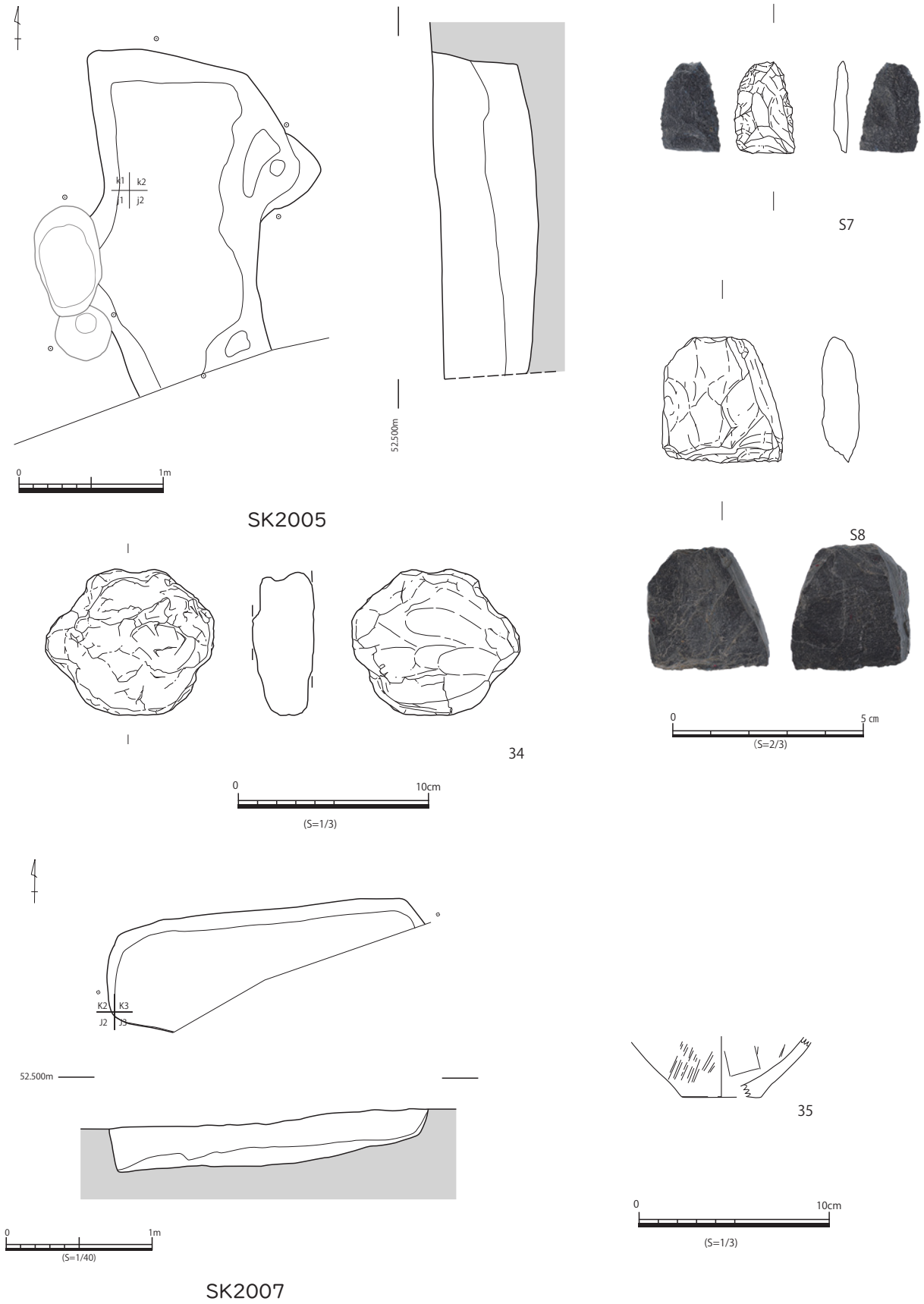


図 34　土坑(SK)遺構図・遺物図（2）

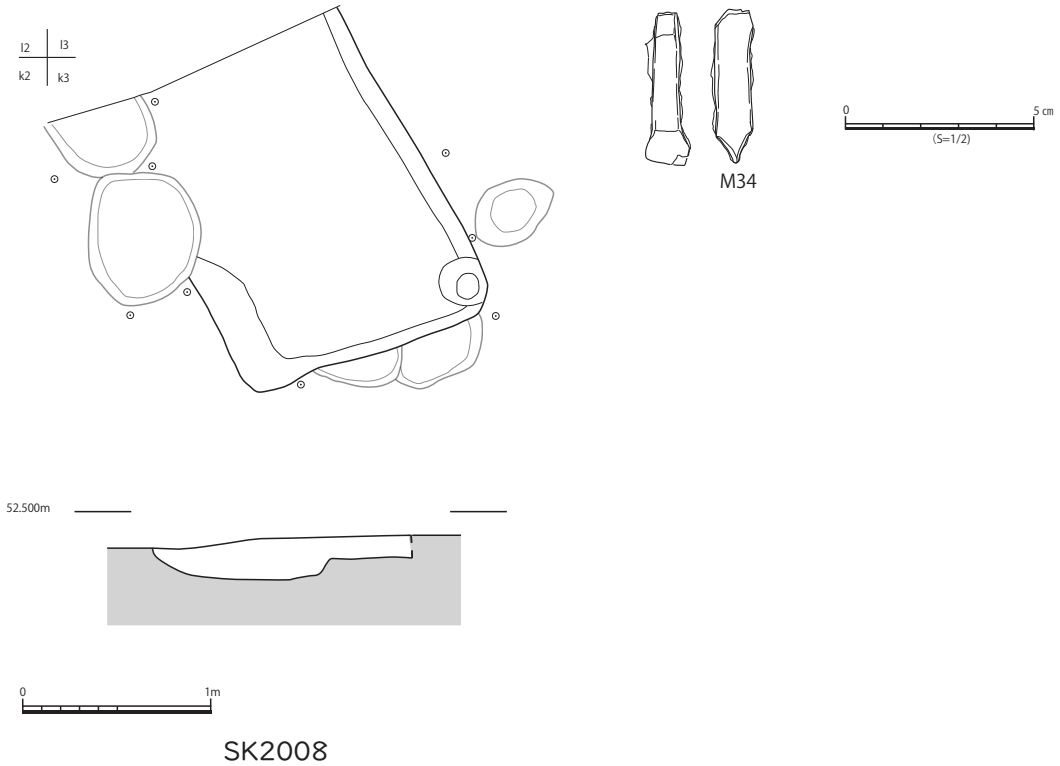


図 35　土坑(SK)遺構図・遺物図（3）

短軸長 1.15 m、深度 0.3 m、主軸方位 N-64°-E を測る。

遺構覆土は、暗褐色（10YR3/3）シルト質土で、一部に黄褐色シルトブロック含む、暗褐色シルトブロック、土器粒、炭化物含む。

M34 は小型鑿である。方柱状を呈する短い柄部に、扇状に広がる刃部が伴う。柄部は短く目釘痕や木質痕は伴わず木製柄部が伴うかは不明であり、柄尻に面が伴うことから叩打による使用方法も想定される。

中世後半と推定される。

9 号土坑 SK2009（旧 SK1009）

k3、l3 グリッドにて検出された平面形態は不整長楕円形、断面形態は舟底型を呈する土坑である。検出長軸長 3.37m、短軸長 1.32m、深度 0.75m、主軸方位 N-67°-E を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土で、全体に暗褐色シルトブロック、土器粒、炭化物を含む。また、にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質土や褐灰色（10YR5/1）シルト質土である。

36 は弥生土器壺で、吉野川流域からの搬入品である。37 は弥生土器甕であり、阿波東部Ⅳ段階である。38 は弥生土器高杯杯部で、脚部を切断している。園瀬川流域からの搬入品か。39 は弥生土器高杯である。那賀川流域か。S9 ～ S12 はサヌカイト剥片である。

出土した土器から弥生時代中期後半と推定される。

12 号土坑 SK2012（旧 SK1012）

l5 グリッドにて検出された平面形態は長方形、断面形態は方形を呈する土坑である。長軸長 0.85m、短軸長 0.56m、深度 0.1m、主軸方位 N-20°-W を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土に、にぶい黄褐色シルトブロック、暗褐色シルトブロック、炭化物、土器粒を含む。

M35 は鉄滓である。

中世後半と推定される。

13 号土坑 SK2013（旧 SK1013）

k5 グリッドにて検出された平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形を呈する土坑である。長軸長 0.65m、短軸長 0.53m、深度 0.32m、主軸方位 N-52°-W を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土である。

弥生土器壺 40 は勝浦川流域からの搬入品と推定されるが、焼成・胎土共に良好である。

出土した土器から、弥生時代中期と推定される。

14 号土坑 SK2014（旧 SK1014）

m8 グリッドにて検出された平面形態は隅丸方形、断面形態は逆台形を呈する土坑である。長軸長 1.16m、検出短軸長 0.43m、深度 0.41m、主軸方位 N-84°-E を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土で、明黄褐色シルトブロック、土器片、炭化物を含む。弥生土器甕体部破片を転用した紡錘車 41 が出土。Ⅲ様式の甕か。

弥生時代中期と推定される。

15 号土坑 SK2015（旧 SK1015）

m9 グリッドにて検出された平面形態は楕円形、断面形態は二段形を呈する土坑である。長軸長 0.60m、短軸長 0.38m、深度 0.55m、主軸方位 N-17°-E を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土で、明黄褐色シルトブロック含み全体に土器粒、炭化物を含む。

弥生土器壺 42 は勝浦川流域からの搬入品と推定される。弥生土器高杯 43 は胎土中に金雲母を含むが、結晶片岩も含むことから、讃岐地域ではなく鮎喰川流域からの搬入品と推定される。44 は高杯である。

出土した土器から弥生時代中期後半である。

16 号土坑 SK2016（旧 SK1016）

n10 グリッドにて検出された平面形態は不整円形、断面形態は逆台形を呈する土坑である。長軸長 0.70m、短軸長 0.60m、深度 0.72m、主軸方位 N-15°-W を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土である。

弥生土器甕 45 は 2 次焼成による被熱赤変が認められ、小型器台の可能性がある。

出土した土器から弥生時代中期中葉である。

17 号土坑 SK2017（旧 SK1017）

m10 グリッドにて検出された平面形態は楕円形、断面形態は皿形を呈する土坑である。検出長軸長 1.19m、短軸長 1.84m、深度 0.22m、主軸方位 N-82°-W を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土である。

46 は簾状成形による鞴羽口である。47 は鞴羽口である。簾状成形による。M40 は鉄素材である。M41 は釘である。M36 ～ M39 は椀形鉄滓である。

出土した鞴羽口から中世前半と推定される。

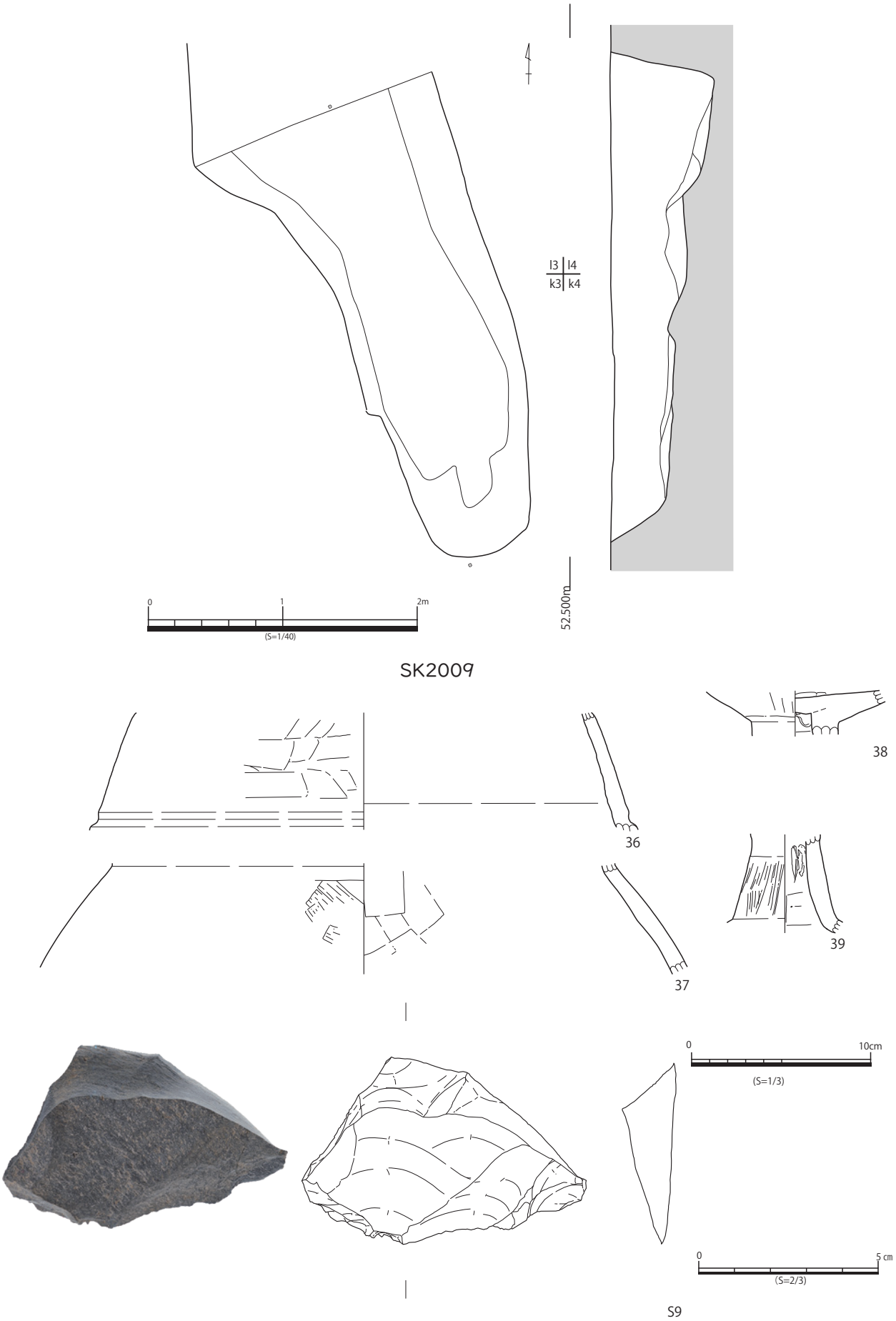
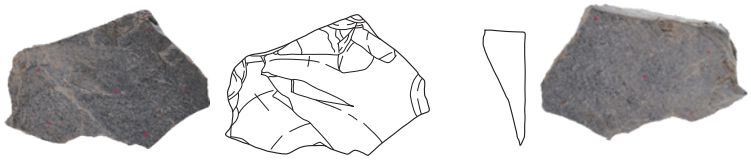


図 36　土坑(SK)遺構図・遺物図（4）



S10

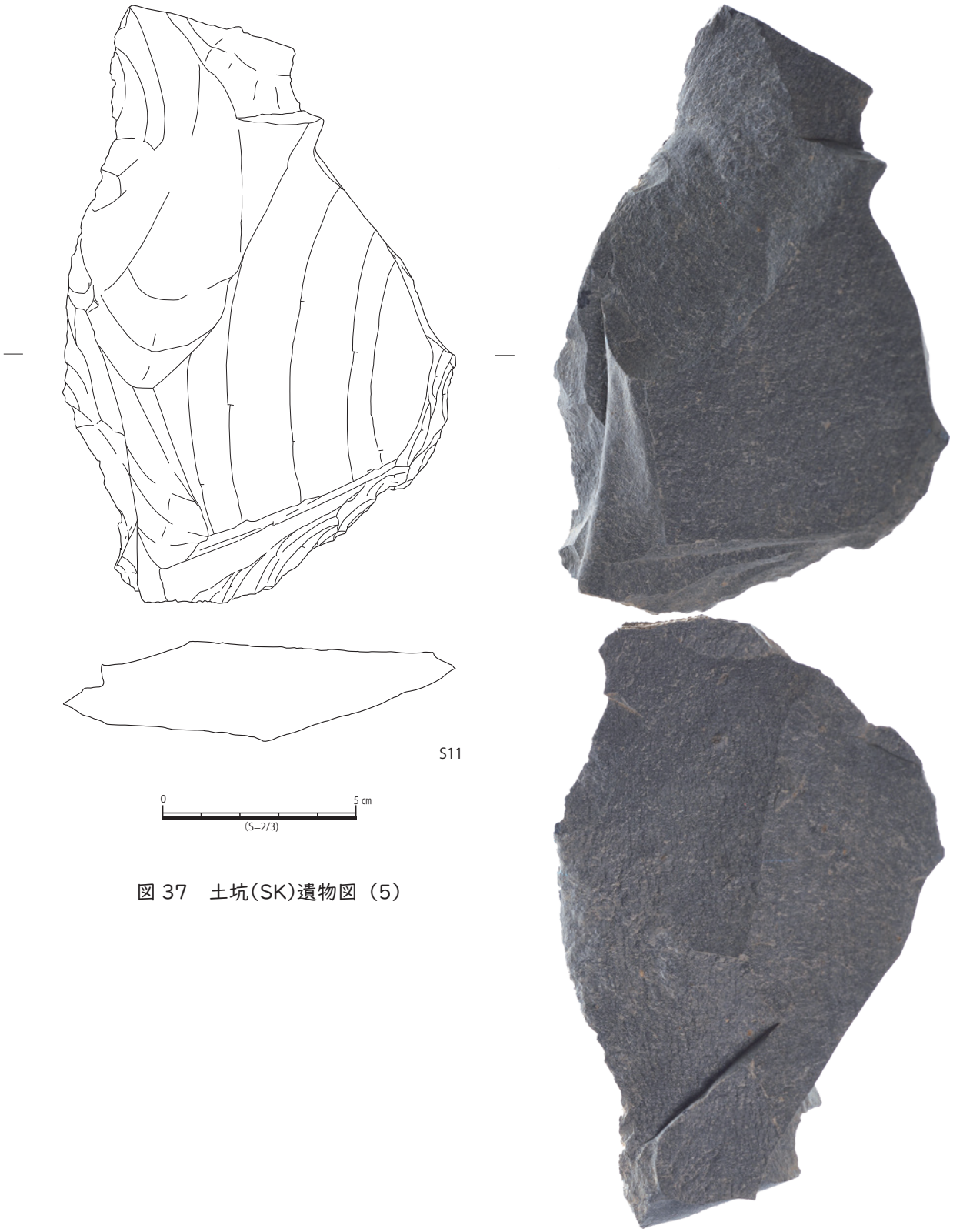
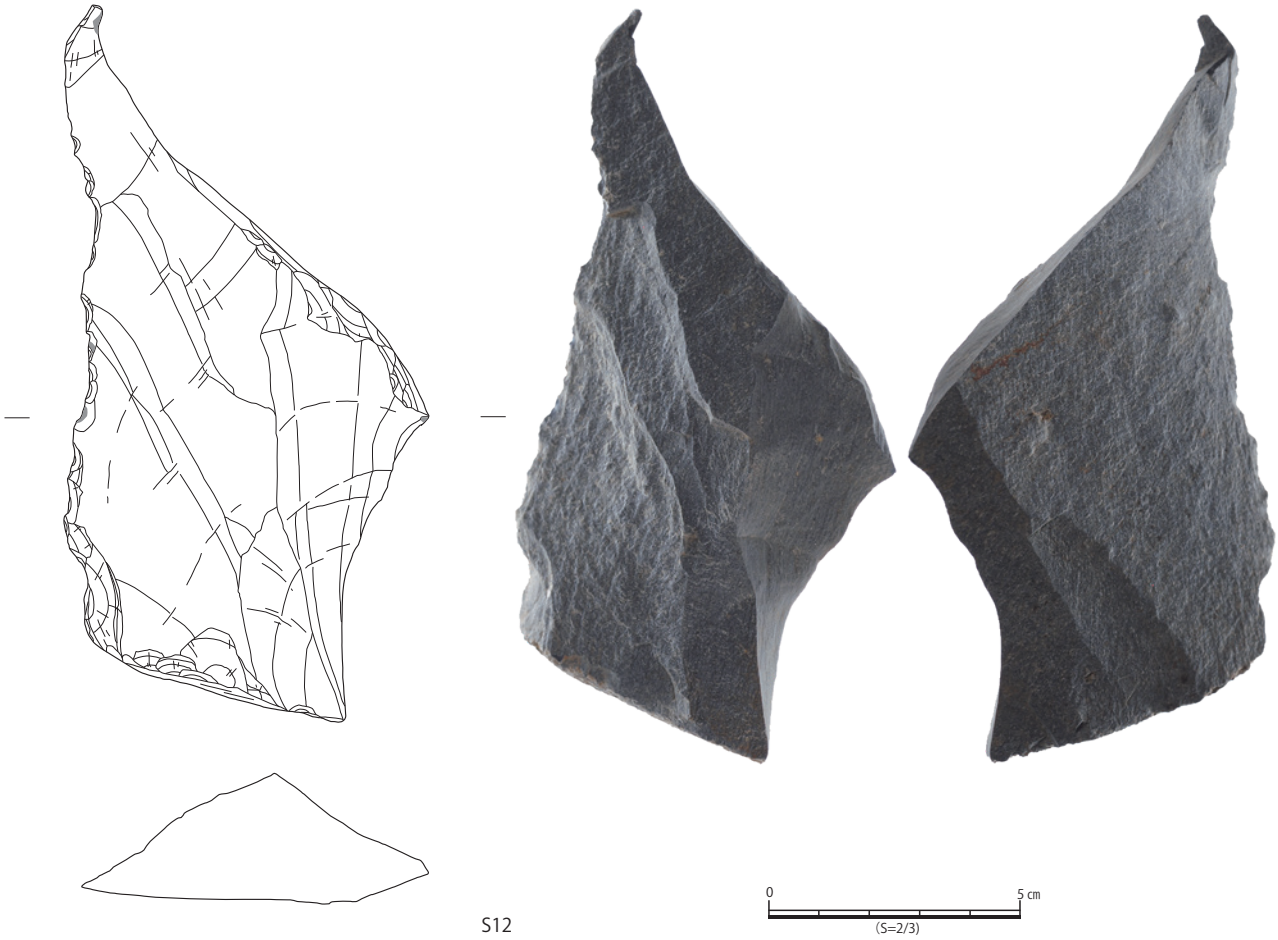
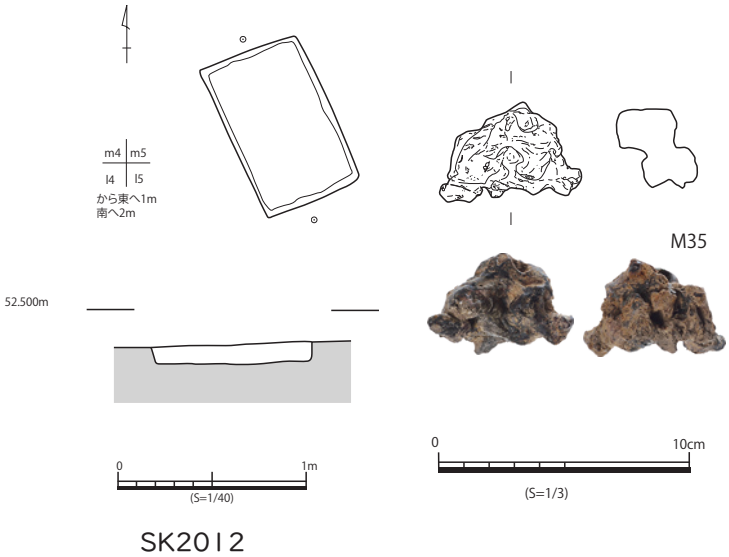


図 37　土坑(SK)遺物図（5）





SK2012

図 38　土坑(SK)遺構図・遺物図（6）

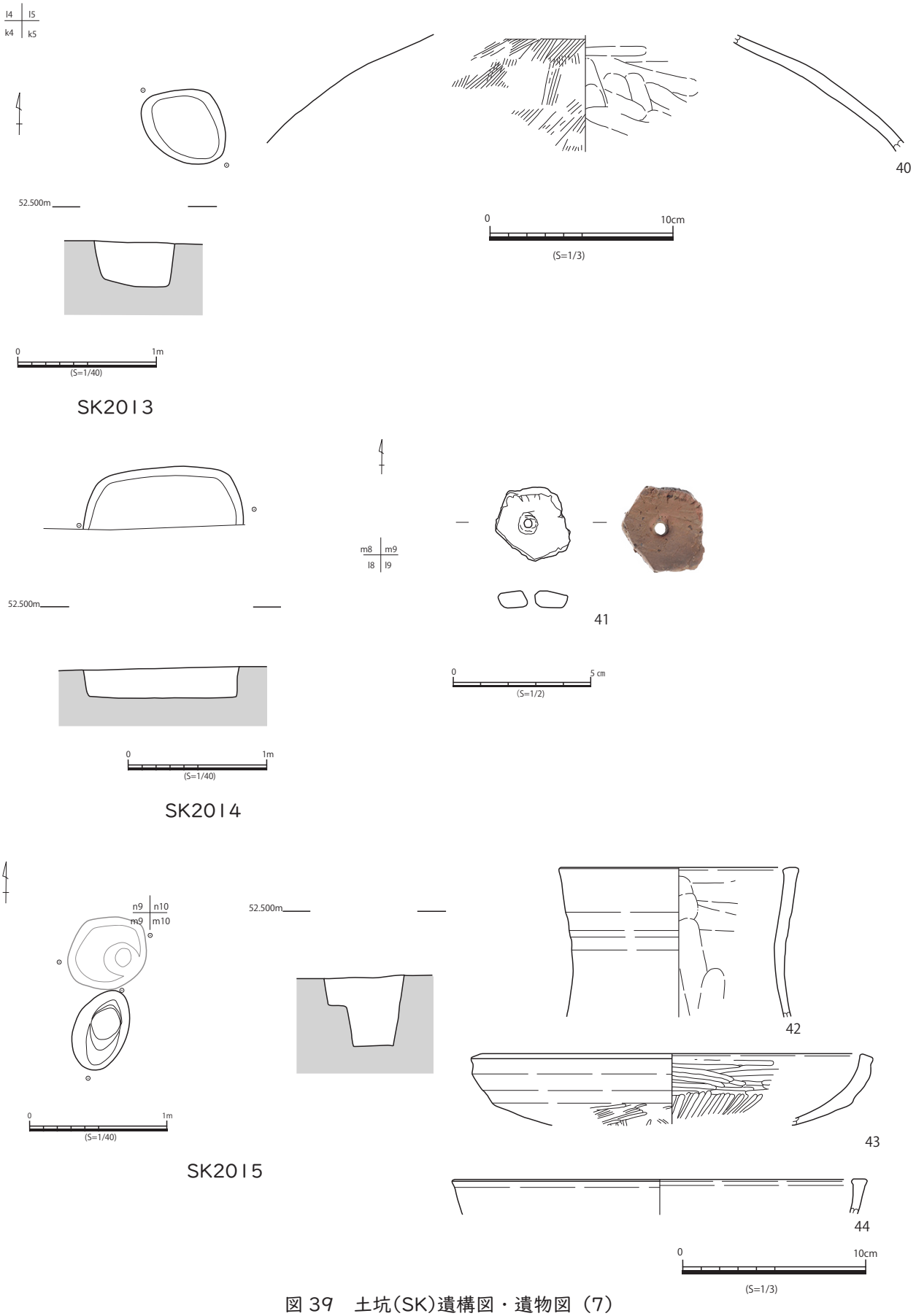


図 39　土坑(SK)遺構図・遺物図（7）

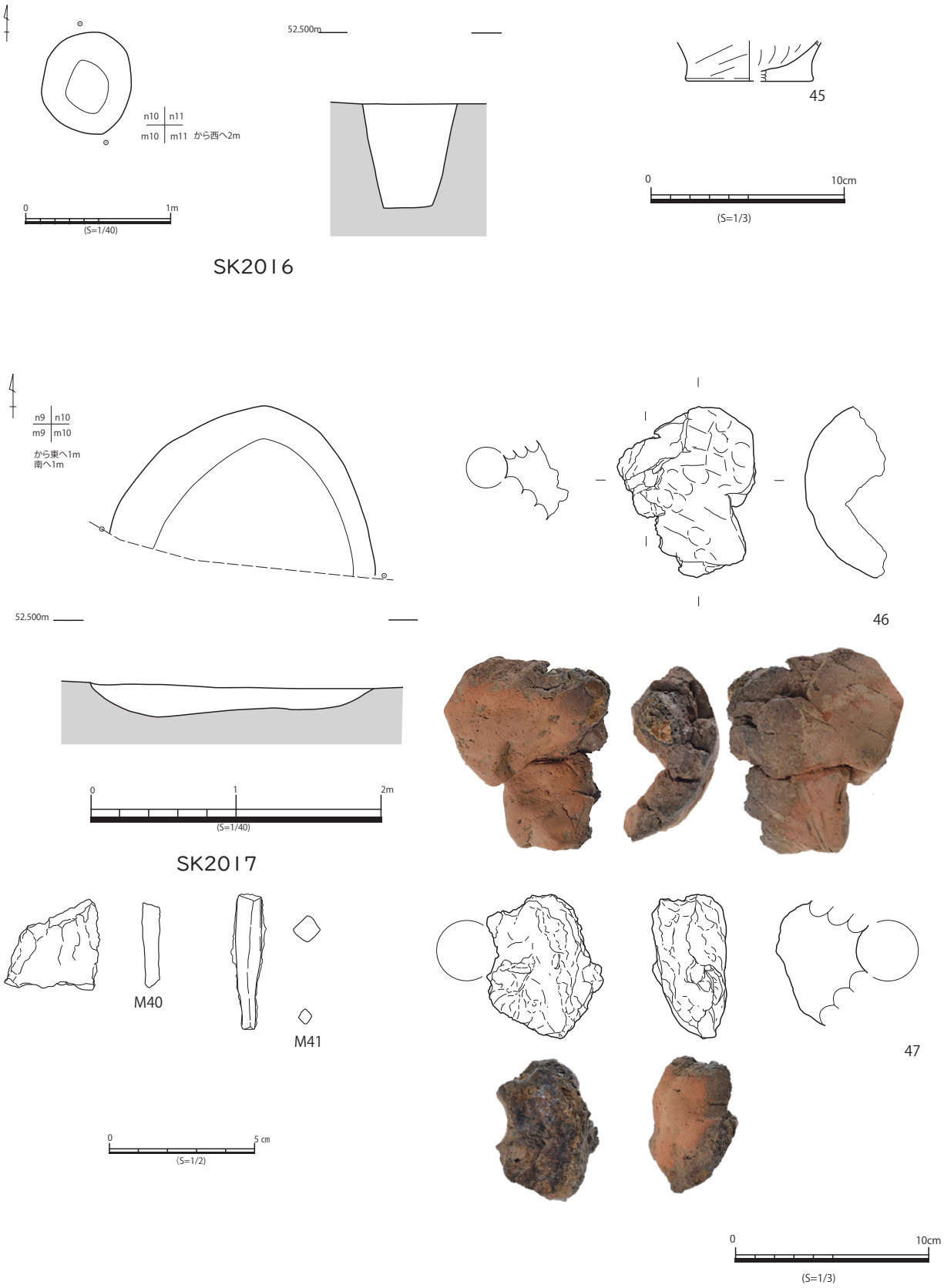


図 40　土坑(SK)遺構図・遺物図（8）

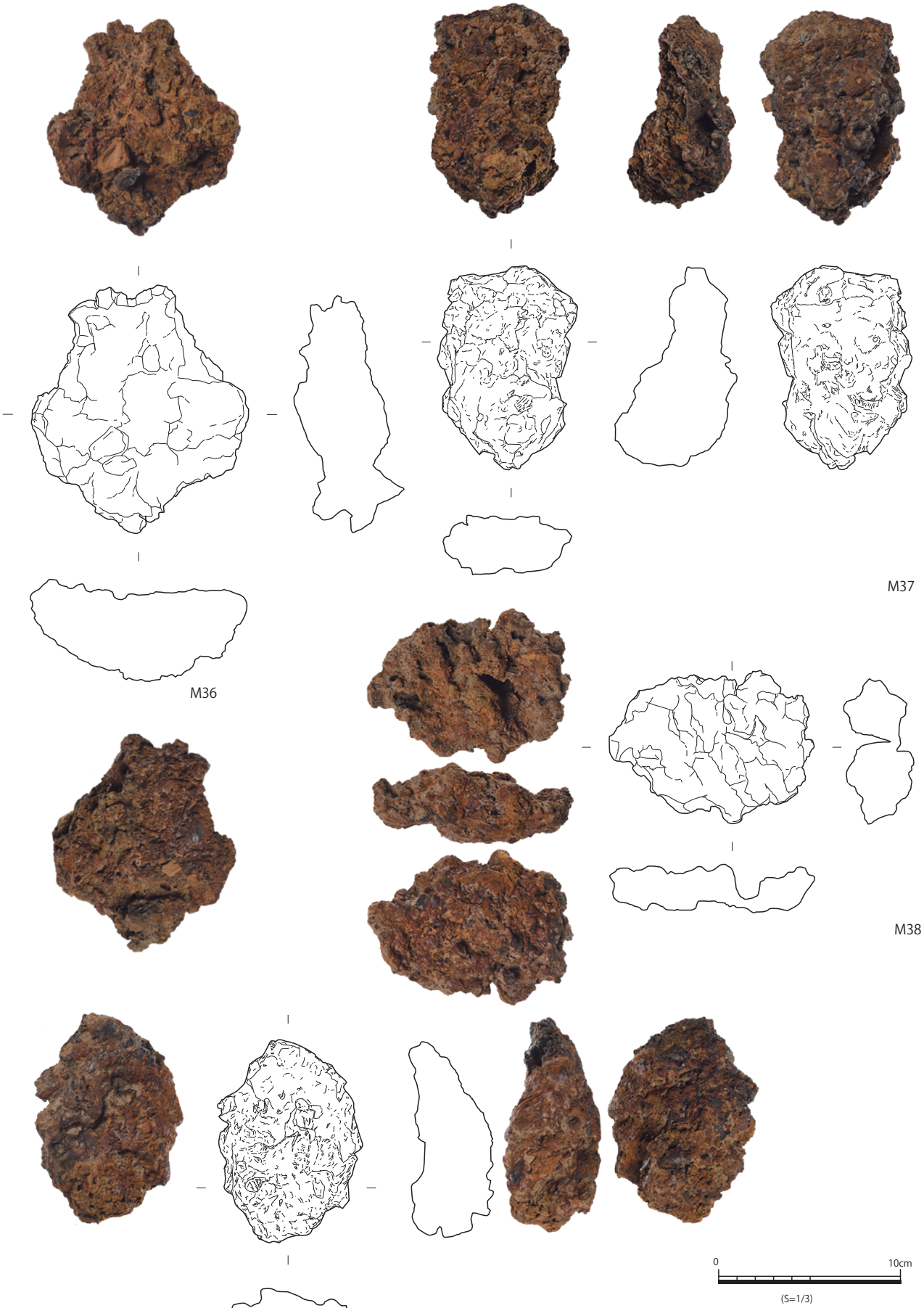


図 41　土坑(SK)遺物図（9）

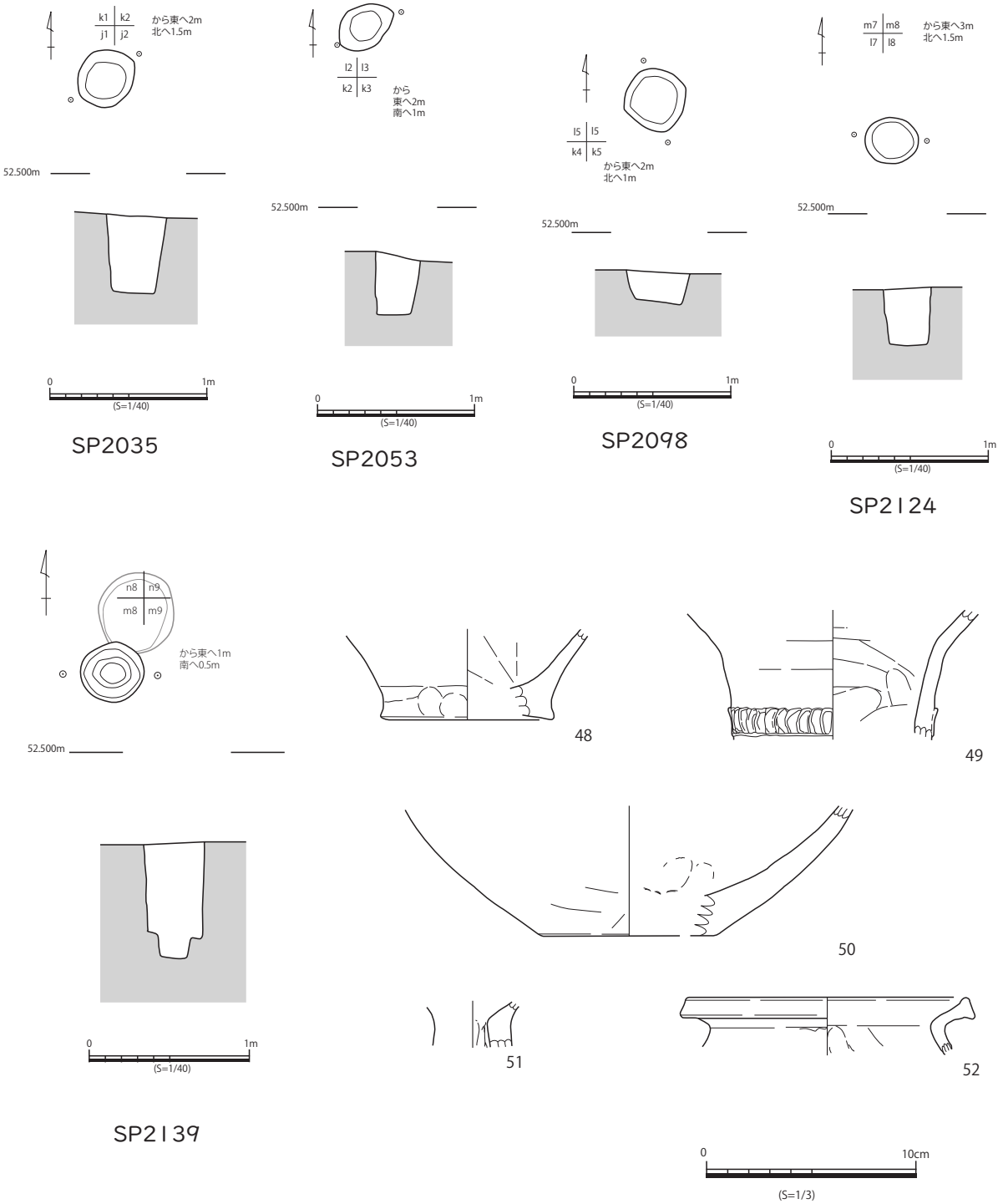


図 42　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図（1）

小穴・柱穴 SP

35 号小穴 SP2035（旧 SP1035）

k2 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は長方形を呈する。長軸長 0.40m、短軸長 0.34m、深度 0.28m を測る。

遺構覆土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂混じりシルト質土で、鉄分、炭化物、土器粒を含む。

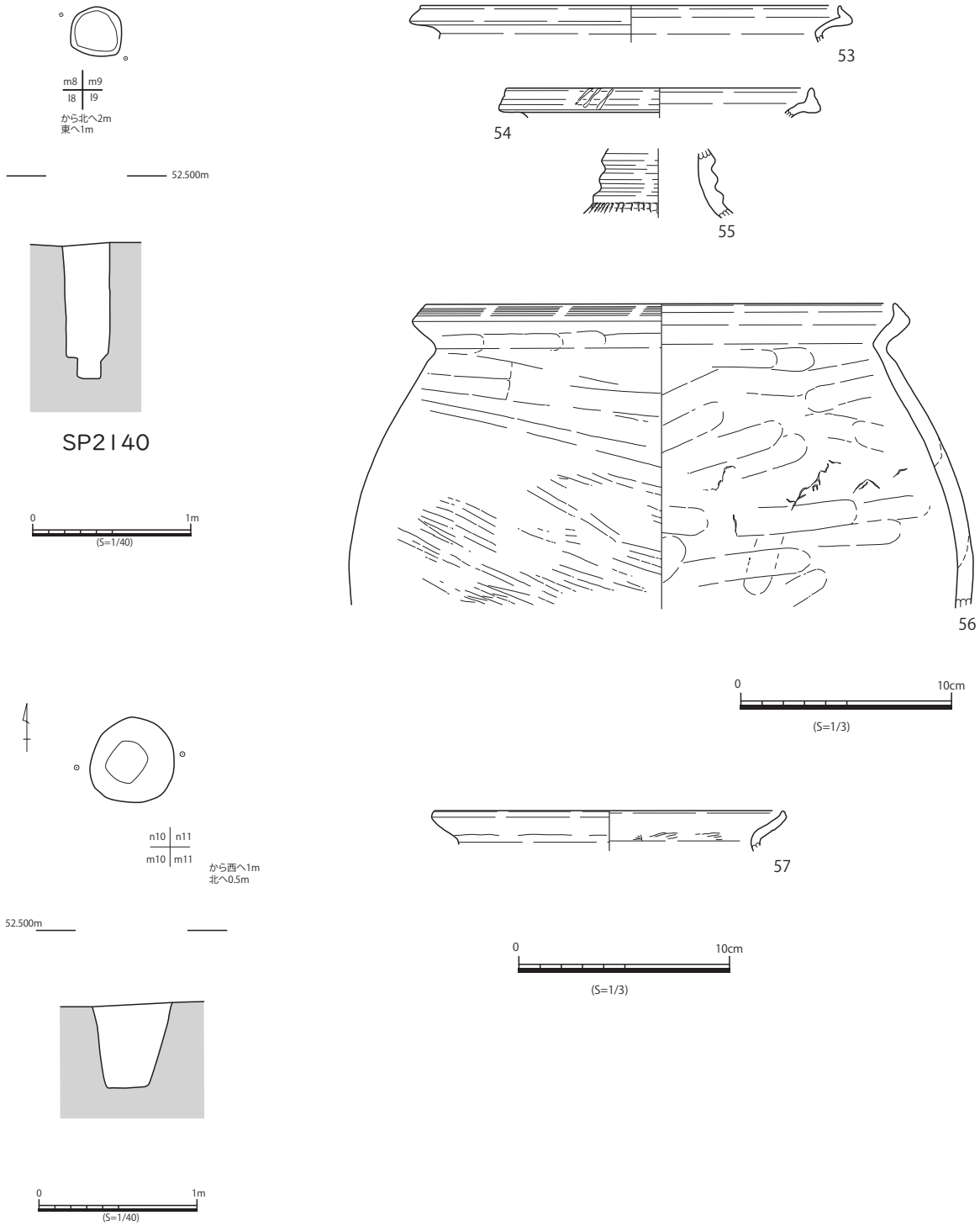


図 43　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図（2）

弥生土器甕 48 は、園瀬川流域からの搬入品と推定される。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

53 号小穴 SP2053（旧 SP1053）

k3 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.39m、短軸長 0.26m、深度 0.40m を測る。

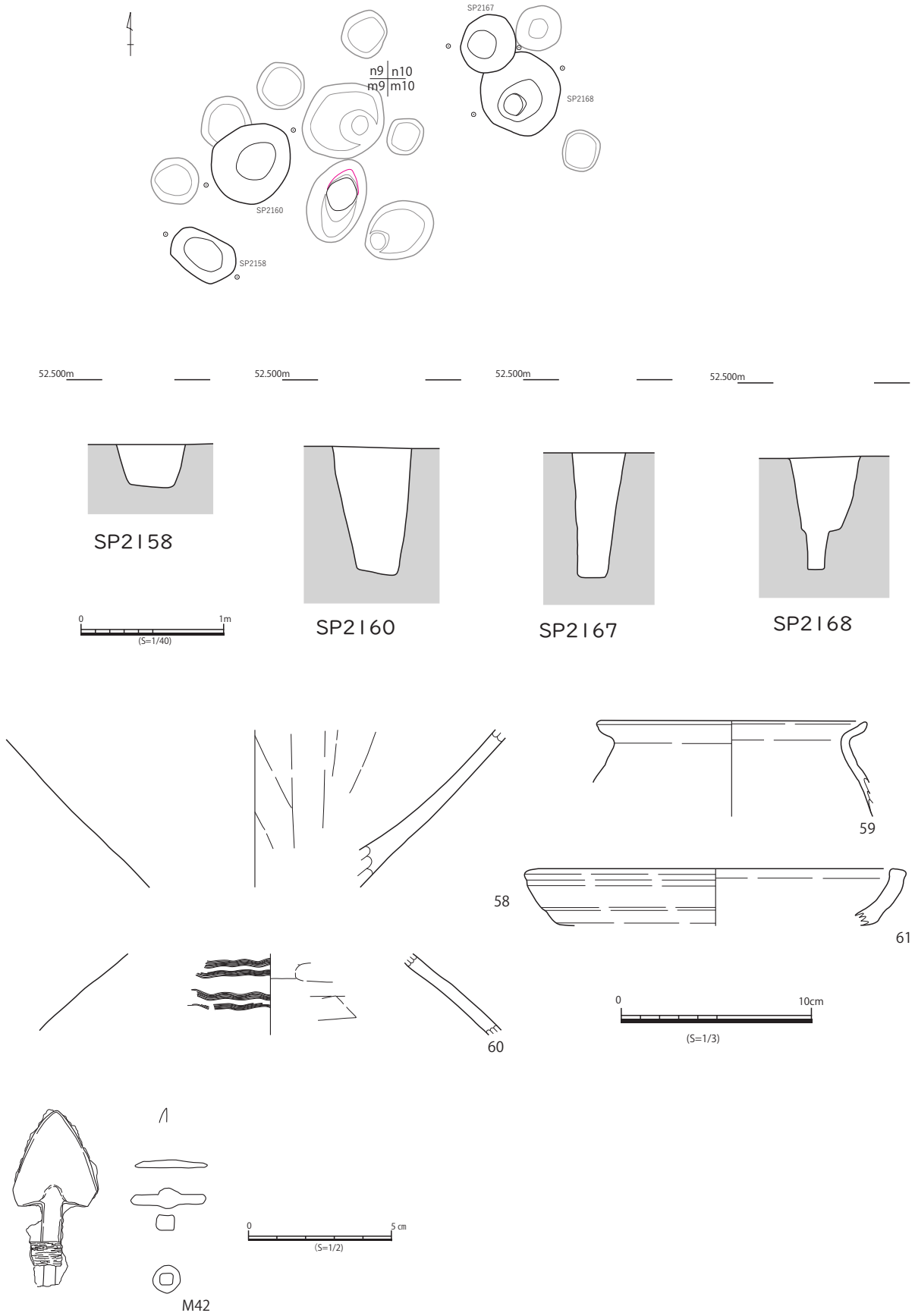


図 44　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図（3）

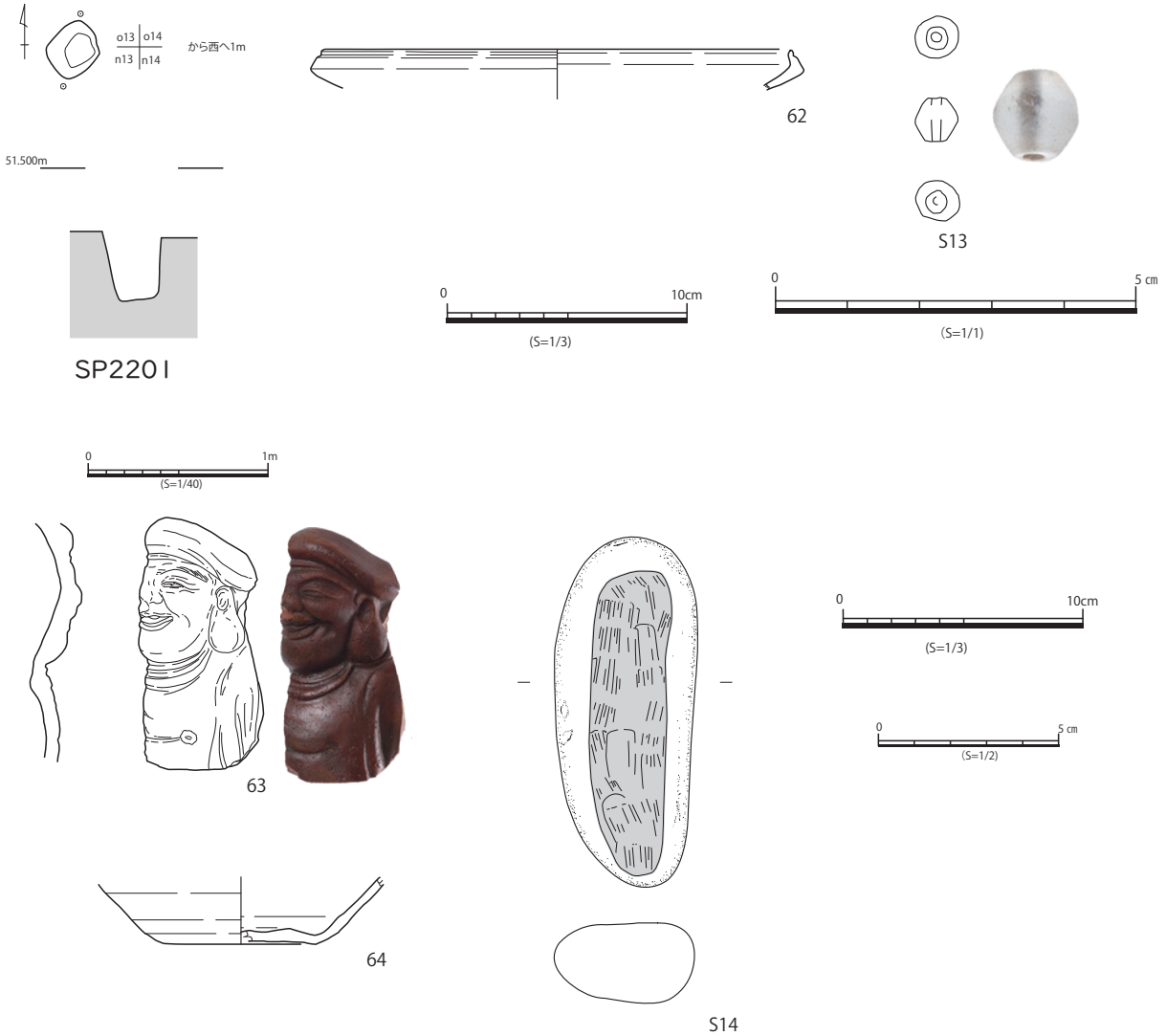


図 45　小穴・柱穴(SP)遺構図・遺物図（4）

遺構覆土は、にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質土で、全体に暗褐色粘質土ブロック含み、鉄分、土器粒、炭化物を含む。

弥生土器壺 50 は、吉野川流域からの搬入品である。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

98 号小穴 SP2098（旧 SP1098）

l5 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は隅丸方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.38m、短軸長 0.37m、深度 0.20m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、暗褐色粘質土ブロック、土器粒を含む。

弥生土器壺 49 は、勝浦川流域からの搬入品か。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

124 号小穴 SP2124（旧 SP1124）

m8 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.33m、短軸長 0.31m、深度 0.34m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、暗褐色粘質土ブロック、炭化物を含む、一部灰黄褐色シルトブロックを含む。

弥生土器高杯 51 は、脚部内面に絞り痕を残し、勝浦川流域からの搬入品である可能性がある。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

139 号小穴 SP2139（旧 SP1139）

m9 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は二段形を呈する。長軸長 0.29m、短軸長 0.27m、深度 0.55m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土である。

弥生土器甕 52 は、吉野川流域からの搬入品である。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

140 号小穴 SP2140（旧 SP1140）

m9 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.33m、短軸長 0.29m、深度 0.88m を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土で、土器粒、炭化物、土器片を含む。

覆土中より弥生土器甕、壺、細頸壺が出土。

甕 53 は外面に煤が付着し、鮎喰川流域からの搬入品である。壺 54 は鮎喰川流域からの搬入品、細頸壺 55 は吉野川流域からの搬入品と推定される。甕 56 は体部内面に接合痕を残し、園瀬川流域からの搬入品の可能性がある。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

153 号小穴 SP2153（旧 SP1153）

m9 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は二段形を呈する。長軸長 0.40m、短軸長 0.35m、深度 0.20m を測る。

遺構覆土は、黄褐色（10YR5/6）シルト質土で、暗褐色シルトブロック、炭化物、土器片を含む。

中世前半と推定される。

158 号小穴 SP2158（旧 SP1158）

m9 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整隅丸長方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.48m、短軸長 0.31m、深度 0.30m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、全体に土器粒、炭化物含む。

弥生土器壺 58 は内面に炭化物が付着し、勝浦川流域からの搬入品と推定される。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

160 号小穴 SP2160（旧 SP1160）

m9 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.61m、短軸長 0.52m、深度 0.89m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、暗褐色シルトブロック、土器片、炭化物を含む。

弥生土器壺 60 は鮎喰川流域からの搬入品である。M42 は鉄鏃である。片丸造の三角形鏃身に断面方形の頸部が伴う。鏃身部に別造頸部を鍛接している。

出土した土器は弥生時代中期であるが、鉄鏃から中世と推定される。

167 号小穴 SP2167（旧 SP1167）

n10 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.41m、短軸長 0.39m、深度 0.87m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、暗褐色粘質土ブロック、炭化物、土器粒を含む。

弥生土器高杯 61 は、吉野川流域からの搬入品の可能性が高い。

出土した土器は弥生時代中期である。

168 号小穴 SP2168（旧 SP1168）

m10 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.56m、短軸長 0.51m、深度 0.78m を測る。基底部に根石が据えられる。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、全体に土器粒、炭化物を含む。

弥生土器甕 59 は、勝浦川流域からの搬入品である可能性がある。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

173 号小穴 SP2173（旧 SP1173）

n10 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.56m、短軸長 0.53m、深度 0.52m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）シルト質土で、全体に土器粒、炭化物を含む。

弥生土器甕 57 は、吉野川流域からの搬入品である。

出土した土器から弥生時代中期と推定される。

201 号小穴 SP2201（旧 SP1201）

n13、o13 グリッドにて検出された小穴である。平面形態は不整方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸長 0.30m、短軸長 0.25m、深度 0.38m を測る。

遺構覆土は、褐色（10YR4/6）細砂混じりシルト質土で、暗褐色粘質土ブロック、炭化物を含む。

弥生土器甕 62 は、在地産と推定される。63 は陶器製土人形であり、蛭子神社関連遺物の流れ込みか。S13 は水晶製小玉で、片面穿孔である。

中世前半と推定される。

203 号小穴 SP2203（旧 SP1203）から出土した S14 は砂岩製砥石である。204 号小穴 SP2204（旧 SP1204）からは土師質土器杯 64 が出土。

性格不明遺構 SX

1 号性格不明遺構 SX2001（旧 SB1001）

l5、l6 グリッドにて検出された性格不明遺構である。平面形態は楕円形を、断面形態は舟底形を呈する。残存長軸長 2.53m、短軸長 4.87m、深度 0.88m、主軸方位 N-66°-E を測る。

遺構覆土は、上層は灰黄褐色シルト質土や黒褐色シルト質土で、土器、炭化物を多く含む。中層はにぶい黄褐色シルト質土や灰黄褐色シルト質土で土器、炭化物を多く含む。下層は灰黄褐色シルト質土やにぶい黄褐色シルト質土で土器、炭化物を含む。最下層は、明黄褐色細砂混じりシルト質土で炭化物、焼土粒含む。

遺物は最下層の明黄褐色細砂混じりシルト質土と 1 層灰黄褐色シルト質土層中より出土した。床面直上より出土した土器は少なく、遺構廃絶後 6、7、8 層堆積後に投棄された一群（主に 5 層出土）と埋

没過程最終段階に投棄された一群（2 層上位）と（1 層より出土）に大別される。

壺 66、126、89、91、97、88、90、75、71、77、99、101 は、勝浦川流域からの搬入品である可能性がある。75 には焼成時破裂痕が観察される。68、72、73、92、98、102、131 は那賀川流域産と推定される。74、89 は那賀川流域産もしくは勝浦川流域からの搬入品か。壺 65、69、93 は園瀬川流域からの搬入品である可能性がある。79 は鮎喰川流域からの搬入品と推定される。長頸壺 70 は吉野川流域からの搬入と推定され、外面に籾殻状の圧痕が残る。壺 86 は吉野川流域からの搬入品である。甕 80、107、108 は那賀川流域産と推定される。甕 87、104、118 は那賀川流域産もしくは勝浦川流域からの搬入品の可能性がある。甕 83、84、95、103、111、115、121、138 は、勝浦川流域からの搬入品かその可能性がある一群である。甕 138 は底部外面に穿孔を施す途中である。甕 76 は焼成時破裂痕が残る。甕 83 は 2 次焼成による被熱赤変が確認される。甕 85、96、119、120、123 は鮎喰川流域から搬入された可能性がある。甕 100 は内面に煤が付着し、2 次焼成による被熱赤変が観察される。甕 85 は 2 次焼成による被熱赤変が観察される。高杯 132 は鮎喰川流域からの搬入品である。高杯 133、

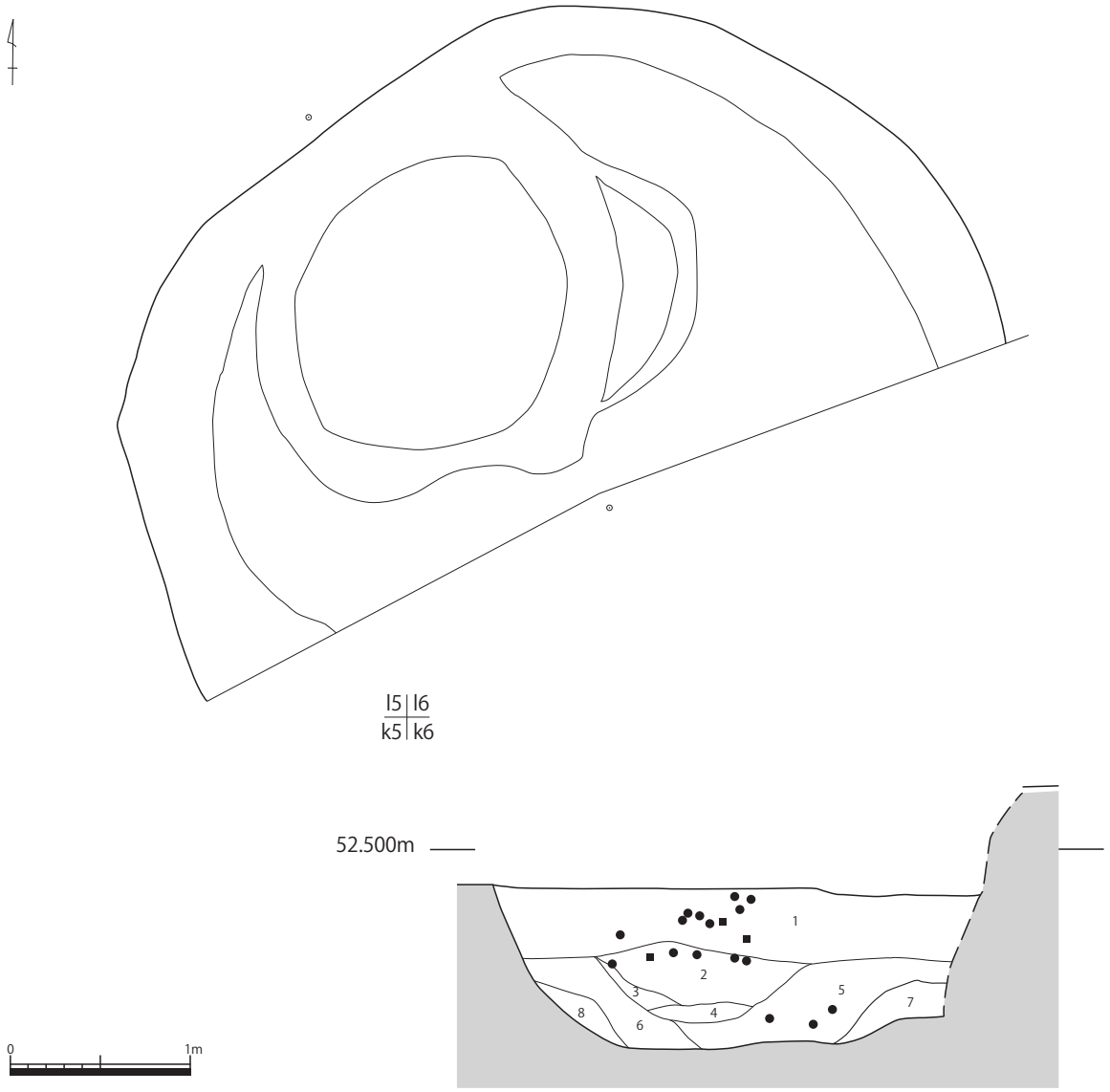


図 46　1 号性格不明遺構（SX2001）遺構図

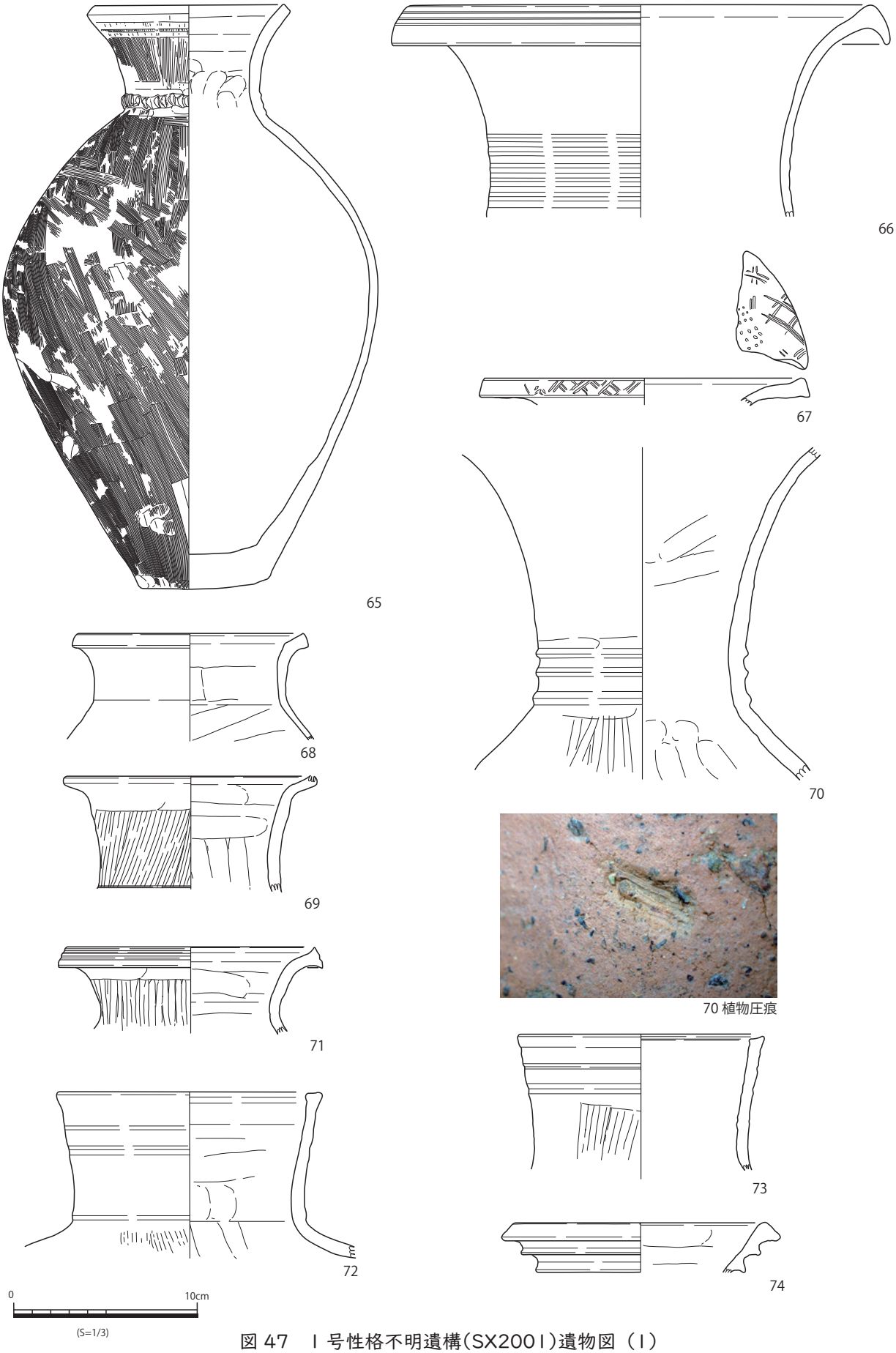


図 47　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（1）

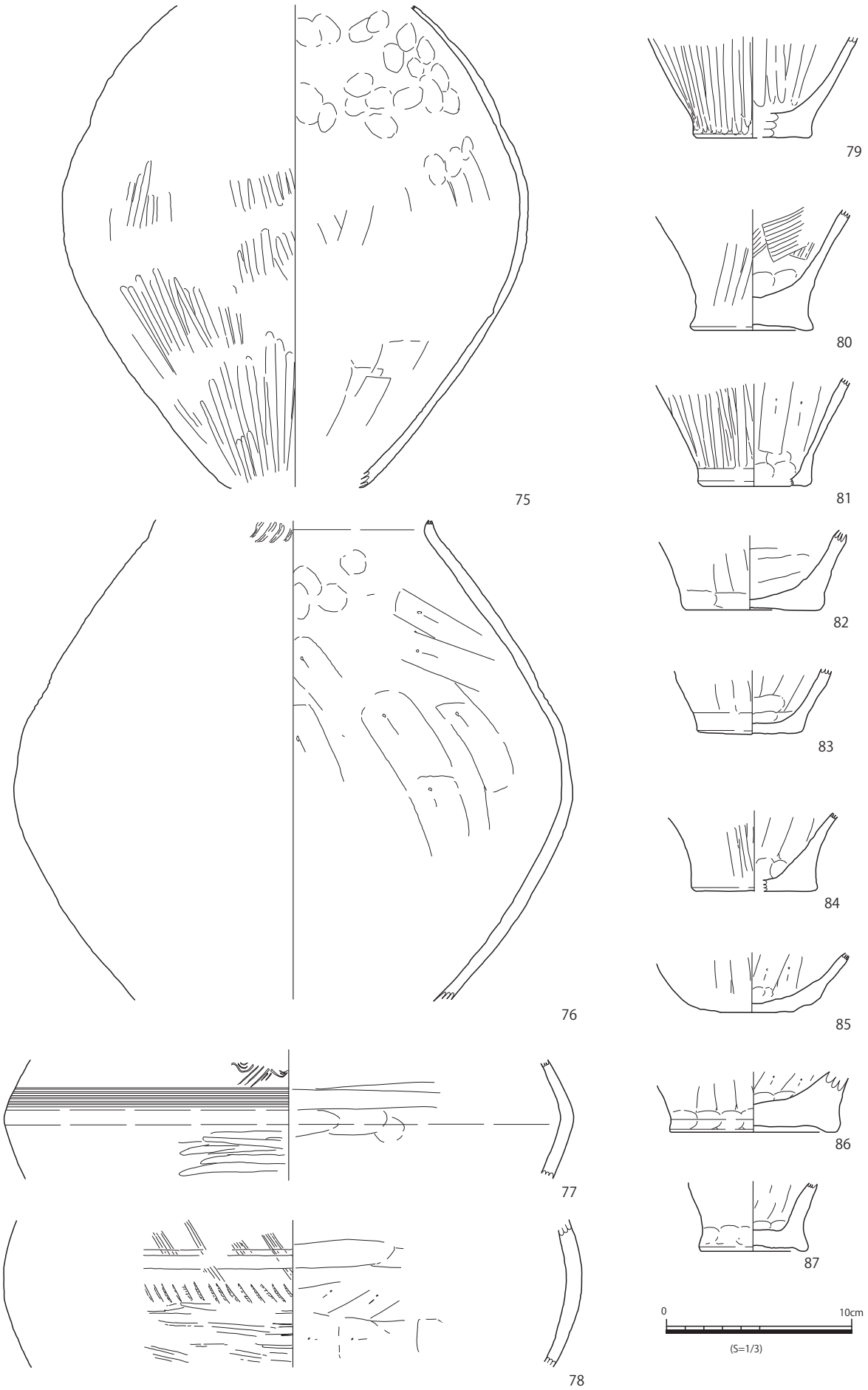


図 48　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（2）

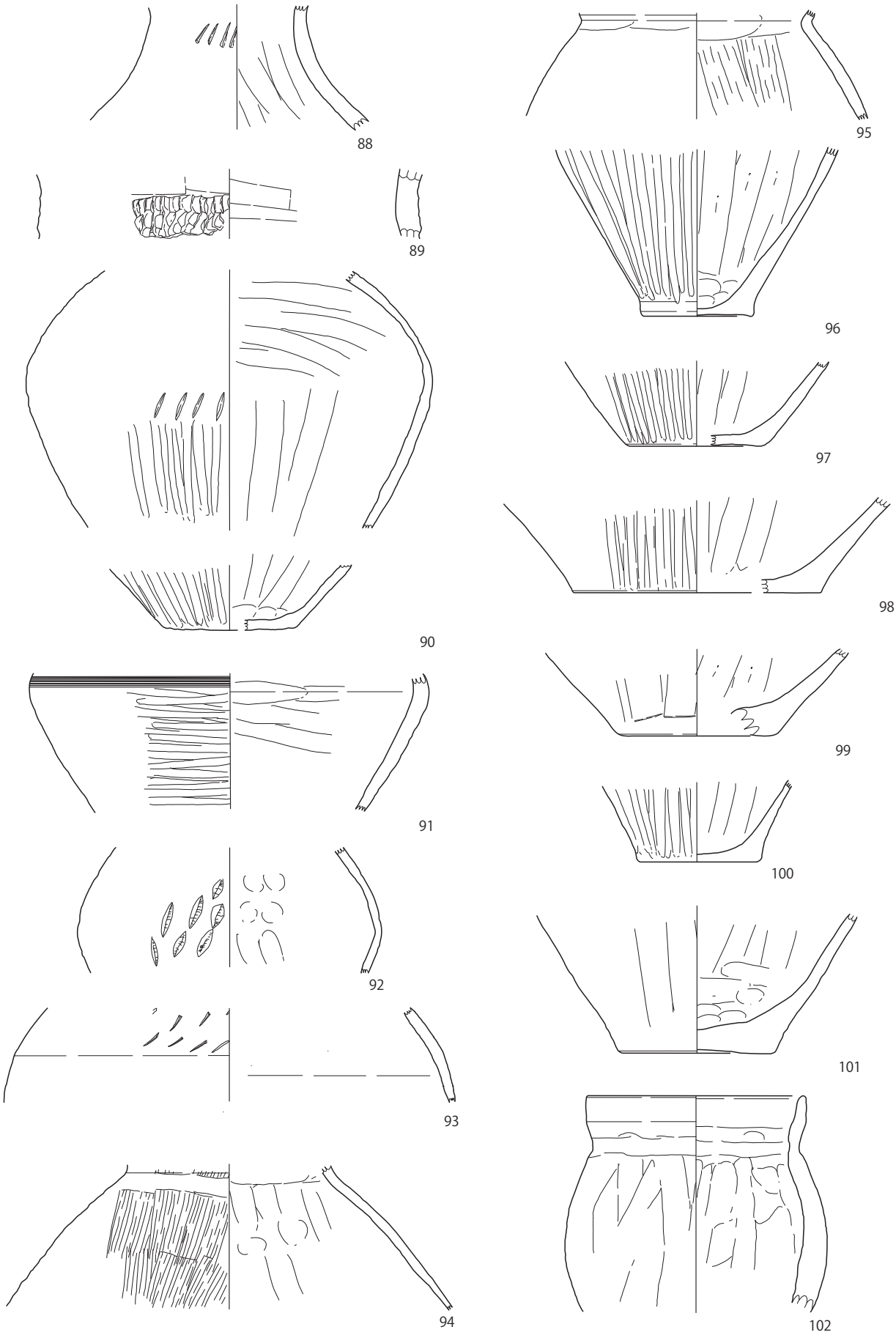


図 49　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（3）

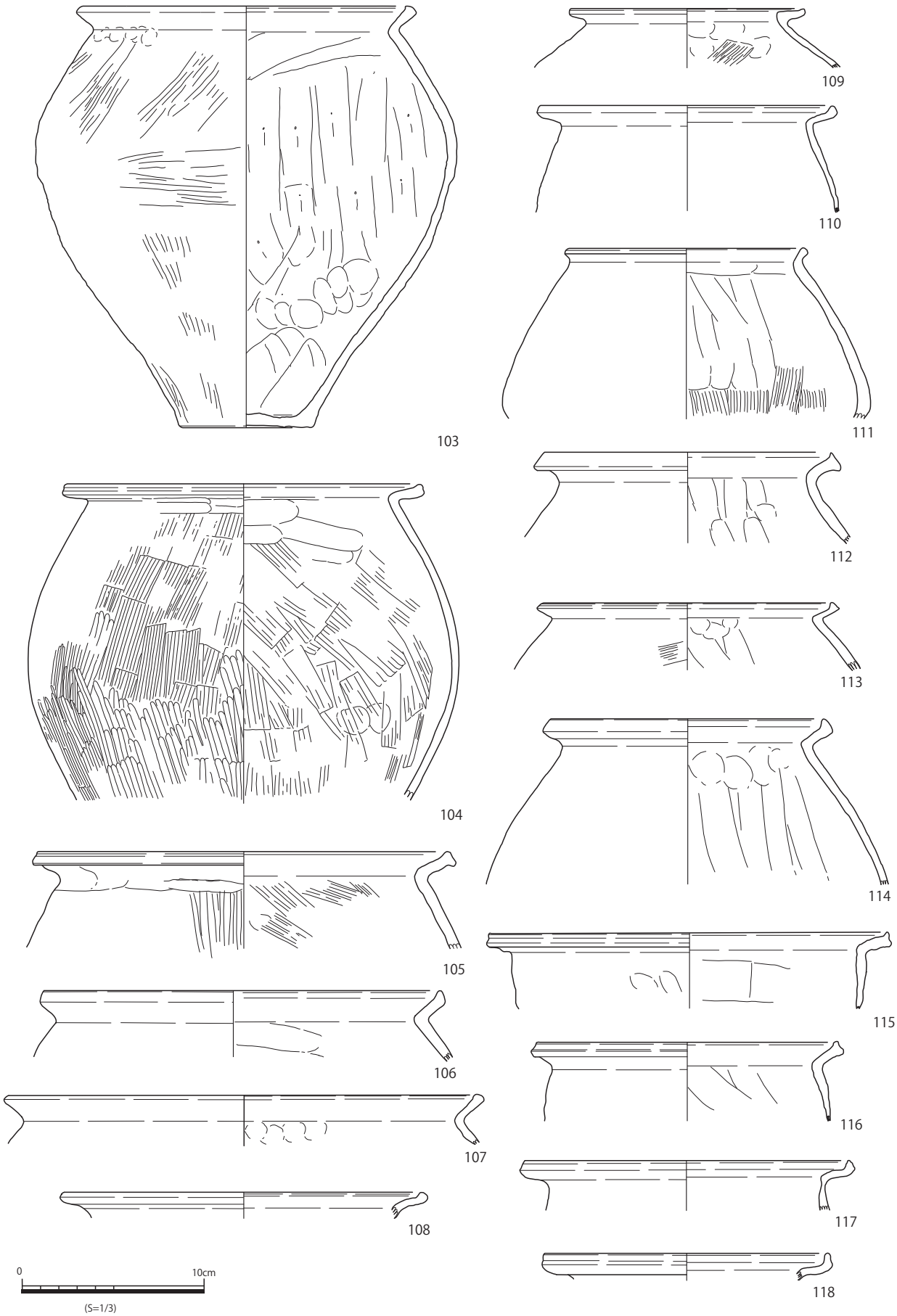
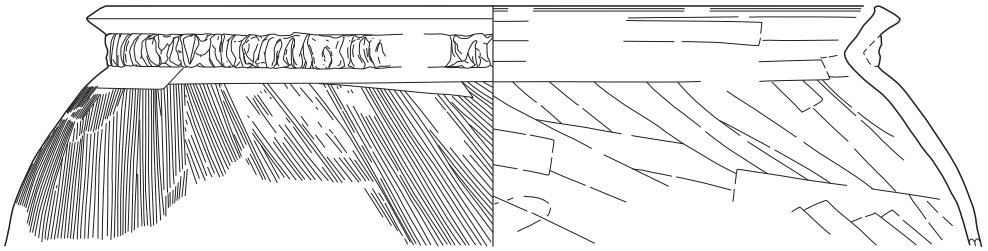
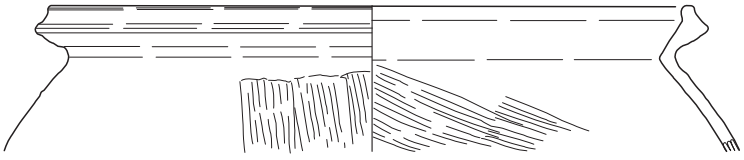


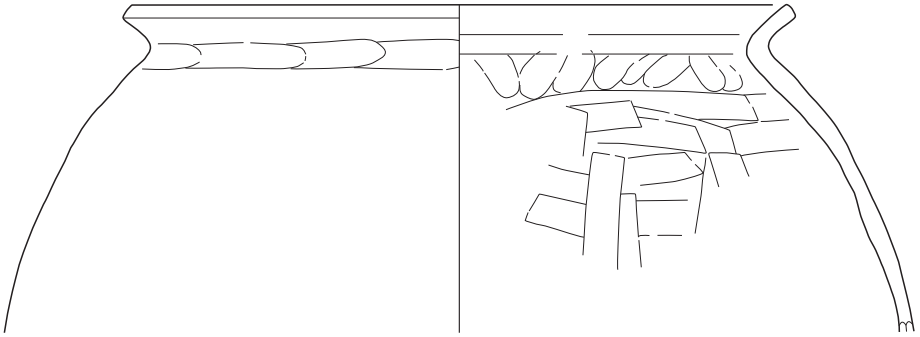
図 50　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（4）



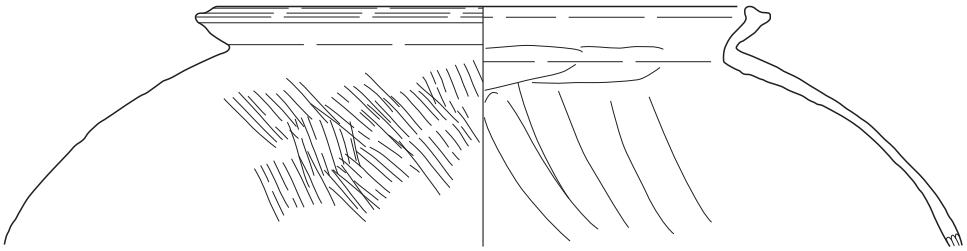
119



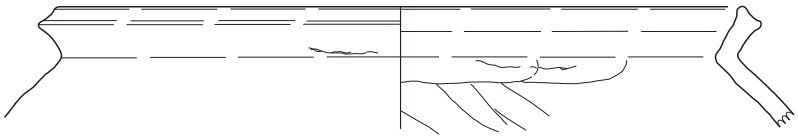
120



121



122



123

0 10cm

(S=1/3)

図 51　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（5）

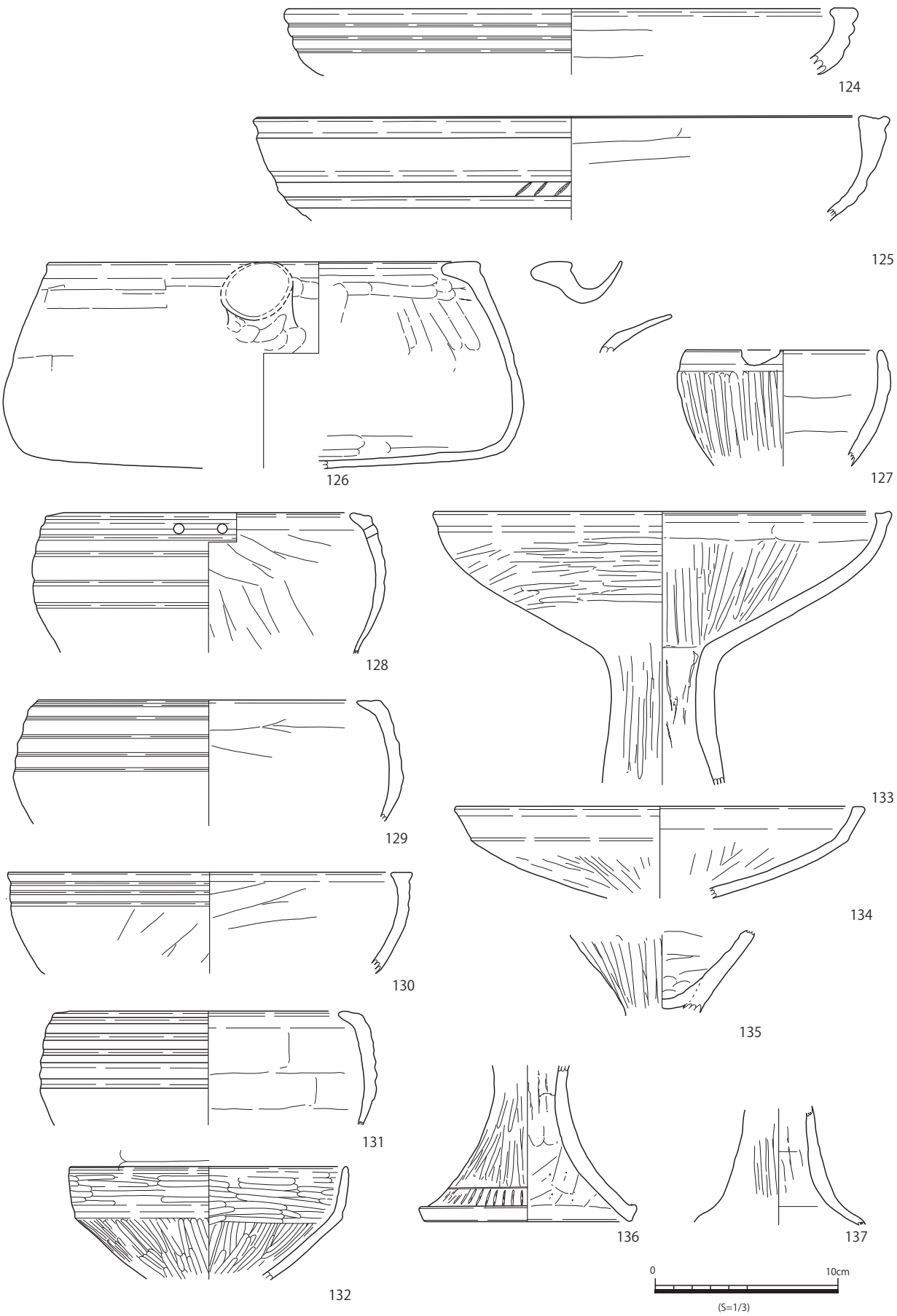
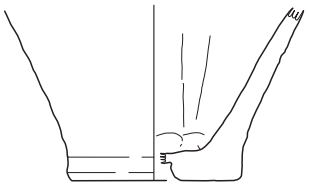
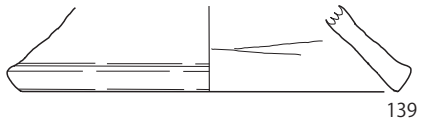
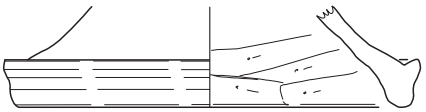


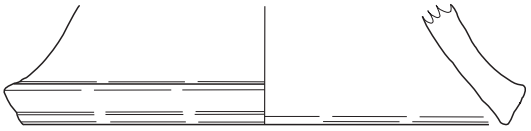
図 52　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（6）



138 穿孔状況







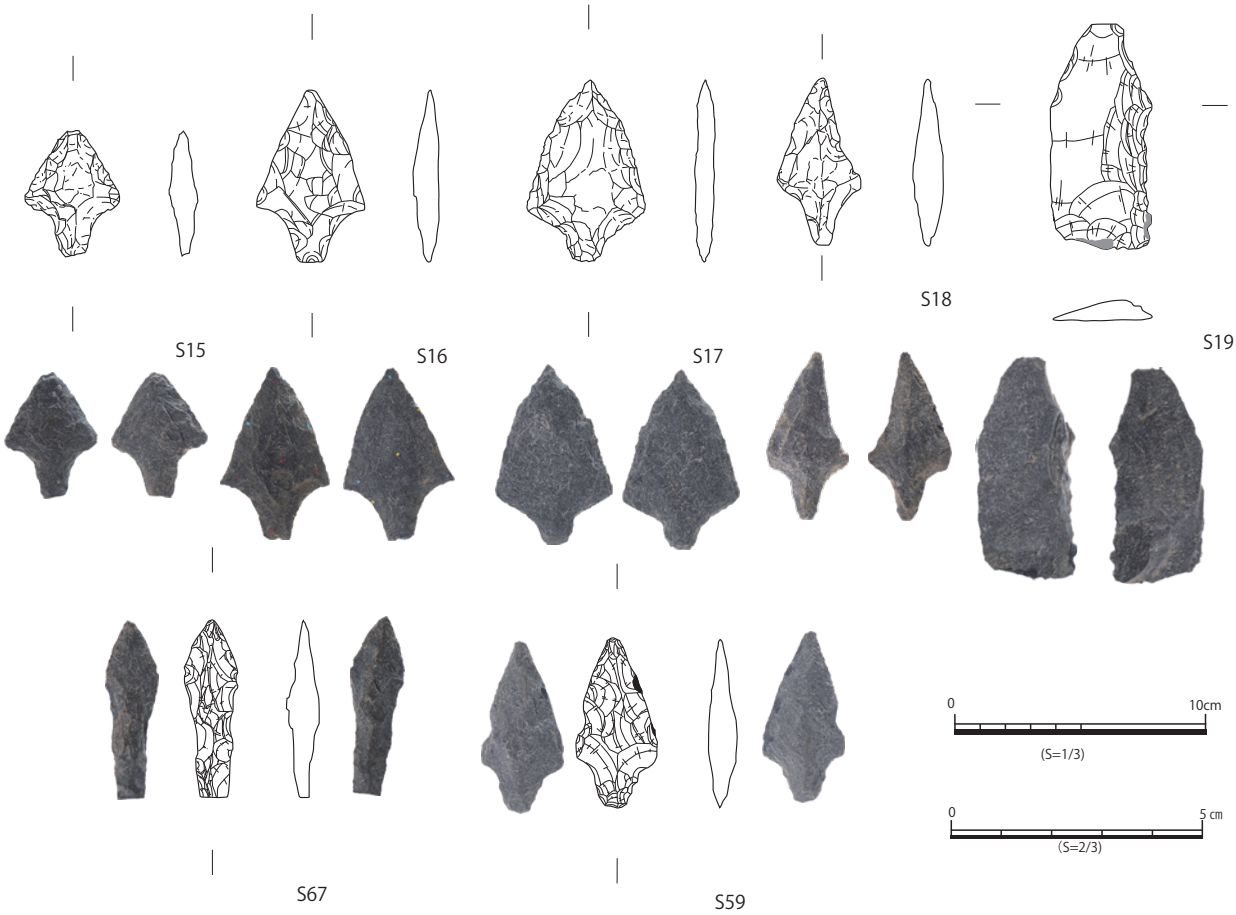


図 53　Ⅰ号性格不明遺構(SX2001)遺物図（7）

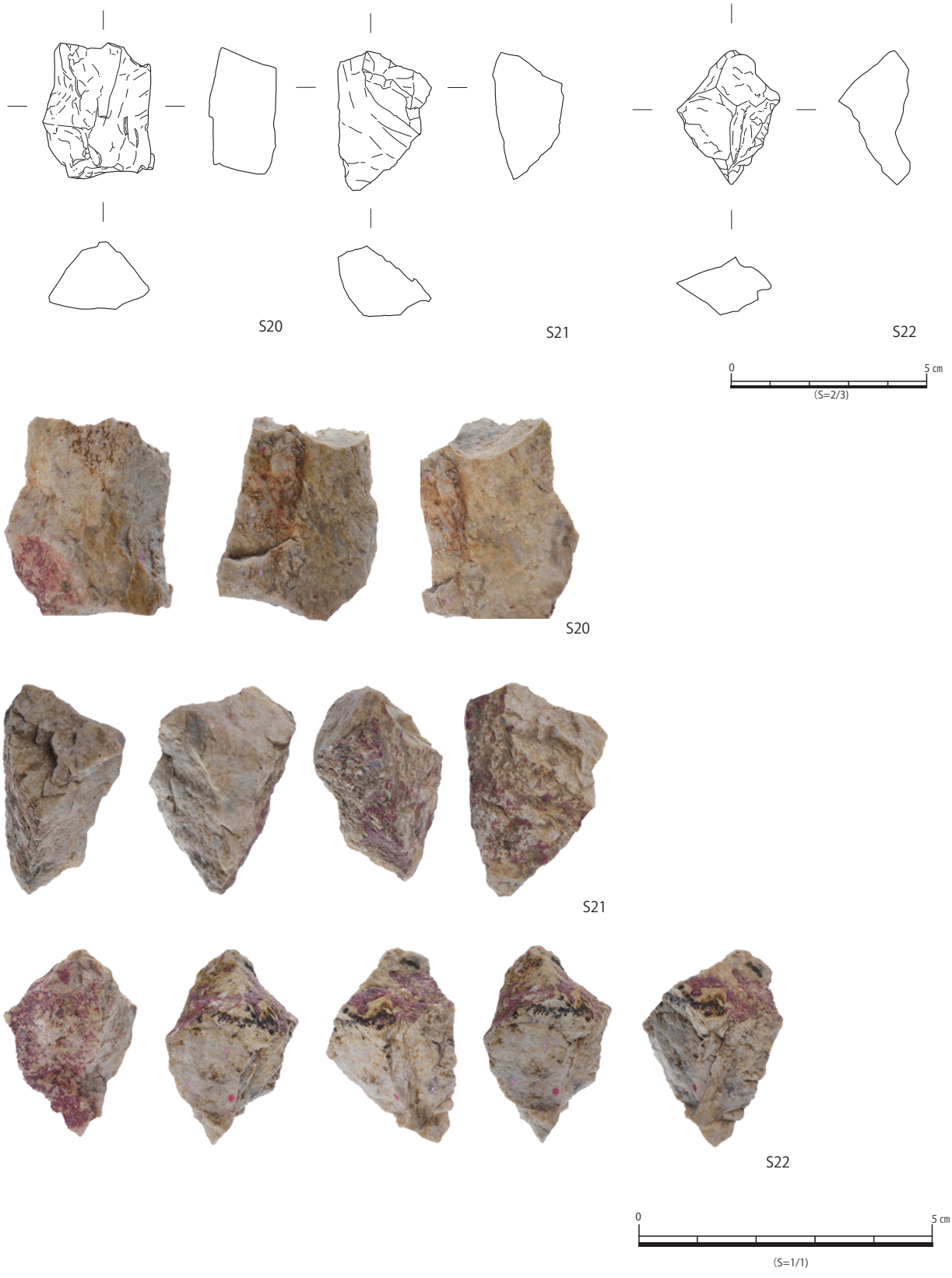


図 54　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（8）

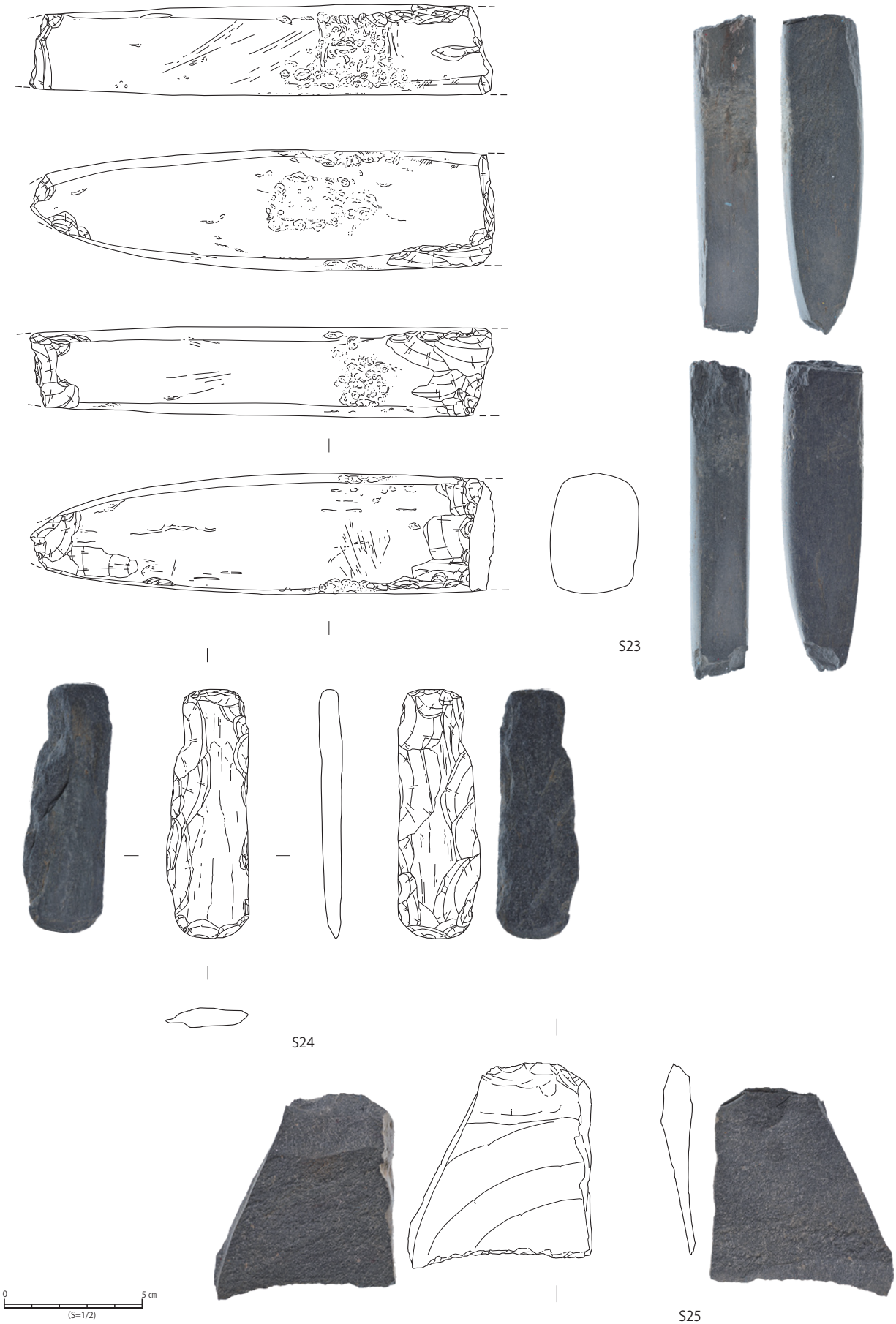


図 55　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（9）

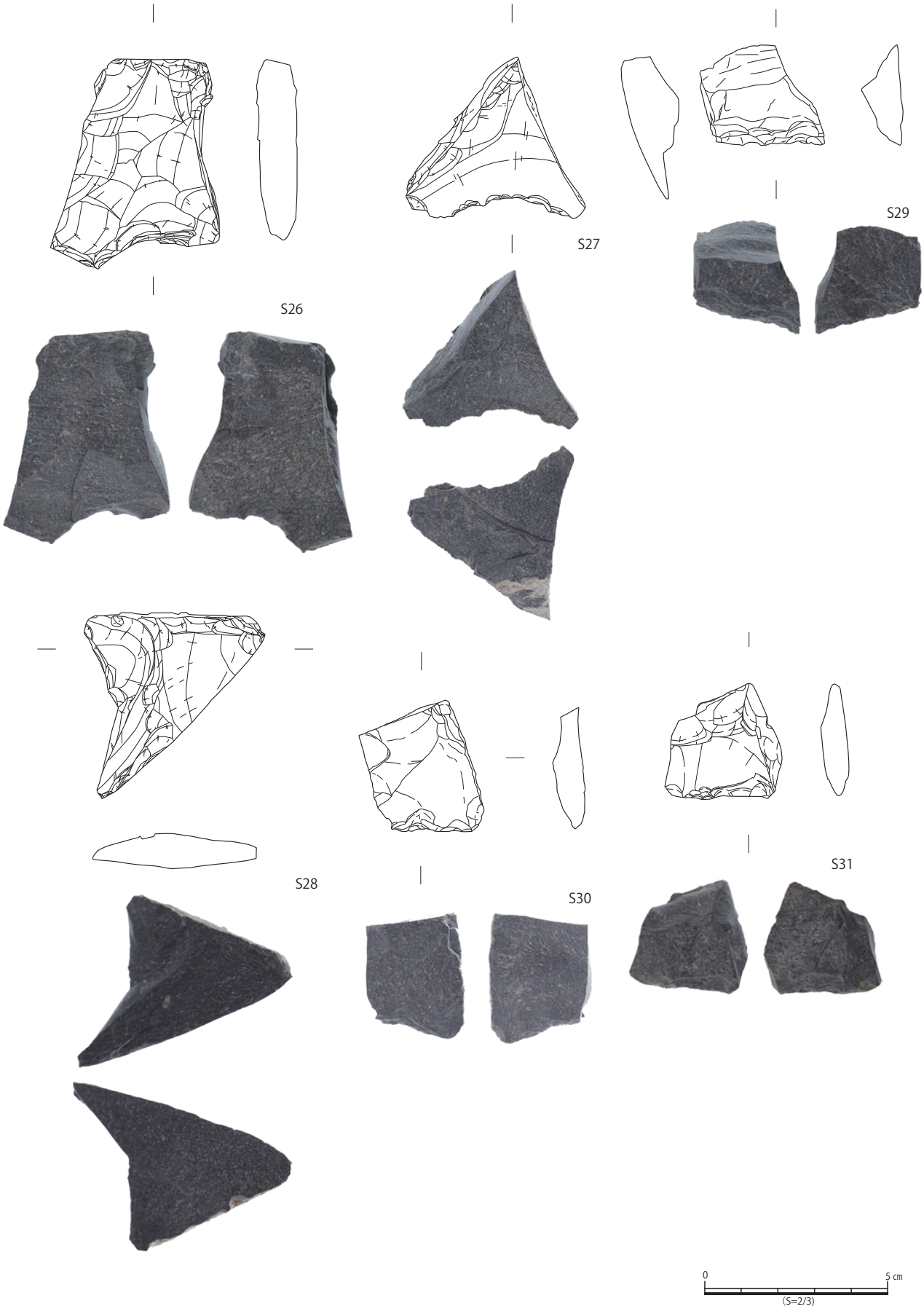


図 56　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（10）

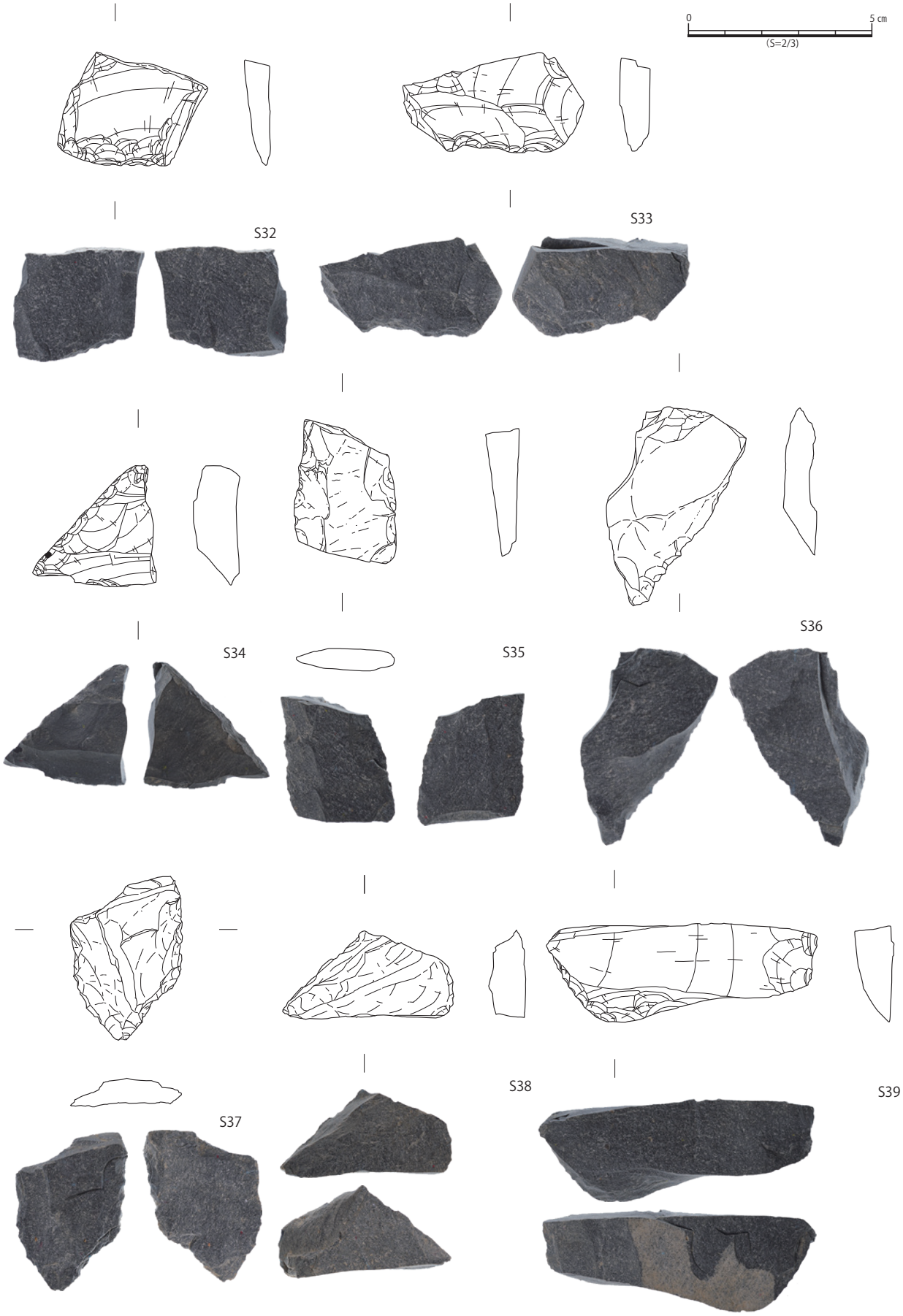


図 57　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（11）

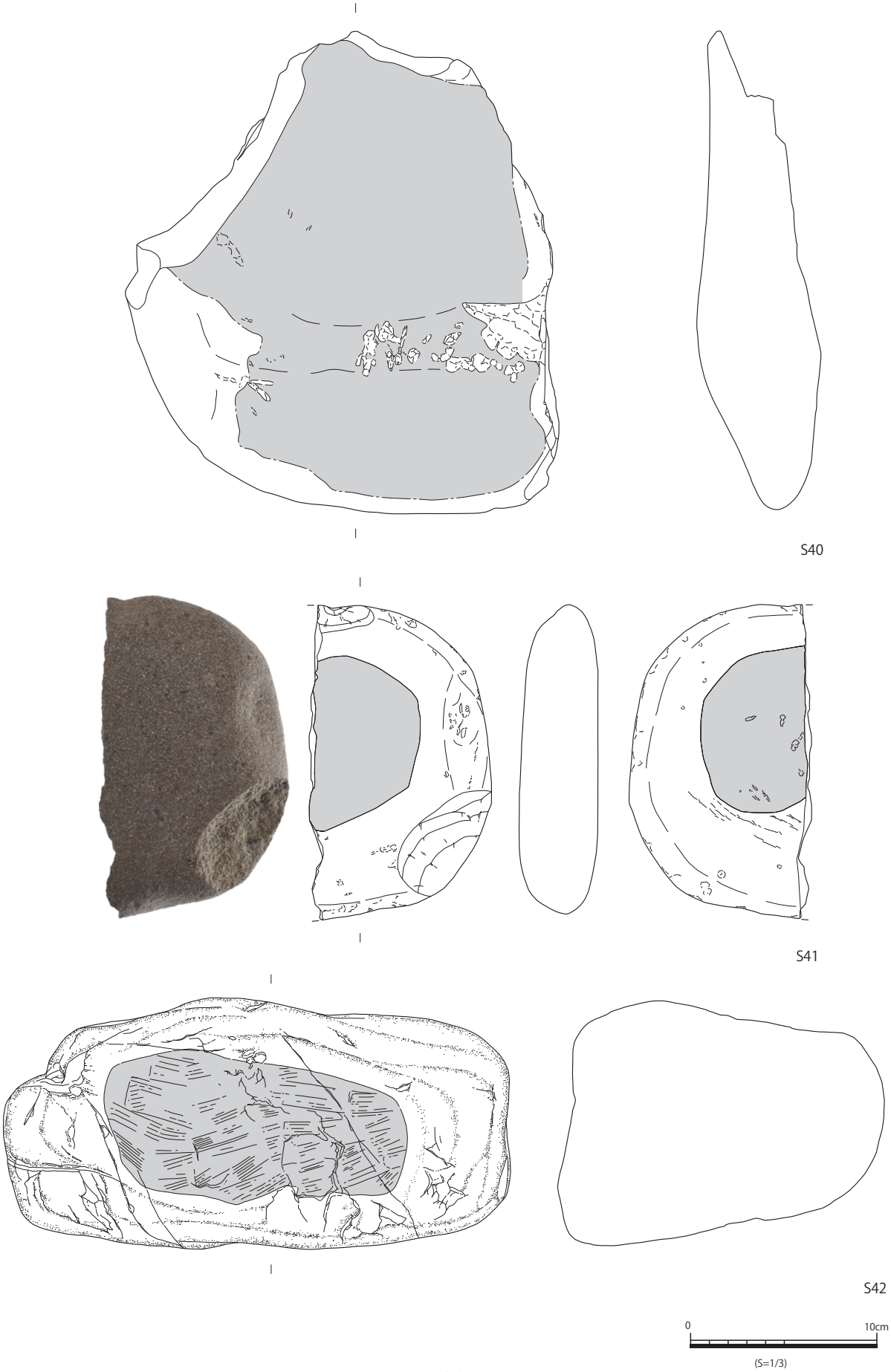


図 58　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（12）

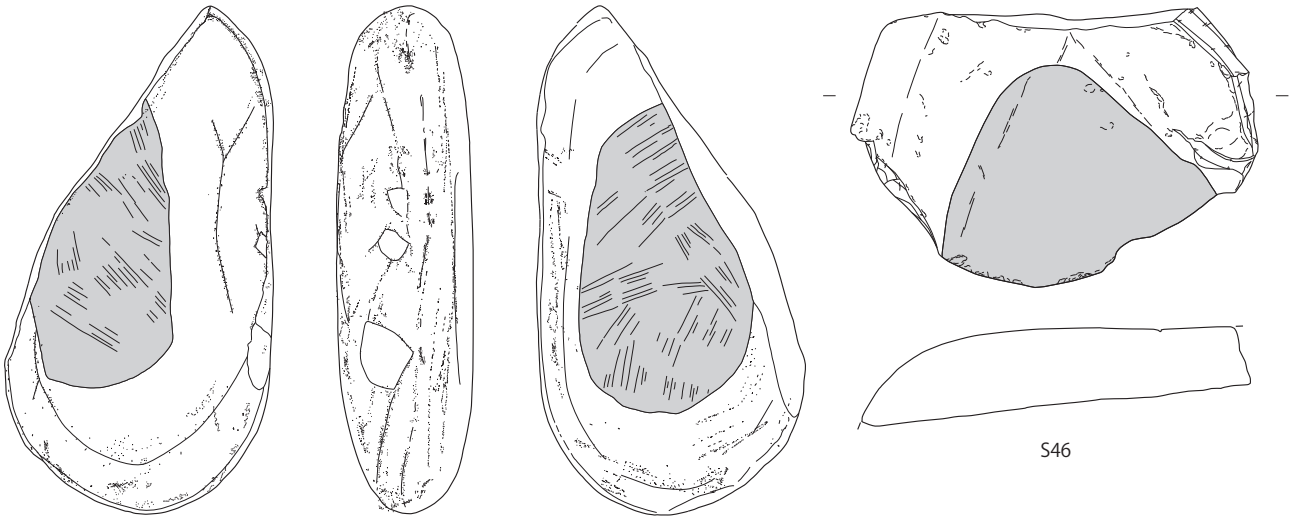


図 59　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（13）

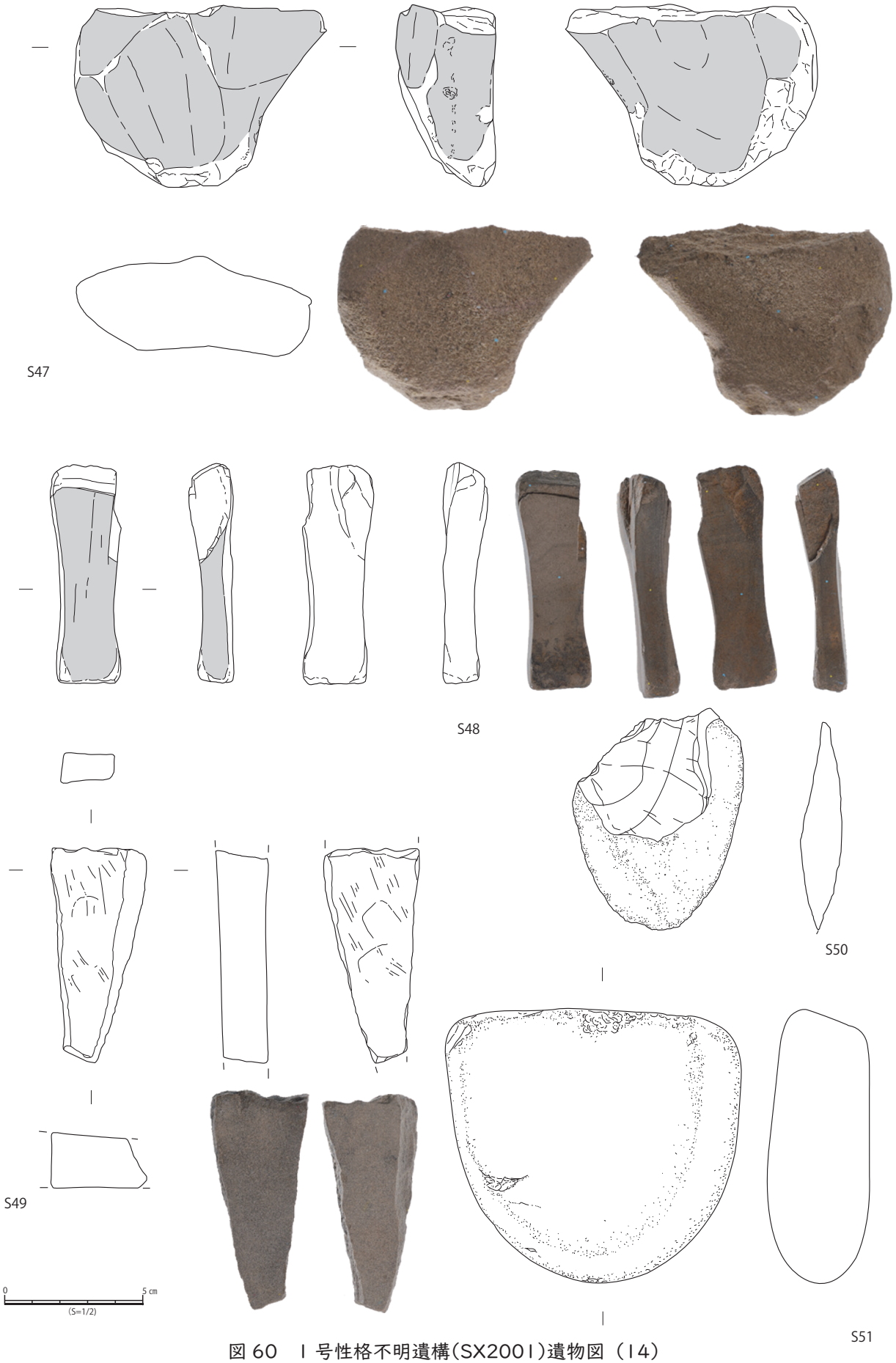


図 60　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（14）

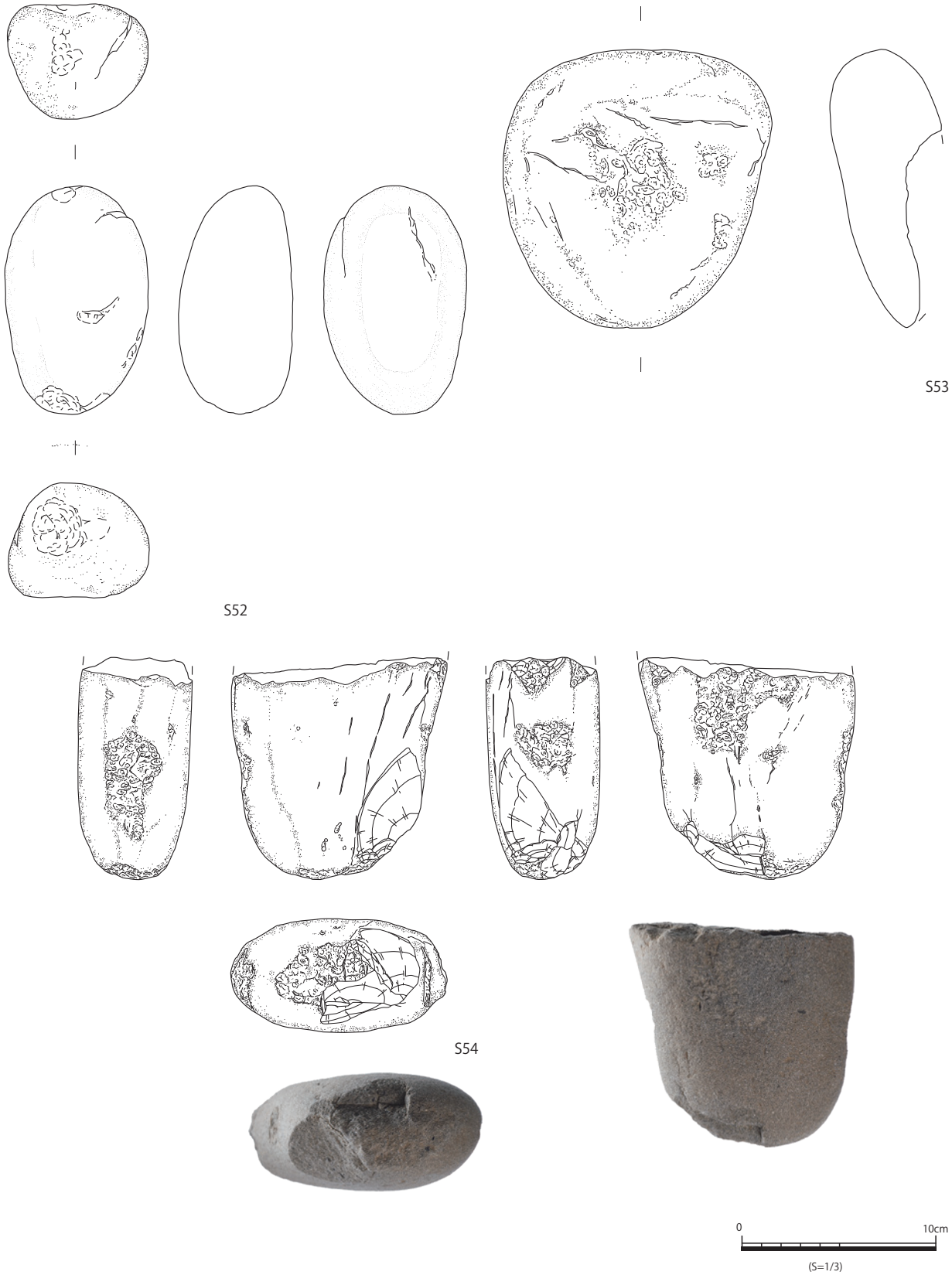


図61　1号性格不明遺構(SX2001)遺物図（15）

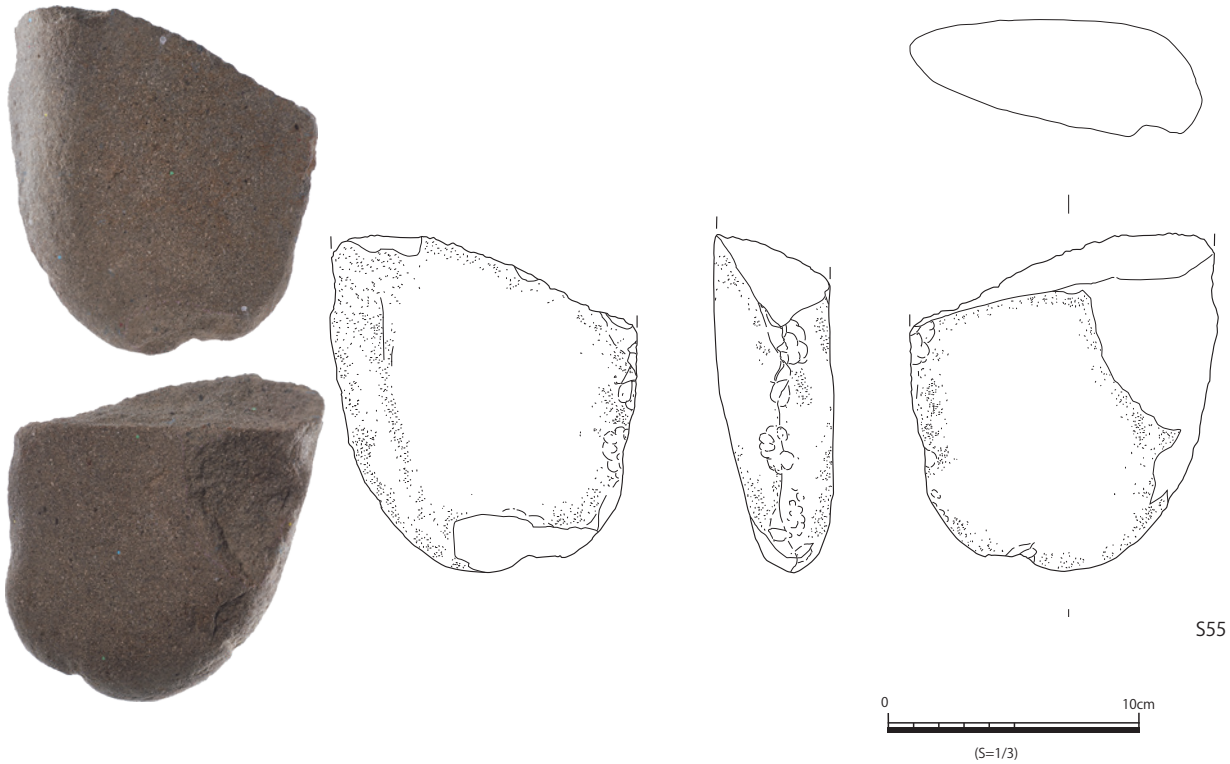


図 62　1 号性格不明遺構(SX2001)遺物図（16）

134、135、136、137、139、140、台付鉢 143 は勝浦川流域から搬入された可能性がある一群である。無頸壺 131 は那賀川流域産である可能性がある。

S15 ～ S19、S67、S59 はサヌカイト製石鏃である。S20、S21、S22 は辰砂鉱石原石である。S23 は結晶片岩製柱状片刃石斧である。S24 は結晶片岩石打製庖丁を転用した石斧である。S25、S26、S29、S30、S31、S32、S33、S34、S36 はサヌカイト製楔形石器である。S27、S28、S38、S39 はサヌカイト製剥片である。S40 は砂岩台石で、磨り面と敲打痕が残る。S41 は砂岩製磨石で、側面に敲打痕や剥離痕が残る。S42 は砂岩製砥石である。S43 は砂岩製砥石である。表裏面に砥面が、側面に敲打痕が残る。S45 は砂岩製敲石である。S46 は砂岩製砥石である。S47 は砂岩製砥石、粗砥である。S48 は砂岩製砥石である。仕上砥である。S49 は砂岩製砥石である。仕上砥である。S51 は砂岩製敲石である。S52 は砂岩製敲石である。S53 は砂岩製台石である。S54、S55 は砂岩製敲石である。

包含層出土遺物

壺 144 は口縁部に 2 個 1 対の円形浮文が伴う。勝浦川流域からの搬入品か。壺 145 は那賀川流域か。甕 146 は吉野川流域からの搬入品か。壺 147 は那賀川流域か。甕 148 は搬入品と推定され、外面に煤が付着する。鉢 149 は内傾する口唇部に櫛描格子文が施される。那賀川流域か。高杯 150 は勝浦川流域もしくは園瀬川流域かの搬入品か。高杯 151 は吉野川流域からの搬入品か。高杯 152 は勝浦川流域からの搬入品か。高杯 153 は那賀川流域産か。皿 155 は回転糸切り底部である。158 は縄文土器深鉢底部である。165 は炉壁である。S60 は砂岩製敲石で鉄錆が付着する。S62 は砂岩製砥石で置粗砥である。S63、S64、S65、S66 はサヌカイト剥片である。S61 は砂岩製置仕上砥である。M43 は方頭釘である。M44 は鉄素材である。M45 ～ M54 は寛永通宝である。M55 は宣徳通宝である。M56 は 5 円である。

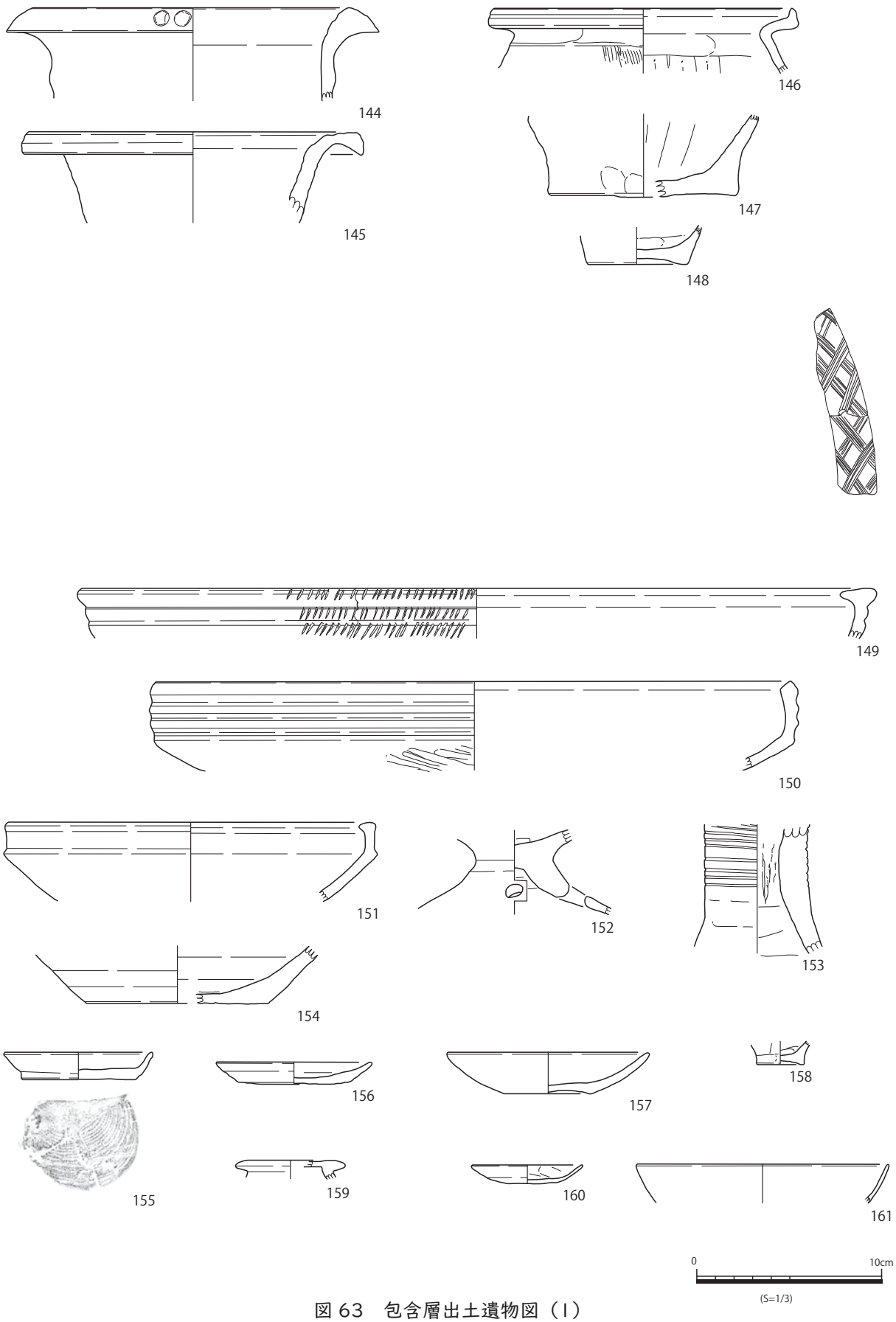
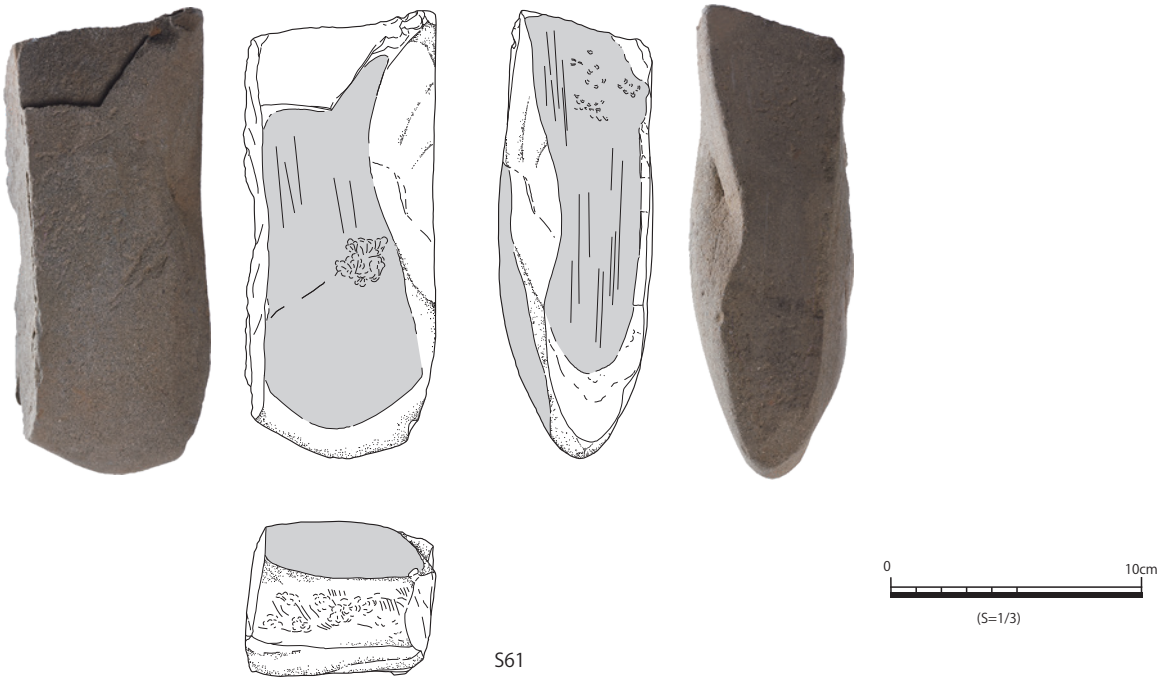
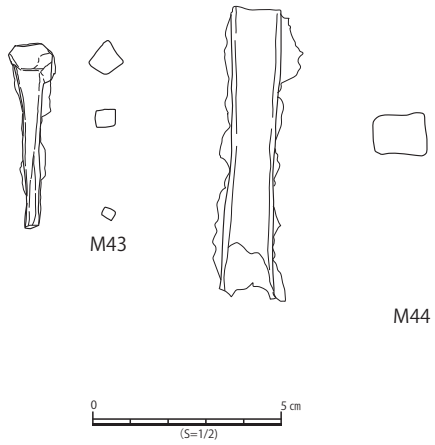


図 63　包含層出土遺物図（1）

図 64　包含層出土遺物図（2）

図 65　包含層出土遺物図（3）





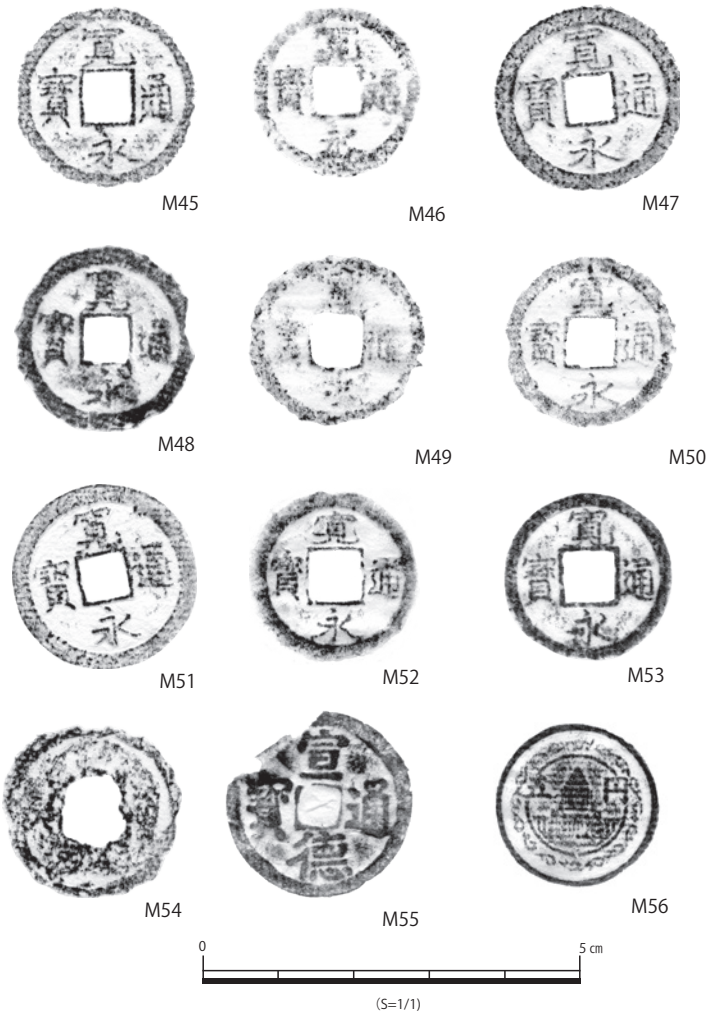


図 66　包含層出土遺物図（4）

第Ⅳ章　まとめ

1　仁宇山城の所在について

今回の発掘調査では、従来より記録に残る和食城跡の土塁や堀の規模・構造の一端を把握することができた。また、併せて実施した測量調査により、和食城跡が北・西・東の三方を堀と土塁で囲んだ東西110 m、南北 120 m程の規模を有した平面不整方形の城跡であることが推定できた。城跡の南縁については現時点では不明であるが、蛭子神社南辺の東西方向の町道がその痕跡と推定される。

阿波九城の仁宇山城跡の所在地について、江戸時代の記録としては、『阿波志』（佐野山陰･文化 12 年）祠廟の項に「蛭子祠　和食村にあり、国初山田三哲（織部）行営となして居る」とあり、藩政初期に蛭子神社が山田氏の陣営とされたと記される。

同時代の『燈下録』（元木蘆洲・文化 9 年（1812））には「和食村恵比寿明神」と題して「往古より恵比寿の祠ありしを別所に移し奉りて城を築かれしが天下一国一城の御定めにて後に破却」とあり、続いて廃城後に山田織部家臣の岡作兵衛の下人に夷神が憑き、これを畏れて神社を元の場所に戻したという『新著聞集』（寛延 2 年（1749））所収の説話が紹介されている。夷神が憑いたかは別として、この説話には、元々あった蛭子神社を移動して仁宇山城を築き、その廃城後に神社を元の場所に戻したという事実が反映されているのではないだろうか。なお、蛭子神社所蔵の正徳 2 年（1712）の棟札には、大檀那山田織部宗明（六代）の名とともに、奉行として岡作兵衛定恒の名が見える。

『新著聞集』の話は江戸時代後期には一般に流布していたとみえ、幕末期の徳島藩御庭方、酒井順蔵の旅行記録『徳島より鶴林寺を経木頭を上り土佐国境を極め海部川を下る日程記』（『阿波国漫遊記』所収）には、旅程中にある「和食」の項で「今日、和食村恵美須社の事聞合候処、新著聞集の説と同しき事」と記され、当時、地元では蛭子神社に仁宇山城があったことが通説となっていたことがわかる。

仁宇山城跡の所在について、『鷲敷町史』（徳島県那賀郡鷲敷町・昭和 56 年（1981））では、和食郷字町にある山田家が所蔵する『山田氏系図』に山田織部（宗重）が「丹生谷及び荒田野で領地を賜り、後には本営を和食において居城した」との旨が記されること、和食郷の蛭子神社や村内の八幡原八幡神社には山田織部寄進の棟札が 15 枚あるのに対し、仁宇城跡の直近の仁宇八幡神社には寄進の棟札が見られないことなどから、山田氏と和食の関係を重視して、山田氏は当初仁宇城に入り、後に和食城に本拠を移したと説く。

こうした記録・記述と今回の調査成果を総合すると、和食城跡を仁宇山城跡に比定することの蓋然性は高いと考える。

（辻　佳伸）

2　まとめ（図 67 ～ 76）

(1)　縄文時代・弥生時代

那賀川南岸河岸段丘縁辺に位置する調査地点の第 2 遺構面からは、弥生時代の遺構や縄文土器片が検出された。西側土塁の覆土中から出土した縄文土器 31 は深鉢頸部直下の体部片である。頸部のくびれ

から明瞭に膨らむ口縁部を有し、頸部直下の粘土帯は薄いが明瞭な爪形文を施している事から、鷹島式もしくは船元Ⅰａ式に含まれる。深瀬遺跡（原 2016）と同時期（久保脇 2021）那賀川流域河岸段丘上の縄文遺跡と位置づけられる。

1 号性格不明遺構（SX2001）は土器廃棄（集積）土坑と位置づけられる。総計 78 点の弥生土器が出土しており、那賀川流域における弥生土器編年を検討する上で良好な資料群である。吉野川流域における編年を参考に年代的位置づけを検討する。分類と編年にあたっては近藤玲の分類・編年案（近藤 2002、2005、2014、原 2005）に従う。

壺

壺①（＝広口壺）：倒卵形体部にほぼ垂直に立ち上がる頸部から大きく拡がる口縁部を有する。

65、67、68、69、71 が該当する。

壺②（＝直口壺）：倒卵形体部にほぼ垂直もしくはやや外側に開きぎみに立ち上がる口頸部を備える。

72、77 が該当する。

壺③（＝広口細頸壺）：倒卵形体部に、体頸部境目の径は壺②より狭く、頸部は直線状に外方へ延びる形状もしくはやや内湾ぎみに口縁部に向かう形状である。

74 が該当する。

壺④（＝細頸壺）：壺②から形式分化したと考えられる器種。

88 が該当する。

壺⑤（＝無頸壺）：球形に近い体部に直立する非常に短い口頸部を有する形式である。小形品が主体。

壺⑥（＝長頸広口壺）：壺①より長めの頸部をもつ一群。頸部長は口縁部径 2/3 程度である。

66、70 が該当する。

壺⑦（＝短頸広口壺）：壺①と壺②を祖形に分化した形式。頸部は無いに等しく、外方へ直線状に広がる口縁部が取り付く型式も見られる。

甕

甕①：倒卵形体部に「く」字状口縁が伴う。口縁端部に 2 ～ 3 条の凹線文を施す場合が多く、口縁端部は上下両方向に拡張する例が見られる。

103、104、105、106、107、109、110、112、113、114、119、120、122、123 が該当する。

甕②：楕円形体部に「く」字状口縁が伴う。凹線文を施さない外反口縁端部は「コ」字状に収める。体部最大径と口縁部最大径あるいは口縁部から体部の屈曲部径との差が、甕①よりも小さい。

111、121 が該当する。

甕③：倒卵形体部に、「く」字状口縁部が接続すると思われるが、体部外面にタタキ技法をそのまま残しハケ技法やミガキ技法を省略する。

鉢

鉢①：椀状の体部。口縁端部最大径が体部、底部よりも大きい。大形品から小形品まで。

124、125、130 が該当する。

鉢②：底部と体部の境界は連続するが、体部から直立もしくは内傾して口縁部へ至る。口頸部に凹線文が数条施されることがある。

127、128、129、131、132 が該当する。

鉢③：脚台付鉢として形式分類可能な一群である。脚台と鉢の組み合わせが最も多いと考えられるが、

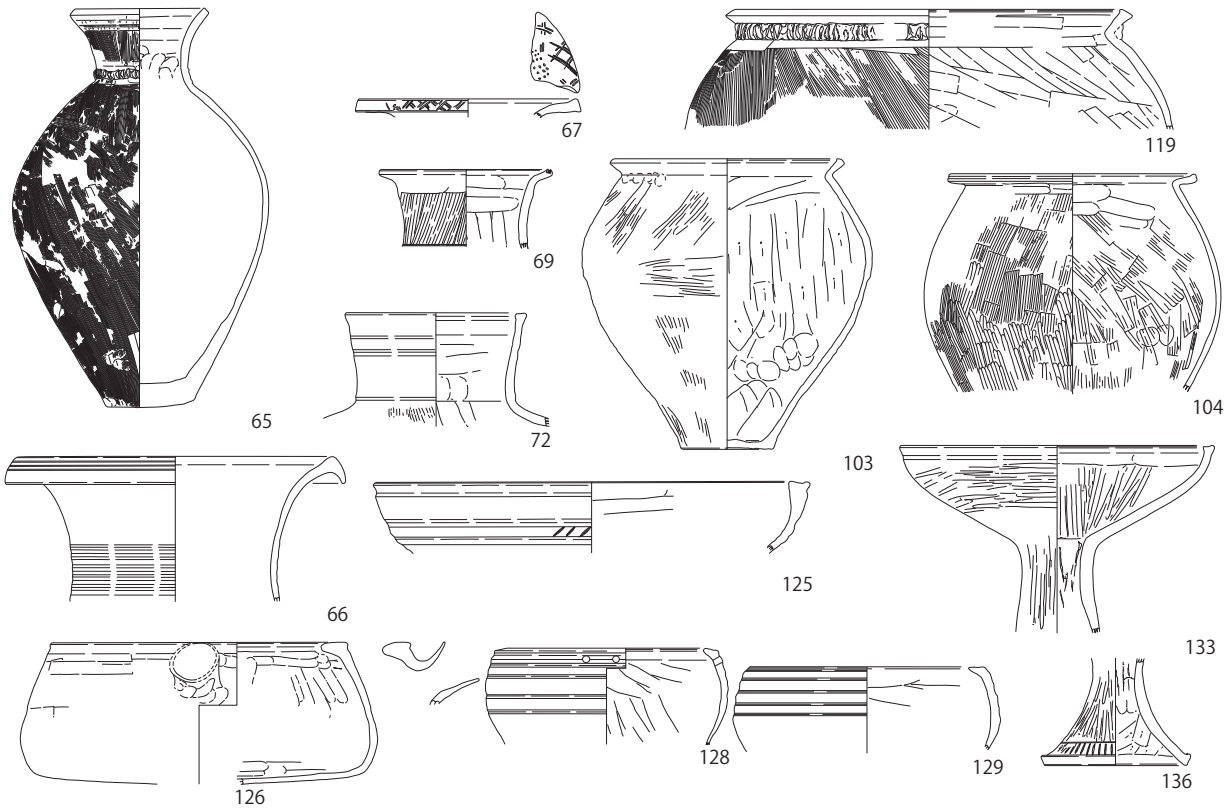


図 67　SX2001 出土土器群（S＝1/8）

時には、壺や甕に脚台が付加される場合も見受けられる。

126、143 が該当する。126 は注口も伴う。

高杯

高杯①：鉢①の形態と同様に杯部形態が椀形を呈する一群である。特大形品から小形品まで存在する。

133、135、139 が該当する。

高杯②：鉢②の形態と同様に杯部形態で口縁部が内傾もしくは直立する一群である。中形品が多い。

136、140、141、142 が該当する。

高杯③：浅い皿状杯部の一群。口縁部形態により細分可能。中形品が多い。

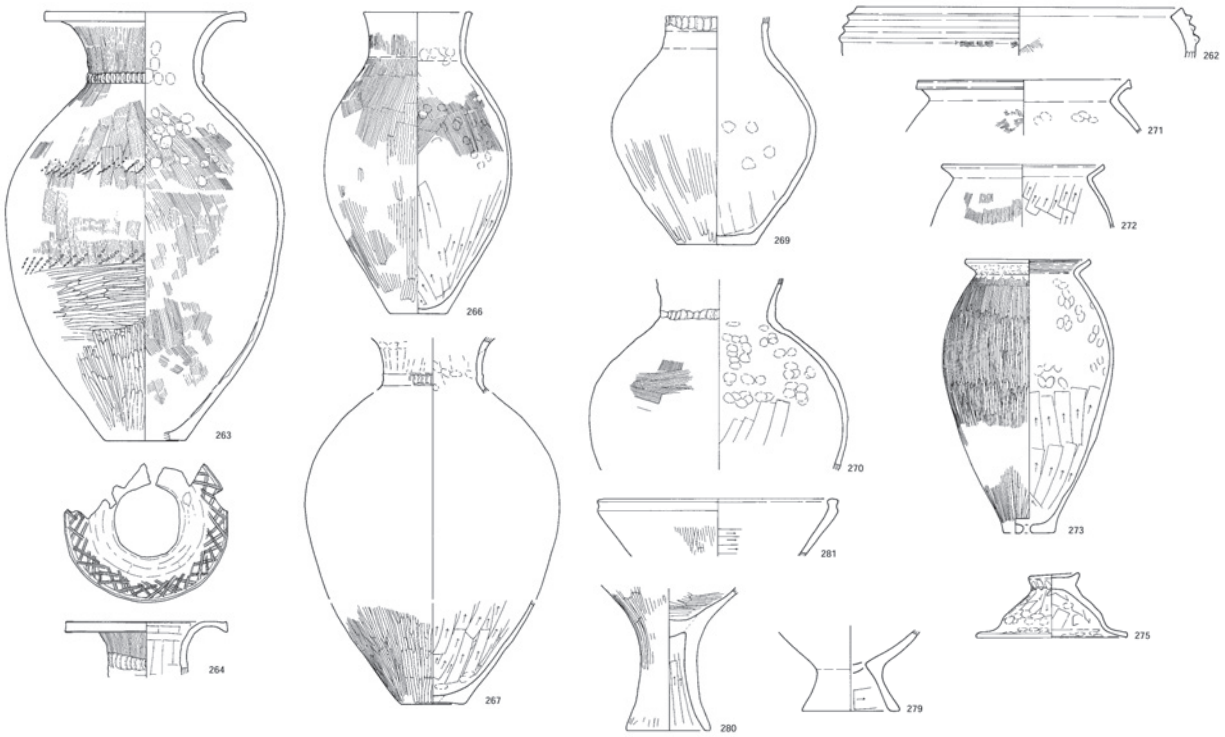
134 が該当する。

各様式の特徴は下記の通りである。

Ⅲ期＝中期中葉：良好な一括資料が少なく、様式設定が不安定な時期である。２小様式程度は細分できると考えられる。器種には、壺、甕、鉢、高杯がある。鉢は出土するものの、その出土量は少なく、包含層で確認され、型式学的にⅢ期に位置づけられると推定される場合が多い。器台に至っては、ほとんど確認されていない。前様式との主な区別は、直口壺や頸部が狭く広口になる広口細頸壺などが出現する。

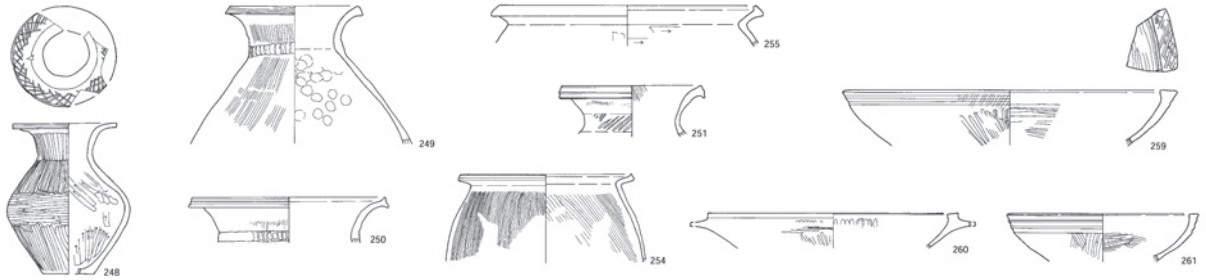
Ⅳ－１期＝中期中葉：凹線文の出現を本様式の開始の重要な指標とする。既存編年の三様式新段階である。前様式に比べ、さらに形式分化が進む。壺、甕、高杯とも口縁部に凹線文を巡らした器種が一定量存在する。ただし、前様式と同様、鉢の出土量は少ない。器台も欠落する。

Ⅳ－２期＝中期後葉：凹線文の盛行が本様式の特徴である。前様式からの形式分化は更に進む。直口壺

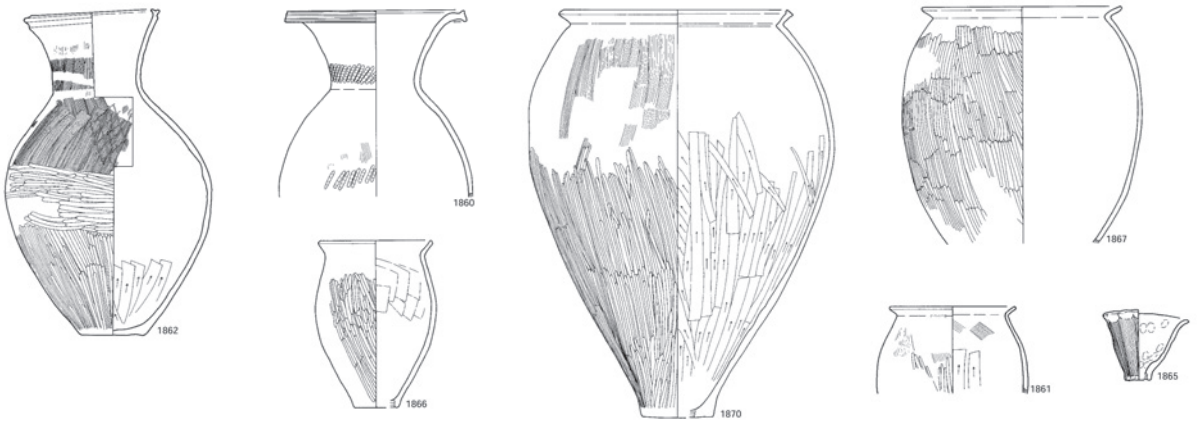


矢野遺跡1群SB2024

図 68　阿波東部Ⅲ段階土器群（S＝1/8）

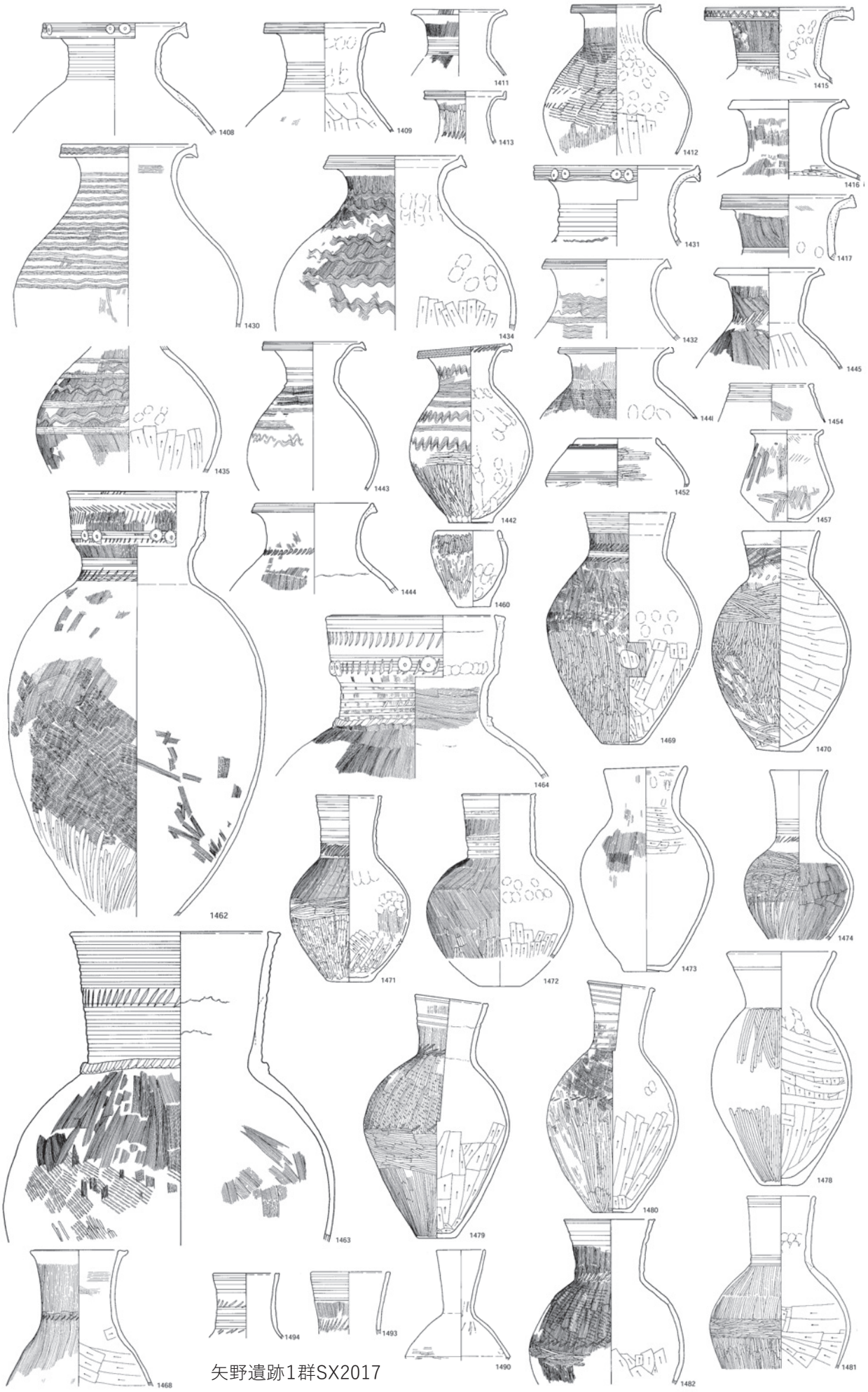


矢野遺跡1群SB2023



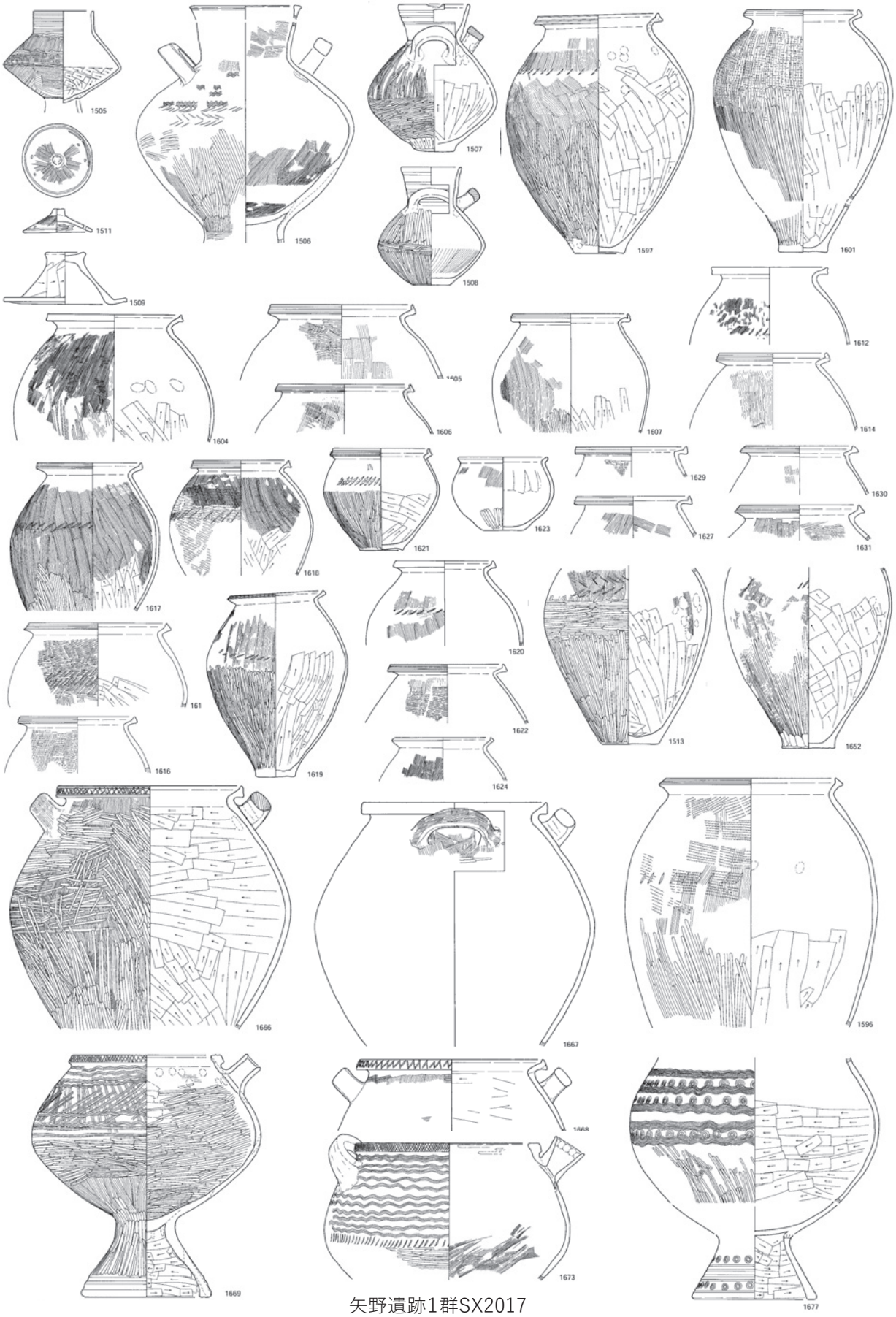
矢野遺跡1群SK2078

図 69　阿波東部Ⅳ－1段階土器群（S＝1/8）



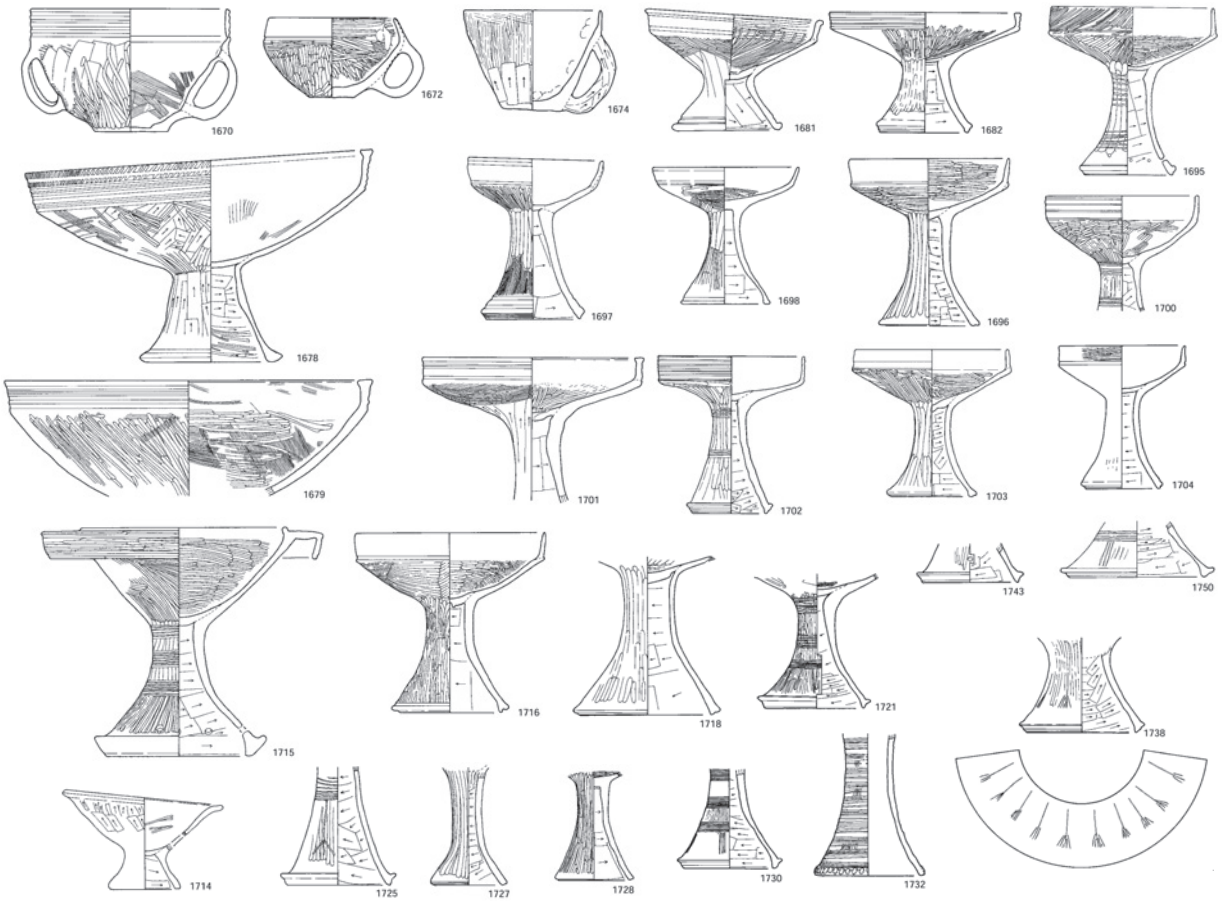
矢野遺跡1群SX2017

図 70　阿波東部Ⅳ－２段階土器群（Ⅰ）



矢野遺跡1群SX2017

図71　阿波東部Ⅳ－２段階土器群（2）（S＝1/8）



矢野遺跡1群SX2017

図 72　阿波東部Ⅳ－２段階土器群（3）（S＝1/8）

から形式分化したと考えられる細頸壺や、甕や鉢に把手の付いた形式が非常に目立つ。高杯も大･中･小形品が見られ、多様な形式を構成している。

Ⅳ－３期＝中期末葉：前様式と器種構成にほとんど差はないが､最終の器面調整の省略化が確認される。前様式では施されていた壺、甕体部上半のハケ・ミガキが省略される。鉢、高杯の無装飾化が進む。

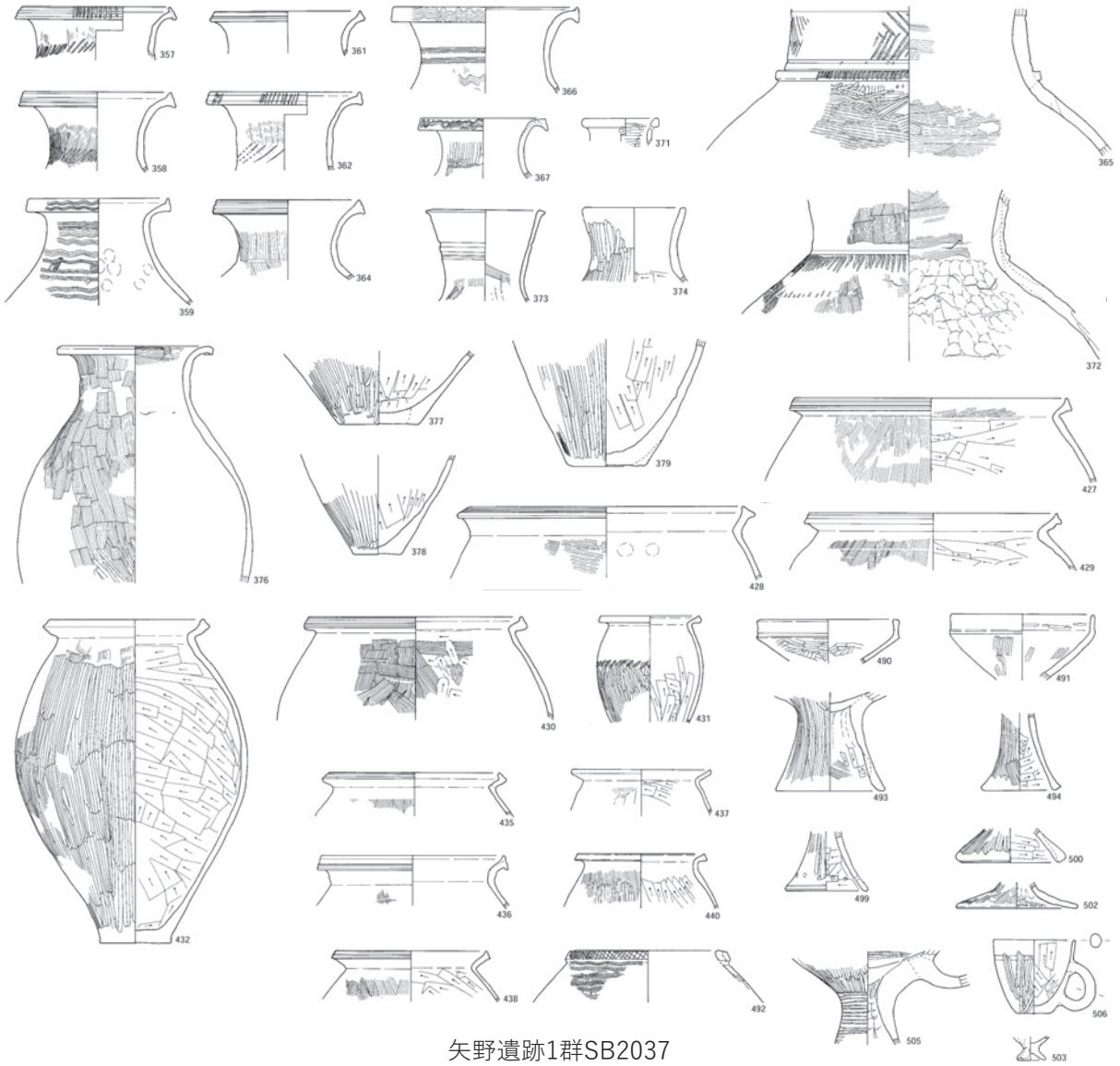
Ⅴ－１期＝後期初頭：無紋化傾向は格段に進む。形式のバリエーションも前様式に比べ、やや減る傾向にある。壺では特大品は消滅する。甕では小形品が一定の割合を占める。凹線文は残るものの凹線状沈線となる。土器製作技法上では、甕の体部内面上半にケズリが施される。高杯柱状部内面に縦方向ケズリもしくは絞り痕のみとなる。

65（壺①)、103（甕①）等を重視するならば、1 号性格不明遺構（SX2001）出土土器群は、阿波東部Ⅳ－３段階と位置づけることができる。ただし、壺 67 は壺②の口縁部のみであるが、ヘラ描き斜格子文と刺突文が施されている。注口付鉢 126 は脚台付の可能性がある。高坏 133 は高坏①であるが、口唇部が内傾する。鉢 132 の口縁部にはミガキ調整が施される。これらの属性はⅣ－２段階の様相も認められる。

今後、那賀川流域における当該期の弥生土器と併せて検討することで、徳島県南部の弥生土器編年を構築する際の良好な資料群となる。

矢野遺跡1群SB2022

図 73　阿波東部Ⅳ－３段階土器群（1）（S＝1/8）

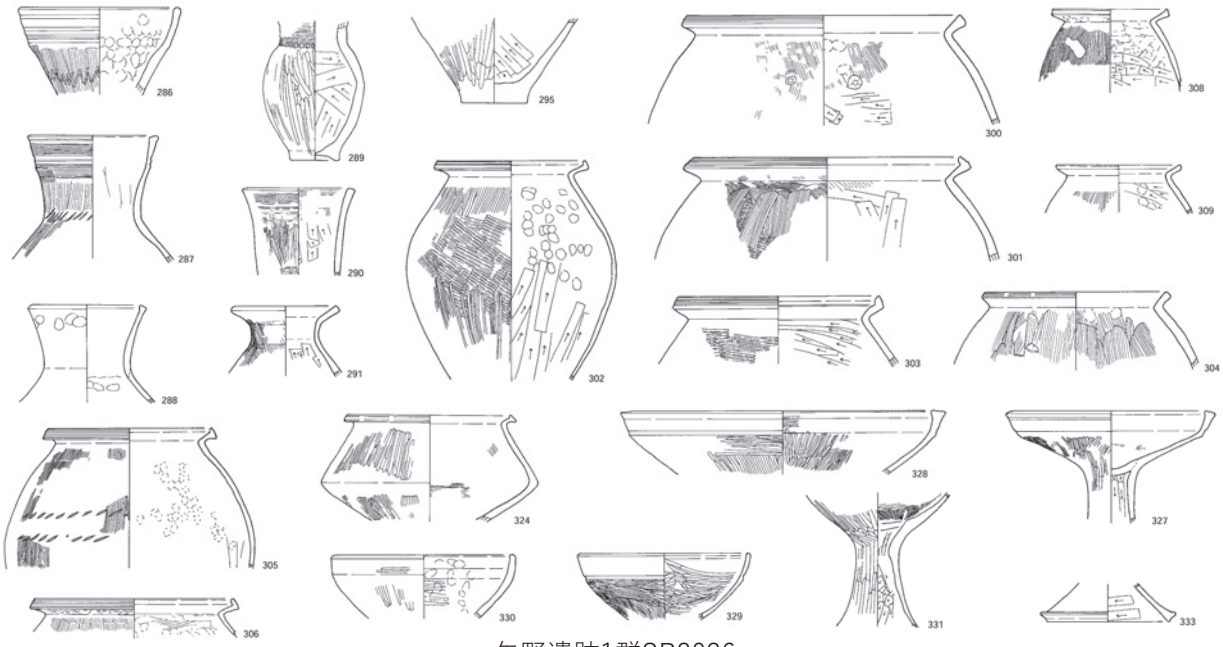


矢野遺跡1群SB2037

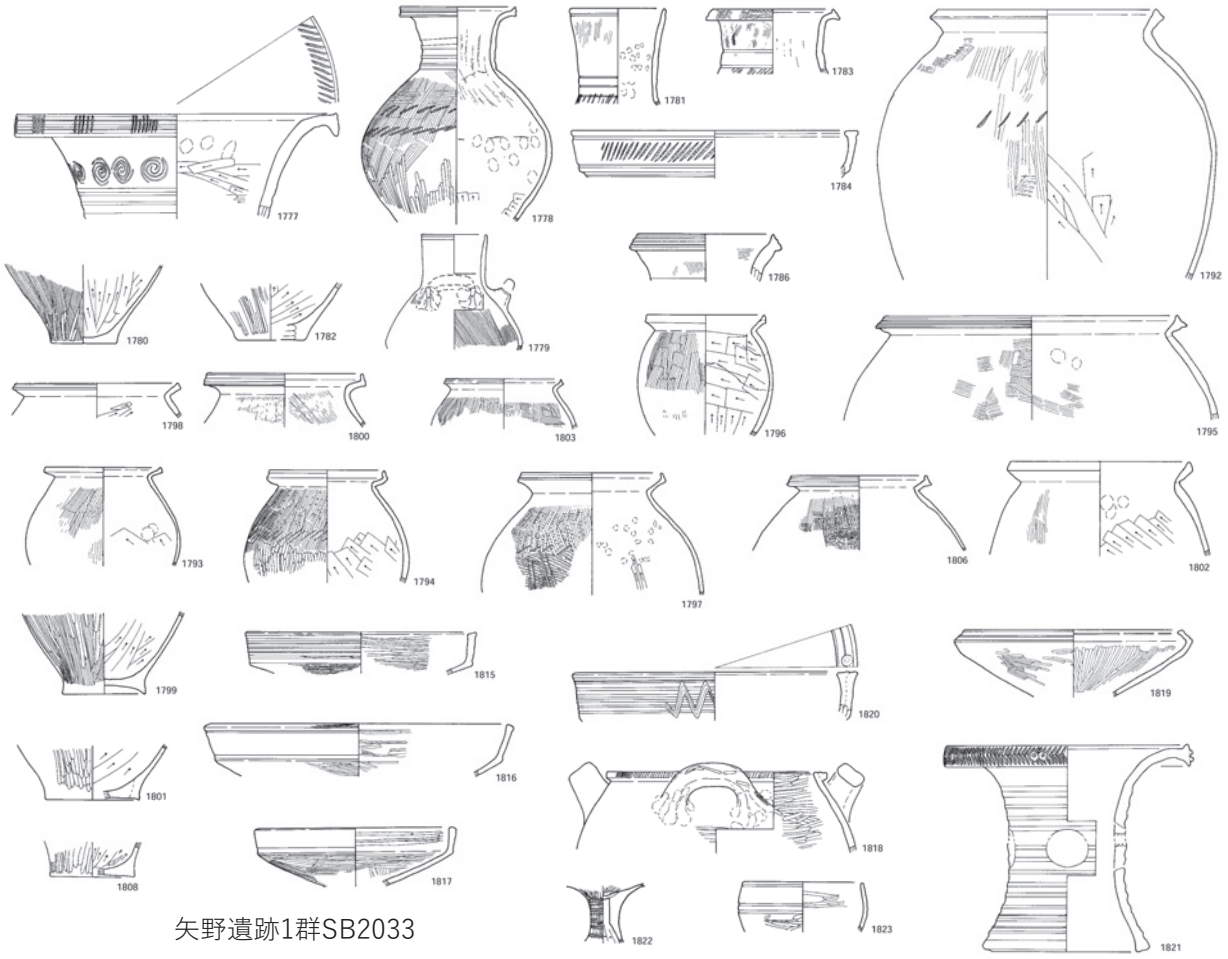
図 74　阿波東部Ⅳ－３段階土器群（2）（S＝1/8）

出土した土器胎土を肉眼観察のみであるが、那賀川流域、鮎喰川・吉野川下流域、園瀬川流域、勝浦川流域、に大別することができる。判断基準の特徴的な含有物は三波川帯にて産出される結晶片岩粒である。那賀川水系には結晶片岩の岩脈は無く転石として出土する場合も搬入石材である事と、近世期に火打ち石地として使用されるチャートが産出される秩父帯南帯に位置することから、結晶片岩粒を含まず、赤色チャート類を含む一群を那賀川流域とした。鮎喰川・吉野川流域は結晶片岩粒を含む一群で、後期～庄内式段階の所謂“東阿波形土器”に類似する胎土である。園瀬川流域は、徳島市眉山南麓より産出される珪質片岩や泥質片岩を含む一群である。勝浦川流域は、日の峰山地や三つ時山から産出される珪質結晶片岩と凝灰岩やチャートが混じる一群である。香川は角閃石や金雲母や花崗岩を含む一群である。この大別は肉眼観察によるものであり、蛍光Ｘ線分析や胎土薄片作成鑑定等の分析結果では変わるものである。

壺 29 点：那賀川流域 7 点（24.1%）、勝浦川流域 13 点（44.8%）、園瀬川流域 3 点（10.3%）、鮎喰川



矢野遺跡1群SB2026



矢野遺跡1群SB2033

図 75　阿波東部Ⅴ－Ⅰ段階土器群（S＝1/8）

地域 / 暦年代 AD	旧勝浦・那賀郡	旧名東郡	旧名西郡	旧板野・阿波郡	旧美馬郡	旧三好郡
1000	大谷	矢野（Ⅲ） SP1332 観音寺(Ⅲ) SP1079	清成(建物群①) SA1011,SA1014, SA1019,SA1020, SA1023	古町 第３遺構面SD群		大柿Ⅲ カワラケメン地区 松吉地区
	宮ノ本Ⅱ 第3期	敷地(Ⅱ)1998年3区 SK1050	清成 SK1170	大松(東) SU1001	拝東(0-2) SO1001 鶴射	大柿Ⅲ カワラケメン地区 松吉地区
1100	立江馬渕 SA1003	広田	清成(建物群②) SA1013,SA1015, SA1016,SA1017	古城(C) SK1026,SK2001, SK2004,SD1002	拝東(1-1) 掘立柱建物群	大柿Ⅲ カワラケメン地区
	渋野 宮ノ本Ⅱ 第4期古 深瀬 SK1009	川西第1段階	清成(建物群③) SA1005,SA1009, SA1010,SA1012. SA1018,SA1021, SA1022	大松(西)H区 貝塚3 古城(C) SK1057,SK1065	拝東(1-2, 2) 掘立柱建物群 薬師 柴坂地区	円通寺0期 相知(3,6) 屋敷地1,2
1200	深瀬 SD1002,SD1007, SP1089 トノ町 SA1003,SD1010	敷地(Ⅱ) SK3012,SP2031 川西第2段階 寺山６区 第２遺構面 名東・南庄 SA,SD群		大松(西)H区 SX1001,SK1013, G区SK1011 5区SK1026,SK2059 古城(C) SD1001,SP1073 日吉谷 浄土寺 SA群 山の下東	拝東(3-1,3-2) 掘立柱建物群 田上（Ⅱ） 原（Ⅱ）	大柿Ⅲ 馬のシャクリ地区１ 井出上 SA群
	宮ノ本Ⅱ 第4期新 深瀬 SK1012,SP1063, SP1073,SP1119, SP1231,SP1248, SP1297	敷地(Ⅱ) 2001年土壙墓群, 1998年2区SE1001 中島田 SK238,溝206 川西第3段階 寺山 SD,SK群	清成 SD1023,SD1035, SX1011	大松(西) D区 SX1011,SD1004 前田 神宮寺 黒谷川宮ノ前 １号屋敷地 古町 第２遺構面SA,SK群	拝東(3-1,3-2) 掘立柱建物群	中庄東 西側屋敷地
1300	深瀬 SP1005 トノ町	川西第3段階 中島田（Ⅱ） 寺山 SC1001,SX群		古城		山田（Ⅱ）
	小仁宇城跡 SK1066	川西第4段階 田宮A区 第２遺構面		古町 第１遺構面SD群	荒川	
1400	小仁宇城跡 SD1001	川西第4段階			薬師 薬師地区	
	トノ町			上喜来～蛭子中佐古 SA群,鋳造関連,中世墓 日吉～金清		西原 SA,SK群
1500		名東・南庄 SA1017,1018 田宮A区 第１遺構面				

図 76　阿波中世期の遺跡

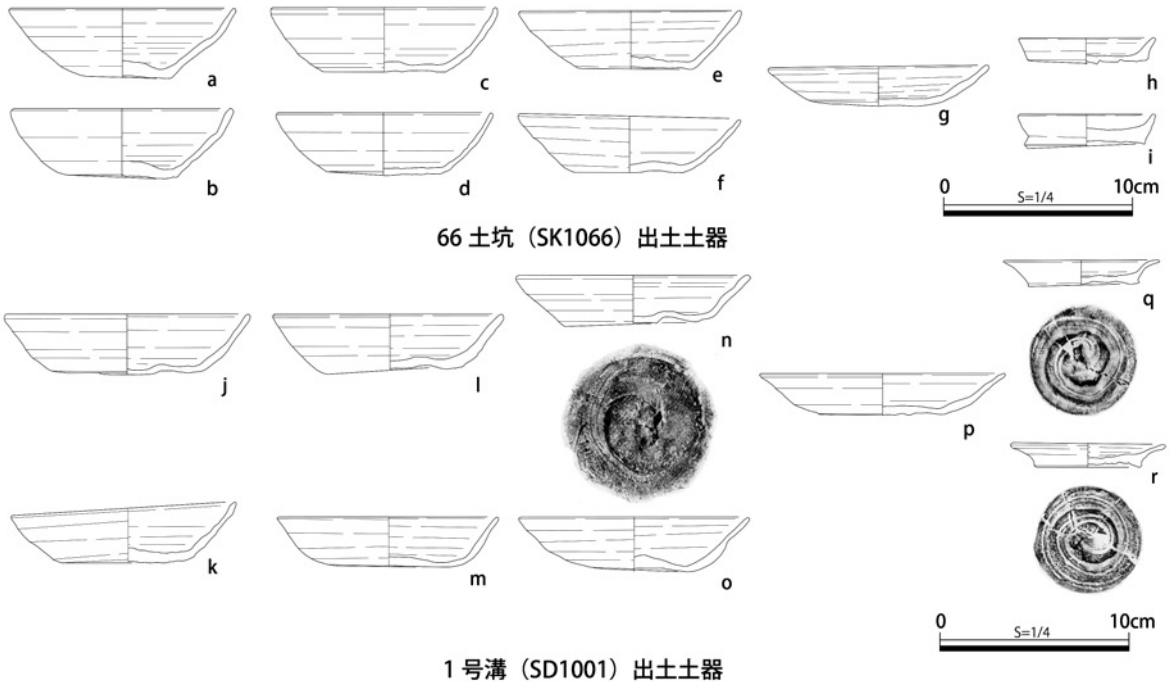


図 77　小仁宇城跡主要土器群

流域 1 点（3.4%）、吉野川流域 3 点（10.3%）、不明 2 点（6.8%）。

甕 33 点：那賀川流域 9 点（27.3%）、勝浦川流域 12 点（36.4%）、園瀬川流域 4 点（13.2%）、鮎喰川流域 5 点（15.2%）、吉野川流域 0 点（0%）、香川 1 点（3%）、不明 2 点（6%）

高杯 9 点：那賀川流域 1 点（11.1%）、勝浦川流域 7 点（77.7%）、鮎喰川流域 1 点（11.1%）

鉢類 7 点：那賀川流域 4 点（57.1%）、勝浦川流域 1 点（14.3%）、園瀬川流域 1 点（14.3%）、鮎喰川流域 1 点（14.3%）。

総計 78 点中、那賀川流域 21 点（26.6%）、勝浦川流域 33 点（41.7%）、園瀬川流域 8 点（10.1%）、鮎喰川流域 8 点（10.1%）、吉野川流域 3 点（3.8%）、香川 1 点（0.1%）、不明 4 点（5.1%）となる。那賀川流域産と推定される一群は 26.6%と、土器胎土中では主体とならず勝浦川流域からの搬入品と推定される一群が多い事は当遺跡の性格を考える上で重要である。当該期の拠点集落が展開する吉野川下流域から搬入される一群が 24%となり一定の通行が存在したことが伺える。また、香東川流域では無いが香川から搬入されたと推定される角閃石や金雲母を含む甕が出土した事は、那賀川流域、特に辰砂鉱石採掘地周辺としての地域的特性が反映されたと推定される。

(2) 中世

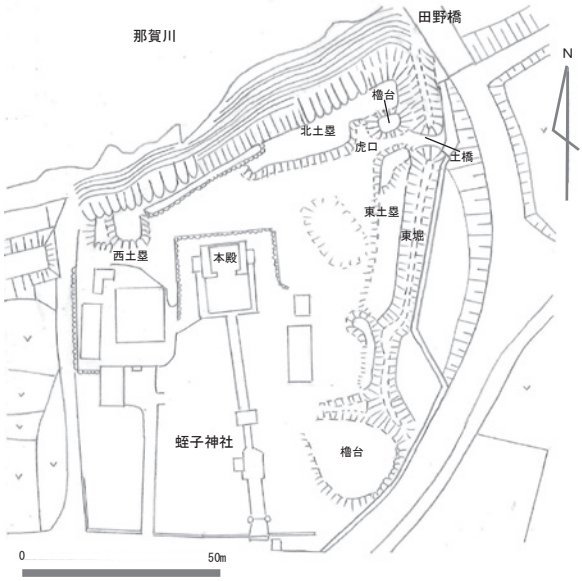
今回の発掘調査地点は「和食城跡」比定地北端となり、土塁や堀と虎口や櫓台と推定される遺構が確認された。和食城は『城跡記』(『阿波国徴古雑抄』) に天正 10 年（1582）8 月 8 日落城の記載がある。しかし、その構築時期や使用状況や廃絶時期を反映する遺構・遺物は少なく、“和食城”もしくは“仁宇山城”としての機能は不明瞭である。

また、土塁等に先行する中世の遺構密度は低く集落関連遺構や屋敷地としての様相は不明であることから、今回の調査地点成果のみで所謂“和食城”としての評価は困難である。そこで、周辺の中世遺跡

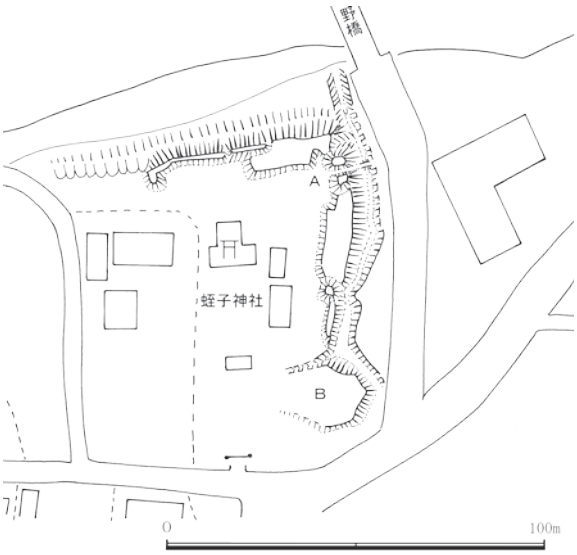
や土塁と堀を伴う城館遺跡と比較する事により位置づけを検討する。

和食城跡の西側に隣接する小仁宇字船津の上 1432 に所在する小仁宇城跡（368-7）は、『阿波志』には永禄年間（1558 ～ 1570）に藤原正廣が拠った「小仁宇塁」が所在したと記載され、『鷲敷町史』には由来不明であるが城本寺川を“城の谷”、小仁宇城跡調査地点を“城（ジョウ）”という地名で呼び習わす記述から「小仁宇城跡」に比定されてきた。しかし発掘調査の結果、14 世紀末～ 15 世紀代に属する方形区画溝が伴う屋敷地である事が確認された。

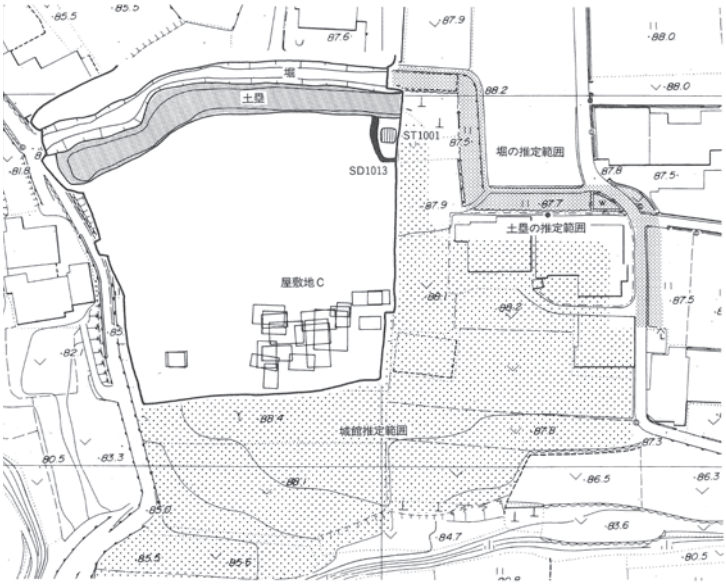
中世後半期に属し土塁が伴う城館のうち、発掘調査が行われたのは円通寺遺跡や重清城跡が挙げられる。



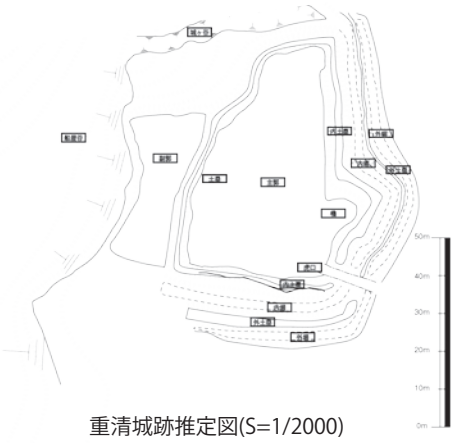
和食城跡縄張図（S=1/2000)(辻2021)



和食城跡縄張図（S=1/2000)(杉原2017)



円通寺遺跡Ⅲ期城館推定範囲（S=1/2000)



重清城跡推定図(S=1/2000)

図 78　円通寺遺跡・重清城跡との比較

三好郡東みよし町円通寺遺跡では、13 世紀前半（円通寺Ⅰ期）に小規模な開発集落が展開し、13 世紀後半～ 14 世紀前半（円通寺Ⅱ期古段階）に溝により区画された東西 42 ～ 52m ×南北 50m、面積約 2,300 ㎡の中心的機能の屋敷地 A と約 900 ㎡の補助的機能の屋敷地 B で構成される屋敷地が成立する。14 世紀後半（円通寺Ⅱ期新段階）には屋敷地 A 北東隅に火葬墓が造営される。15 世紀前半～後葉（円通寺Ⅲ期古段階）になるとそれまで中心的な機能を有した屋敷地 A が廃絶し南側に新たな屋敷地 C が成立する一方で、屋敷地 A が展開した場所は空閑地・耕作地に転用される。15 世紀末葉～ 16 世紀初頭（円通寺Ⅲ期新段階）には屋敷地 C の北側に土塁と堀が構築され城館としての体裁が整う。土塁は基底部幅 8 ～ 10m、上部幅 3 ～ 6m、残存高 1.2m を測り、掘削排土を内側から連続して盛り上げ・整形により構築しているが、丁寧な版築等は伴わず急拵えで、その存続期間は短期間のうちに廃絶したと推定される。屋敷地は三野田保の在地領主の屋敷地と、城館は吉野川に設置された河関を通して吉野川水運の掌握を意図した居住者とした（辻 2000）。円通寺遺跡では、河岸段丘の開発集落から屋敷地の成立と城館化及び廃絶の過程が伺える。

美馬市重清城跡は、2 重の堀と土塁で区画された主郭と副郭で構成される。主郭は東西 44m ×南北 60m を測り、主郭面積は 2,254 ㎡である。築城時期は不明であるが、承久の乱以降は阿波守護の小笠原氏の居城とされ、『城跡記』には天正 10 年（1582）の落城が伝わる。堀跡内覆土からは、回転台整形の土師質土器杯、土師質土器煮沸具、陶器擂鉢、青磁碗、瀬戸焼瓶、唐津焼皿など 14 世紀～ 15 世

図 79　和食城跡縄張推定

紀に属する遺物が出土している。その内、堀上層出土の近世期に属する一群を落城時期から埋没までの期間に対応するとする。そして「合戦が行われたと伝えられる時期とも概ね合致するものである。」（藤川 2006）とし、城郭としての機能を重視する位置づけである。

改めて和食城跡の状況を整理する。和食城跡の推定規模は、平面形態は不整方形を呈する東西 110m、南北 120m、面積 1,300 ㎡と、円通寺遺跡や重清城跡の約 1/2 程度である。土塁規模は、櫓台付近では基底部幅約 6m、上端幅約 3m、高さ 2.8m と円通寺遺跡の約 2/3 程度である。北東隅に虎口と櫓台を有し、櫓台構築後に北土塁を築造しているが、北辺すべてに北土塁が巡るのではなく櫓台から約 54m に限定される。西側には堀が伴う土塁が敷設されたと推定されるが、堀の掘削のみで北端部に櫓台のみが敷設された可能性がある。東側は堀と土塁が築かれ、南東隅には櫓台状の遺構が敷設される。東堀は段丘崖を整形しただけの可能性もある。南辺は不明で堀が敷設された可能性もあるが、南側の菊川に面した段丘崖であった可能性が高い。

以上のことから、所謂近代以前の軍事的防御施設としての「城郭」的性格が弱い点は美馬市重清城跡とは異なる。

しかし地理的環境の観点を加味すると円通寺遺跡との比較が可能となる。和食城跡は、那賀川南岸の中山川や菊川が那賀川に合流する地点の河岸段丘上の東端に位置する。北側土塁の北側は若干の平坦地が拡がるが、段丘崖となり那賀川川原である。一方、東側土塁及び東堀の東側現況は二の丸や八幡原地

図 80　鷲敷の中世城館と川湊

区や北地一区の扇状地扇端部であり、那賀川の蛇行による氾濫原である。中山川・菊川・尻無川の堆積作用によっては、中世段階の当該地は那賀川沿いの静水であり、和食城北側には那賀川本流が東流し、南側は菊川旧河道に面し、東側には入江状の静水が拡がっていたと推定される。

和食城が所在する那賀郡那賀町鷲敷一帯は、国衙領を前身とする京都長講堂領の那賀山庄であった[1]。暦応3年（1340）に足利尊氏により暦応寺（京都天龍寺）に造営料所として寄進され、以降同寺の支配を受けた。那賀川河口には那賀山庄に属する平島郷内に含まれていた平島湊が開かれた。兵庫北関にはこの平島湊より20回にわたって木材1095石、榑735石が搬出されている[2]。平島湊を船籍地とする船のなかには、天龍寺への貢納物であった木材や榑を運送した過書船が含まれていた[3]。これら貢納物の木材は那賀川中上流域で伐採され、那賀山庄から搬出されたものと推定される。なお、那賀山庄内の賀茂和食郷は、永徳2年（1382）に足利義満により山城興聖寺（後の宝幢寺）に寄進されている[4]。一方、15世紀には那賀山庄からの材木切り流しに対して守護方の横領が行われたり、諸役免除や守護使入部停止が命じられている[6]。また、15世紀後半には天竜寺と領家五辻家間で年貢を巡っての争論がおこり、延徳2年（1490）後土御門天皇により領家五辻家の直接支配を命じられ、那賀山庄において天竜寺の支配が後退する[7]。

近世期においても和食は高瀬舟を用いた河川交通の川湊（田野・舟津）であった[8]。周辺にはカズラキリ・田野瀬・仁宇の瀬などの難所があることや、蜂須賀藩伝馬の傳馬所であり仁宇谷往還や仁宇往還等の陸路の要衝であったことからも川湊としての機能が重視されていた。

河岸段丘縁辺には、土塁盛土中より11世紀後半～12世紀前半の土師質土器羽釜10が出土するなど古代末～中世前半の集落もしくは遺構群が展開したと推定される。その後、14世紀末～15世紀前半の小仁宇城跡では方形区画を伴う屋敷地が成立する段階において、鍛冶操業も行う集落が展開したと推定される。しかし、調査対象地点においては区画溝等は未検出であり、規模実態の詳細は不明である。

15世紀末～16世紀初頭の吉野川流域では在地領主の居館には土塁が築かれる。那賀川流域においては守護方の横領や支配層の後退が伺える状況下であった。当該期の和食城跡では、川湊とその関連施設が展開したと推定される。東側の氾濫原地区が川湊として機能する一方で、和食城跡そのものは吉野川流域の城館に比べて規模が小さい事、北土塁が北西側で一旦途切れて那賀川に向かって開かれる事は那賀川への直接的アプローチが容易となる事、北東隅の虎口は東側の清水域へのアプローチが容易となる事、北東隅に位置する櫓台は那賀川下流からのアテとなると同時に、那賀川本流と阿瀬比峠方面を可視領域とすることができる。和食城跡の城館関連施設は、那賀川を利用した河川流通拠点を吉野川流域同様に区画・防御性の明瞭化や強化が行われた結果と位置づけることができる。

和食城跡は、有力首長層の居館や防御施設としての機能よりも川湊の運営に関わる施設が展開したと位置づけることが可能であり、那賀川を通じた流通の様相を反映した遺跡である。

註

(1)　山下知之「中世阿波国における広域所領の展開」（『阿波・歴史と民衆Ⅱ』徳島地方史研究会、1990年）。
(2)　燈心文庫林屋辰三郎編『兵庫北関入舩納帳』中央公論美術出版、1981年。
(3)　同前。

(4)　　足利義満御内書

「鹿苑院殿」

興聖寺事、為開山可有御沙汰候、将又播磨国安田庄寺家分・山城国乙訓郡大覚寺・阿波国那賀山庄賀茂・和食郷井関等任御寄進可為同寺領候、恐惶敬白、

十一月廿日　義満（花押）

春屋和尚禅室

年不詳（康暦元年か）11 月 24 日「足利義満御内書」鹿王院文書 182 号（鹿王院文書研究会編『鹿王院文書の研究』思文閣出版、2000 年）。

(5)　　天龍寺領阿波国那賀山庄雑掌申状案

天龍寺御領那賀山雑掌申

欲令早被止山河半分幷切流等桂林寺等与守護方押領於寺家一円知行状、

右当主、相国寺借知行之時、彩副寺為代官、桂林寺初而為興行、自那賀山出材木、号山河半分土貢定之山中用木、令略出之、木口即切置三文字、号彼等之割、干令被押領、殊而今度洪水出木材等、守護方相共被註之、結局干致根本之木口印木被押領之段、無請次第也、当庄之事者、加様之材木切流所務候於、如今者寺家御公平及失墜者也、既那賀山被御帰覆上者、彼被停止競望、自今已後山河幷切流杉檜等悉可為寺家一円被成御下知、欲令全永代知行状如件、

応永三十年六月　日

応永 30 年 6 月日「天龍寺領阿波国那賀山雑掌申状案」天龍寺文書 402 号（原田正俊編『天龍寺文書の研究』思文閣出版、2011 年）。

(6)　　室町幕府管領細川勝元施行状案

一天龍寺領阿波国吉井・平嶋・那賀山等段銭・人夫・臨時課役・守護役事、悉被免除畢、草任去八月廿三日下知状之旨、可被停止守護使入部之由、所被仰下也、仍執達如件、

文安四年十二月二十四日　　右京大夫判

細河讃岐守殿

文安 4 年 12 月 24 日「室町幕府管領細川勝元施行状案」天龍寺文書 457 号（同前）。

(7)　　那賀山庄本役文書

阿波国那賀山庄本役事、天龍寺被官等背永和請文、動依言難澁、去應仁度如元被返付候、猶以及異議候間、今度為武家被経其沙汰、可為一円直務之由、下知之旨被聞食畢、弥領掌不可有相違、者、天気如此、仍執達如件、

延徳二年十二月三日　　左将辨判

謹上　阿波守護

延徳 2 年 12 月 3 日「後土御門天皇綸旨案」（小杉榲邨編『阿波国徴古雑抄』臨川書店（復刻版）、1974 年）。

(8)　小原　亨　1996「阿波の川－水運と林業に生きた人たち－」徳島県教育印刷株式会社

参考文献

久保脇美朗　2021「 徳島県深瀬遺跡出土の縄文時代早期から前期初頭にかけての土器について 」『青藍』第 13 号　考古フォーラム蔵本

近藤　玲　2002・2003『矢野遺跡（Ⅰ）－一般国道 192 号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 33 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

近藤　玲　2005『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 28 大谷尻遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

近藤　玲　2014『南蔵本遺跡 －県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集　公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター

辻　佳伸　2000『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 15 円通寺遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

原　芳伸　2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 33 試掘調査総括・中谷山古墳群（Ⅰ）他』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 62 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

原　芳伸　2008『寺山遺跡－広域基幹河川改修（園瀬川）事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

原　芳伸　2016『深瀬遺跡 －那賀川河川改修事業（深瀬堤防）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集　公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター

藤川智之　2006『指定史跡等保存活用事業埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 尼塚古墳・カニ塚古墳他』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 66 集　財団法人徳島県埋蔵文化財センター　『兵庫北関入船納帳』（『兵庫県史　中世　史料編』所収）

松岡久人編　1995『南北朝遺文（中国四国編）』第 1 巻～第 6 巻、東京堂出版

小杉榲邨編　1913『阿波国徴古雑抄』日本歴史地理学会（復刻版、臨川書店、1974 年）

徳島県教育委員会　2011『徳島県の中世城館　徳島県中世城館総合調査報告書』

<iframe frameborder="0" scrolling="no" marginheight="0" marginwidth="0" width="500" height="400" src="http://maps.gsi.go.jp/?hc=hic#15/33.854148/134.501324/&base=blank&ls=blank%7Cslopemap&blend=1&disp=11&vs=c0j0h-0k0l0u0t0z0r0s0m0f0” ></iframe>

表１　土器観察表

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
3	虎口	磁器	碗	底 4.2		精	堅		釉：18B8.5/0 あかるいグレー 胎土：N8/0 灰白	体外：回転整形→絵付→施釉 内：回転整形→施釉	肥前系
4	虎口	磁器	碗	高 4.15 口 7.8 底 3.2		精	堅		釉：18B8.5/0 あかるいグレー 胎土：N8/0 灰白	体外：回転整形→絵付→施釉 内：回転整形→施釉	肥前系
5	虎口	磁器	皿	口 10.1		精	堅		外：10YG7.5/1s 黄みのグレー 内：2.5Y8/1 灰白	体外：回転整形→絵付→施釉 内：回転整形→施釉	肥前系
10	北側土塁	土師器	羽釜	口（16.6）	0.1 ～ 2.0	粗	やや良	石・長・雲・赤・砂・花	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：2.5Y6/3 にぶい黄	口外：回転ナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ　内：イタナデ	搬入品
11	北側土塁	土師器	皿	高 1.3 口 5.9	0.1 ～ 0.5	やや精	並	長・チ・雲	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビオサエ　内：ユビナデ	在地か？
12	北側土塁	土師器	皿	高 1.1 口（1.2） 底（3.4）	0.1 ～ 1.0	やや精	やや良	石・長・雲・金雲	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	
13	北側土塁	瓦		幅（9.9） 厚（6.4）		やや精	良	雲	外：N4/0 灰 胎土：N7/0 灰白	体外：ヘラケズリ＋ユビオサエ	
20	北側土塁	土師器	杯	高 2.9 口（12.8） 底（9.0）	0.1 ～ 5.0	やや粗	やや不	石・長・赤	外：7.5YR8/4 浅黄橙 内：7.5YR8/4 浅黄橙	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ 底外：回転ヘラ切り　内：回転ナデ	
21	北側土塁	土師器	高台付椀	底 5.5	0.1 ～ 3.0	やや精	並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5 Y 5/2 灰オリーブ 内：10YR6/6 明黄褐	底外：貼付高台→回転ナデ 内：回転ナデ	
22	北側土塁	弥生土器	壺	底（7.3）	0.1 ～ 4.0	やや精	やや良	結・石・長・赤・黒	外：10R3/3 暗赤褐 内：7.5R3/1 暗赤灰	体外：ハケ（12 条 /2 ㎝） 内：ユビナデ＋ヘラケズリ 底外：ユビナデ→ハケ（12 条 /2 ㎝） 内：ユビナデ	鮎喰川流域からの搬入品。焼成時破裂痕あり。
26	北側土塁	須恵器	壺	頸（44.2）	0.1 ～ 0.5	やや粗	良	石・長	外：7.5Y5/1 灰 内：7.5Y5/1 灰	体外：回転ナデ　内：青海波文	
27	北側土塁	弥生土器	甕	口（14.5） 頸（13.8）	0.1 ～ 4.5	やや精	やや不	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R4/6 赤 内：2.5YR5/8 明赤褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ハケ（11 条 /1 ㎝） 内：ヘラケズリ	園瀬川流域からの搬入品か？
28	北側土塁	弥生土器	高杯	底（9.5）	0.1 ～ 1.0	やや精	やや不	長・チ・雲・赤	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/6 橙	底外：ユビナデ　内：ヘラケズリ	
29	北側土塁	土師器	皿	高 1.4 口 6.7	0.1 ～ 3.0	やや精	やや良	長	外：5YR6/8 橙 内：5YR6/8 橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	在地産か？
30	西側土塁	土師器	焙烙	口（35.0）	0.1 ～ 2.0	やや精	並	長・黒	外：2.5Y5/2 暗灰黄 内：2.5Y5/3 黄褐	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ	外面煤付着。
31	西側土塁	縄文土器	深鉢	頸（14.4）	0.1 ～ 4.0	やや粗	やや良	石・長・雲・砂	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR6/4 にぶい黄橙	体外：凸帯貼付→爪で押さえる 内：ナデ	那賀川流域産か？
35		弥生土器	甕	底（4.0）	0.1 ～ 6.0	やや粗	不良	結・石・長・チ・赤	外：10YR8/4 浅黄橙 内：10YR8/3 浅黄橙	体外：タタキ　内：ヘラナデ 底外：ユビオサエ　内：ヘラナデ	
36		弥生土器	壺	-	0.1 ～ 0.5	やや精	やや良	結・石・雲・赤	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR7/4 にぶい橙	体外：回転ナデ→ヘラナデ 内：回転ナデ（摩滅）	吉野川流域からの搬入品。
37		弥生土器	甕	頸（27.8）	0.1 ～ 4.0	やや粗	並	結・石・長・雲	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	体外：ハケ（6 条 /1 ㎝）→上部ヨコナデ 内：ヘラケズリ	
38		弥生土器	高杯		0.1 ～ 5.0	やや粗	並	結・石・長・雲・赤	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR5/4 にぶい褐	体外：棒状工具ナデ　内：ヘラナデ	脚部切断か？円盤充填後ユビオサエ。園瀬川流域からの搬入品か？
39		弥生土器	高杯		0.1 ～ 3.0	やや精	並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR7/6 橙	体外：ハケ　内：ヘラケズリ	在地？吉野川流域からの搬入品ではない。
40		弥生土器	壺		0.1 ～ 6.0	やや精	やや良	結・石・長・雲・赤・黒	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR6/6 橙	体外：ハケ（7 条 /1.1 ㎝） 内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？にしては胎土・焼成が良い
42		弥生土器	壺	口（12.5）	0.1 ～ 8.0	やや粗	並	結・石・長・チ・雲・赤・黒	外：10YR7/6 明黄褐 内：7.5YR7/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラナデ？（摩滅不明瞭） 内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品？
43		弥生土器	高杯	口（20.6）	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや良	結・石・長・雲・金雲・赤・黒	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：上部ヨコナデ 下部ヘラミガキ（巾 3.0 ㎜） 内：ヘラミガキ（巾 3.0 ㎜）	搬入品。鮎喰川流域にしては金雲母が多い。
44		弥生土器	高杯	口（22.2）	0.1 ～ 1.5	やや精	やや良	石・長・雲・赤・黒	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
45		弥生土器	甕	底 6.4	0.1 ～ 2.5	やや粗	並	石・長・雲・赤	外：5YR6/4 にぶい橙 内：5YR5/6 明赤褐	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	2 次焼成による被熱赤変。小型器台の可能性あり。
48		弥生土器	甕	底（8.2）	0.1 ～ 2.0	やや精	良	結・石・長・雲・赤	外：10YR3/1 黒褐 内：5YR6/4 にぶい橙	体外：ヘラナデ＋ユビナデ 内：ヘラケズリ 底外：ヘラナデ 内：ヘラケズリ	園瀬川流域からの搬入品か？
49		弥生土器	壺	高（6.2） 頸（9.7）	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	体外：（頸部）ヘラナデ＋ユビナデ→凸帯貼付→爪で押さえる 内：（頸部）ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
50		弥生土器	壺	底（8.2）	0.1 ～ 8.0	やや精	やや良	結・石・長・雲	外：2.5YR5/4 にぶい赤褐 内：5YR6/4 にぶい橙	体外：タタキ→ユビナデ 内：ユビオサエ	吉野川流域からの搬入品。
51		弥生土器	高杯		0.1 ～ 2.0	やや粗	やや不	結・石・長・雲	外：10YR5/4 にぶい黄褐 内：7.5YR5/6 明褐	体外：（脚部）摩滅不明 内：（脚部）ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品？内面絞り痕あり。
52		弥生土器	甕	口（13.2） 頸（11.1）	0.1 ～ 2.0	やや精	やや良	結・石・長・雲・赤	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR4/2 灰黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ 内：ヘラケズリ＋ユビナデ	吉野川流域からの搬入品。
53		弥生土器	甕	口（19.8）	0.1 ～ 2.5	精	並	結・石・長・雲・赤	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	外面煤付着。鮎喰川流域からの搬入品。
54		弥生土器	壺	口（1.4）	0.1 ～ 1.0	やや精	やや不	結・雲・赤	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/6 橙	口外：回転ナデ　内：回転ナデ	鮎喰川流域からの搬入品。
55		弥生土器	細頸壺	頸（6.1）	0.1 ～ 4.0	精	並	石・長・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：2.5Y4/1 黄灰	口外：ヨコナデ　内：ユビナデ	吉野川流域からの搬入品か？
56		弥生土器	甕	口（22.1） 頸（21.2） 最（29.4）	0.1 ～ 1.2	やや精	やや良	結・石・長・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ→沈線 3 条　頸部ユビナデ 内：ヨコナデ 体外：平行タタキ（3 条 /1 ㎝）→板ナデ 内：ユビナデ	体部内面接合痕あり。結晶片岩の質悪く、園瀬川流域からの搬入品か？
57		弥生土器	甕	口（16.4） 頸（14.4）	0.1 ～ 1.5	やや精	やや良	結・石・長・雲・金雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：5YR6/8 橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ	吉野川流域からの搬入品。
58	M42	弥生土器	壺		0.1 ～ 6.5	やや粗	やや不	結・石・長・チ・雲・黒	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR4/2 灰褐	体外：摩滅不明　内：板ナデ	内面炭化物付着。勝浦川流域からの搬入品？クサレチャート含。
59		弥生土器	甕	口（13.9） 頸（12.3）	0.1 ～ 5.0	やや粗	不良	結・石・チ・雲・赤	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR5/6 明赤褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：摩滅不明　内：摩滅不明	勝浦川流域からの搬入品か？
60		弥生土器	壺		0.1 ～ 4.5	やや精	良	結・石・雲	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR6/4 にぶい橙	体外：ヘラナデ→櫛描波状文 内：ヘラナデ→ユビナデ	鮎喰川流域からの搬入品。
61		弥生土器	高杯	頸（16.4）	0.1 ～ 3.0	やや粗	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：5YR7/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ	吉野川流域からの搬入品？
62		弥生土器	甕	口（19.8）	0.1 ～ 3.5	やや精	並	石・長・チ・雲・赤	外：10R5/6 赤 内：2.5YR7/8 橙		在地か？
64		土師器	杯	底（6.3）	0.1 ～ 2.0	やや精	並	石・長・雲・赤・黒	外：10YR8/3 浅黄橙 内：2.5Y6/1 黄灰	体外：回転ナデ　内：回転ナデ 底外：回転糸切り　内：回転ナデ	摩滅著しい。
65	SX2001	弥生土器	壺	高 44.8 口 14.3 頸 10.7 最 28.7 底 9.7	0.1 ～ 4.5	やや精	やや良	結・石・長・雲・赤・黒	外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：10YR3/2 黒褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：（頸部）縦ハケ（10 条 /0.9 ㎝）→凸帯貼付→爪で押さえる→ユビナデ　ハケ（10 条 /0.9 ㎝） 内：（頸部）板ナデ→ユビナデ 底外：ユビオサエ→ユビナデ 内：板ナデ	吉野川流域・園瀬川流域からの搬入品か？結晶片岩少なく、質が悪い。焼成はやや良好。
66	SX2001	弥生土器	広口壺	口 25.0	0.1 ～ 2.0	粗	やや不	結・石・長・チ	外：10YR5/8 黄褐 内：10YR7/6 明黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	勝浦川流域からの搬入品か？結晶片岩粗く、クサレチャート含。
67	SX2001	弥生土器	広口壺	口（17.4）	0.1 ～ 6.0	やや精	並				
68	SX2001	弥生土器	壺	口（12.2） 頸（10.4）	0.1 ～ 5.2	やや粗	やや不	石・長・雲・赤	外：5 YR6/8 橙 内：5 YR7/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：摩滅により不明 内：ヘラケズリ	クサレチャート含む。在地産か？
69	SX2001	弥生土器	壺	口（13.5） 頸（10.0）	0.1 ～ 4.0	やや精	並	結・石・長・雲・金雲・赤	外：10R4/4 赤褐 内：2.5YR4/3 にぶい赤褐	口外：ハケ→ヨコナデ 内：ユビナデ＋ヨコナデ	園瀬川流域からの搬入品か？
70	SX2001	弥生土器	長頸壺	頸 11.0	0.1 ～ 3.0	やや粗	やや良	結・石・長・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：5YR7/6 橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビオサエ　内：ユビナデ	外面にモミガラ？圧痕あり。吉野川流域からの搬入品か？

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
71	SX2001	弥生土器	壺	口（13.5） 頸（9.7）	0.1 ～ 1.0	やや精	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R4/4 赤褐 内：10R6/8 赤橙	口外：ヨコナデ　内：ユビナデ 体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
72	SX2001	弥生土器	壺	口（14.1） 頸（12.6）	0.1 ～ 2.5	やや粗	やや不	石・長・チ・雲・赤・砂	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	在地？
73	SX2001	弥生土器	壺	口（13.3）	0.1 ～ 5.0	やや精	やや不	石・長・チ・雲・赤・砂	外：10YR6/6 明黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄橙	口外：ヨコナデ＋イタナデ 内：摩滅により不明	在地産か？
74	SX2001	弥生土器	壺	口（13.7）	0.1 ～ 2.4	やや粗	並	石・長・チ・金雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	那賀川流域もしくは勝浦川流域産か？
75	SX2001	弥生土器	壺	最（25.0）	0.1 ～ 6.0	粗	やや不	結・石・長・チ	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙	体外：ナデ→ヘラミガキ　摩滅 内：ナデ→ヘラケズリ、ユビオサエ？摩滅	勝浦川流域からの搬入品か？焼成時破裂痕あり。
76	SX2001	弥生土器	甕	最（30.0）	0.1 ～ 6.0	粗	やや不	結・石・長・雲・赤	外：2.5Y5/1 黄灰 内：10YR6/4 にぶい黄橙	口外：回転ナデ→櫛描文？ 内：回転ナデ 体外：回転ナデ　摩滅 内：回転ナデ→ヘラケズリ、ユビオサエ？	焼成時破裂痕あり。勝浦川流域からの搬入か？
77	SX2001	弥生土器	壺	最（30.75）	0.1 ～ 9.0	粗	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R4/6 赤 内：5YR4/1 褐灰	体外：ヘラミガキ→クシ描沈線＋波状文 内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
78	SX2001	弥生土器	壺	最（31.0）	0.1 ～ 3.5	やや精	良	石・長・チ・雲・金雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR7/6 橙	体外：ヘラミガキ→刺突文 内：ヘラケズリ→ユビナデ	鮎喰川流域からの搬入品か？
79	SX2001	弥生土器	甕	底（6.0）	0.1 ～ 3.9	やや精	並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR5/2 灰褐	体外：ヘラミガキ 内：棒状工具によるナデ 底外：ユビナデ 内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？クサレチャートを含む。結晶片岩含まず。在地産か？
80	SX2001	弥生土器	甕	底 6.7	3.0 ～ 3.2	やや精	並	石・長・チ・赤・砂	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：10YR4/2 灰黄褐	体外：ヘラミガキ 内：ハケ（13 条 12.4 ㎝） 底外：ユビナデ　内：ユビオサエ	在地産か？砂岩粒を含む。
81	SX2001	弥生土器	甕	底 5.5	0.1 ～ 5.8	やや精	良	結・石・雲・赤	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	体外：ヘラミガキ　内：ヘラケズリ 底外：ユビナデ　内：ユビオサエ	内外面煤付着。園瀬川流域からの搬入品？
82	SX2001	縄文土器	深鉢	底 7.2	0.1 ～ 3.0	粗	並	結・石・長・赤	外：5Y4/1 灰 内：2.5Y4/1 黄灰	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	吉野川流域からの搬入品か？
83	SX2001	弥生土器	甕	底 5.6	0.1 ～ 2.0	やや粗	並	結・石・長・チ・赤	外：2.5YR6/6 橙 内：10YR5/1 褐灰	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	2 次焼成による赤変。勝浦川流域からの搬入品か？結晶片岩粒少なく質が悪い。
84	SX2001	弥生土器	甕	底 6.2	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや良	結・石・長・チ・赤	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR3/1 黒褐	体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ 底外：ユビオサエ　内：ユビオサエ	吉野川下流域からの搬入品か？結晶片岩粒少なく、質が悪い→勝浦川？
85	SX2001	弥生土器	甕	底 3.7	0.1 ～ 3.2	粗	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR4/2 灰褐 内：7.5YR5/3 にぶい褐	体外：ユビナデ　内：ヘラケズリ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	2 次焼成による被熱？鮎喰川流域からの搬入品？
86	SX2001	弥生土器	壺	底 8.8	0.1 ～ 2.0	やや精	並	結・石・長・雲・	外：5YR5/6 明赤褐 内：7.5YR6/6 橙	体外：ユビナデ　内：ヘラケズリ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	吉野川流域からの搬入品。
87	SX2001	弥生土器	甕	底 5.6	0.1 ～ 4.0	やや粗	並		外：2.5YR6/6 橙 内：5YR7/6 橙	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビオサエ	内面煤付着。那賀川流域もしくは勝浦川流域産か？
88	SX2001	弥生土器	壺	頸（8.4）	0.1 ～ 4.0	やや粗	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R6/8 赤橙 内：10YR4/1 褐灰	体外：ユビナデ　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
89	SX2001	弥生土器	壺	頸（20.6）	0.1 ～ 2.5	やや粗	良	石・長・チ・雲	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	体外：（頸部）板ナデ→凸帯貼付→爪で押さえる 内：（頸部）イタナデ	在地もしくは勝浦川流域産。
90	SX2001	弥生土器	壺	最（22.0） 底（7.0）	0.1 ～ 4.0	やや粗	並	結・石・長・チ・雲・赤・砂	外：10YR6/6 明黄褐 内：10YR4/1 褐灰	体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビオサエ	勝浦川流域からの搬入品か？
91	SX2001	弥生土器	壺	最（21.6）	0.1 ～ 3.0	やや精	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R4/4 赤褐 内：10YR4/1 褐灰	体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
92	SX2001	弥生土器	壺	最（16.4）	0.1 ～ 3.4	やや精	並	長・雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	体外：ヘラミガキ→刺突文 内：ユビオサエ→ユビナデ	那賀川流域？産地不明
93	SX2001	弥生土器	壺	最（24.5）	0.1 ～ 5.0	粗	並	結・石・長・チ・雲・赤・砂	外：2.5YR5/8 明赤褐 内：10YR4/1 褐灰	体外：ユビナデ　内：ユビナデ	園瀬川流域からの搬入品か？
94	SX2001	弥生土器	甕	頸（11.4）	0.1 ～ 2.0	やや精	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR5/6 明赤褐	体外：ハケ（8 条 /2 ㎝） 内：ユビオサエ→ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
95	SX2001	弥生土器	甕	頸（12.5）	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/6 橙	体外：ユビナデ　内：イタナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
96	SX2001	弥生土器	甕	底 6.0	0.1 ～ 0.4	精	良	結・石・長・雲・赤	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR6/6 橙	体外：ヘラミガキ　内：ヘラケズリ 底外：ユビナデ 内：ユビオサエ＋ユビナデ	外面煤付着。鮎喰川流域からの搬入品。
97	SX2001	弥生土器	壺	底（7.1）	0.1 ～ 3.0	やや粗	やや不	結・石・長・チ・雲・赤	外：10R6/6 赤橙 内：2.5YR6/6 橙	体外：ヘラミガキ　内：ヘラナデ 底外：イタナデ　内：ヘラナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
98	SX2001	弥生土器	壺	底（13.4）	0.1 ～ 1.4	やや粗	並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR8/6 浅黄橙	体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	在地？
99	SX2001	弥生土器	壺	底（8.3）	0.1 ～ 7.0	やや粗	並	結・石・長・チ・雲・赤・砂	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR6/2 灰黄褐	体外：ヘラナデ　内：ヘラケズリ 底外：ユビナデ 内：ユビオサエ＋ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品？
100	SX2001	弥生土器	甕	底 6.2	0.1 ～ 2.4	やや精	良	結・石・長・雲・赤	外：2.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/6 橙	体外：ヘラミガキ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	内面煤付着、外面 2 次焼成による被熱赤変あり。園瀬川流域からの搬入品か？
101	SX2001	弥生土器	壺	底 8.4	0.1 ～ 5.0	やや粗	不良	石・長・チ・雲・赤	外：5YR6/8 橙 内：5YR6/8 橙	体外：ヘラナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ 内：ユビオサエ＋ユビナデ	クサレチャート含む。勝浦川南岸地域からの搬入品か？
102	SX2001	弥生土器	壺	口 11.8 頸 11.2 最 14.2	0.1 ～ 1.0	やや粗	並	石・長・赤・砂	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：2.5Y4/1 黄灰	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：ヘラナデ 内：ユビオサエ→ヘラナデ	在地か？（砂岩粒が粗い）
103	SX2001	弥生土器	甕	口（17.4） 頸（16.7） 最（23.0） 底 7.0	0.1 ～ 1.5	粗	やや不	結・石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR7/6 橙 内：2.5Y6/2 灰黄	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：（頸部）ユビオサエ　ハケ（12 条 /2 ㎝） 内：ヘラケズリ（摩滅）→ユビオサエ 底外：ヘラ切り→ユビナデ 内：ユビオサエ	勝浦川流域からの搬入品か？結晶片岩が非常に粗く質が悪い。
104	SX2001	弥生土器	甕	口（19.3） 頸（23.6）	0.1 ～ 3.5	やや精	やや良	石・長・雲・赤・黒	外：5YR6/4 にぶい橙 内：5YR7/6 橙	口外：ヨコナデ→沈線 1 条 内：ヨコナデ 体外：（頸部）ユビナデ　ハケ（8 条 /1.5 ㎝）→ヘラミガキ 内：（頸部）ユビナデ　ユビオサエ→ハケ（7 条 /1.7 ㎝）	内外面体部・口縁部コゲ跡あり。那賀川流域産か？それにしては胎土・焼成が良。産地不明。搬入品か？要検討。
105	SX2001	弥生土器	甕	口（22.4） 頸（22.0）	0.1 ～ 4.9	やや精	やや良	石・長・雲・赤	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR4/1 褐灰	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ 内：ユビオサエ→ハケ	内面黒斑あり。搬入品か？
106	SX2001	弥生土器	壺	口（22.8） 頸（20.4）	0.1 ～ 3.0	やや精	並	石・雲・赤	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙		産地不明。口唇部煤付着。
107	SX2001	弥生土器	甕	口（22.5） 頸（24.1）	0.1 ～ 1.0	やや精	不良	石・雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ　内：ユビオサエ	那賀川流域？
108	SX2001	弥生土器	甕	口（19.6）	0.1 ～ 1.0	やや粗	並	石・長・チ・赤	外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：5YR6/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	内外面煤付着。那賀川流域産か？
109	SX2001	弥生土器	甕	口（12.7） 頸（11.0）	0.1 ～ 2.0	やや精	並	結・石・長・雲・赤	外：2.5YR6/8 橙 内：7.5YR5/6 明褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ハケ（摩滅） 内：ユビオサエ＋ハケ	園瀬川流域からの搬入品か？
110	SX2001	弥生土器	甕	口（16.1） 頸（13.7）	0.1 ～ 1.1	やや粗	不良	石・長・チ・雲・赤	外：5YR7/8 橙 内：10YR6/6 明黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：摩滅不明　内：摩滅不明	在地か？勝浦川流域からの搬入品か？
111	SX2001	弥生土器	甕	口（12.8） 頸（12.7） 最（20.1）	0.1 ～ 5.0	やや精	やや不	結・石・チ・雲・赤	外：2.5YR6/3 にぶい橙 内：7.5YR4/1 褐灰	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラナデ→ユビナデ 内：ハケ（12 条 /1.6 ㎝）→ユビナデ	内外面黒斑。勝浦川流域からの搬入品か？
112	SX2001	弥生土器	甕	口（15.6） 頸（13.0）	0.1 ～ 3.2	やや粗	やや不	石・長・金・雲・角	外：7.5YR5/6 明褐 内：10YR5/6 黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ハケ（摩滅不明） 内：ユビナデ	讃岐地域からの搬入品。焼成やや不良であり、香東川流域ではないと想定。
113	SX2001	弥生土器	甕	口（15.9） 頸（14.8）	0.1 ～ 1.2	やや精	やや並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ハケ→ナデ　内：ヘラケズリ	搬入品か？焼成良。口縁端部に煤付着。
114	SX2001	弥生土器	甕	口（15.0） 頸（13.7）	0.1 ～ 7.2	やや精	やや不	結・石・長・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR7/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラナデ　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？模倣品？
115	SX2001	弥生土器	甕	口（21.7） 頸（19.3）	0.1 ～ 2.2	やや粗	やや不	石・長・チ・赤	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR6/8 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ　内：ヘラケズリ	在地もしくは勝浦川流域からの搬入品？
116	SX2001	弥生土器	甕	口（16.4） 頸（14.8）	0.1 ～ 3.8	やや粗	やや不	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/8 橙 内：5YR6/8 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：摩滅不明　内：ヘラナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
117	SX2001	弥生土器	甕	口（16.9） 頸（15.2）	0.1 ～ 1.0	やや粗	やや不	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR7/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヨコナデ　内：ユビナデ	
118	SX2001	弥生土器	甕	口（20.6） 頸（12.8）	0.1 ～ 0.1	やや精	やや不	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：5YR6/6 橙		口縁部煤付着。那賀川流域もしくは勝浦川流域か？

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
119	SX2001	弥生土器	甕	口（30.5） 頸（30.6）	0.1 ～ 7.0	やや精	良	結・石・長・チ・雲・赤・黒	外：7.5YR4/3 褐 内：10YR4/2 灰黄褐	口外：ヨコナデ、 内：ヨコナデ 体外：（頸部）凸帯貼付→爪で押さえる　ハケ（9 条 /1.6 ㎝）→上部ヨコナデ 内：板ナデ	口縁煤付着。鮎喰川流域からの搬入品。
120	SX2001	弥生土器	甕	口（25.4） 頸（24.1） 最（33.6）	0.1 ～ 5.0	やや精	良	結・石・長・雲・赤	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR5/4 にぶい赤褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：イタナデ＋ユビナデ 内：ユビオサエ→ハケ→ユビナデ	鮎喰川流域からの搬入品
121	SX2001	弥生土器	甕	口（25.9） 頸（24.4）	0.1 ～ 6.0	やや粗	やや不	結・石・長・チ・雲・赤・黒	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：（頸部）ユビナデ　摩滅不明 内：（頸部）ユビナデ　ヘラケズリ	勝浦川流域からの搬入品。
122	SX2001	弥生土器	甕	口（20.6） 頸（10.2）	0.1 ～ 7.7	粗	並	結・石・チ・赤	外：2.5YR3/2 暗赤褐 内：10YR5/2 灰黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：イタナデ　内：ユビナデ	園瀬川流域からの搬入品か？
123	SX2001	弥生土器	甕	口（27.0） 頸（25.0）	0.1 ～ 3.2	やや精	やや良	結・石・長・雲・ 金雲・赤・砂	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ＋ヘラナデ 内：ユビナデ	鮎喰川流域からの搬入品。口縁外面煤付着。
124	SX2001	弥生土器	鉢	口（30.8）	0.1 ～ 1.0	やや粗	並	石・長・チ・赤・砂	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	口外：ヨコナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ→凹線 内：ユビナデ	那賀川流域か？
125	SX2001	弥生土器	鉢	口（34.2）	0.1 ～ 5.2	やや粗	やや不	石・長・雲・赤	外：7.5YR6/8 橙 内：7.5YR7/8 黄橙	口外：ヨコナデ　内：ユビナデ 体外：ヨコナデ→刺突文 内：ユビナデ	那賀川流域産か？
126	SX2001	弥生土器	注口付無頸壺	口（23.1） 底（26.0）	0.1 ～ 7.0	粗	やや不	結・石・長・雲	外：5Y3/2 オリーブ黒 内：5Y3/2 オリーブ黒	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：板ナデ→注口貼付→ユビナデ 内：ユビナデ　底外：板ナデ 内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？結晶片岩の質が悪い。
127	SX2001	弥生土器	鉢	口（10.7） 底（3.4）	0.1 ～ 3.0	やや精	やや良	結・石・長・チ・雲・金・雲・赤	外：2.5YR3/3 暗赤褐 内：2.5YR6/8 橙	口外：ヨコナデ→打ち欠き 内：ヨコナデ　体外：ヘラミガキ 内：ヘラナデ	口縁部に外方からの打ち欠き、鮎喰川流域からの搬入品か？
128	SX2001	弥生土器	鉢	口（15.8）	0.1 ～ 2.8	やや精	やや不	石・長・雲・赤・砂	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ユビナデ→沈線 内：ユビナデ	在地産か？
129	SX2001	弥生土器	鉢	口（18.5） 最（21.2）	0.1 ～ 3.0	やや精	並	結・石・長・チ・雲・赤	外：5YR5/3 にぶい赤褐 内：2.5YR4/2 灰赤	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヨコナデ→凹線 内：ユビナデ	園瀬川流域からの搬入品か？
130	SX2001	弥生土器	鉢	口（22.0）	0.1 ～ 1.0	粗	並	石・長・チ・赤・砂・泥	外：5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラナデ→凹線 内：ユビナデ	在地か？
131	SX2001	弥生土器	無頸壺	口（15.2）	0.1 ～ 2.4	やや精	並	石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR5/2 灰褐 内：7.5 YR 5/3 にぶい褐	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ	在地産か？
132	SX2001	弥生土器	高杯	口（14.9）	0.1 ～ 4.5	やや精	良	結・石・長・雲	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR5/3 にぶい褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ→上位ヨコナデ 内：ヘラミガキ	鮎喰川流域からの搬入品。
133	SX2001	弥生土器	高杯	口（24.8）	0.1 ～ 5.0	やや粗	良	結・石・長・チ・赤	外：5YR6/6 橙 内：5YR5/6 明赤褐	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	勝浦川流域からの搬入品。結晶片岩の質が悪い。
134	SX2001	弥生土器	高杯	口（22.2）	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや不	結・石・長・赤	外：5YR6/8 橙 内：5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	勝浦川流域からの搬入品か？
135	SX2001	弥生土器	高杯	底 5.0	0.1 ～ 5.0	やや精	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR5/8 明褐 内：5YR6/6 橙	体外：ヘラミガキ 内：ユビナデ→ヘラナデ 底外：ヘラミガキ　内：ユビオサエ	吉野川流域もしくは勝浦川流域からの搬入品か？
136	SX2001	弥生土器	高杯	底 11.2	0.1 ～ 5.0	やや粗	やや良	結・石・長・チ・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：5YR7/6 橙	体外：ヘラミガキ 内：絞り→ヘラケズリ	勝浦川・園瀬川流域からの搬入品か？結晶片岩粒の質が悪い。
137	SX2001	弥生土器	高杯	口（9.5）	0.1 ～ 7.0	やや粗	不良	結・石・長・チ・雲・赤	外：7.5YR6/6 橙 内：5Y5/1 灰	底外：ヘラミガキ 内：絞り→ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品
138	SX2001	弥生土器	甕	底（6.8）	0.1 ～ 5.1	粗	並	結・石・チ・雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：2.5Y3/1 黒褐	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ハケ→突孔　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品。底部外方からの突孔途中。
139	SX2001	弥生土器	高杯	底（15.0）	0.1 ～ 3.0	やや粗	やや不	結・石・長・雲・赤	外：2.5YR5/6 明赤褐 内：2.5YR6/8 橙	底外：ユビナデ　内：ヘラケズリ	勝浦川流域からの搬入品か？
140	SX2001	弥生土器	高杯	底（13.4）	0.1 ～ 2.0	やや粗	並	結・石・長・雲・ 金雲・赤	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：5YR6/4 にぶい橙	底外：ユビナデ　内：ヘラケズリ	勝浦川流域からの搬入品か？
141	SX2001	弥生土器	高杯	底（15.6）	0.1 ～ 5.0	やや粗	並	石・長・雲・赤	外：10R5/6 赤 内：2.5YR5/6 明赤褐	底外：ユビナデ　内：ヘラケズリ	那賀川もしくは勝浦川流域からの搬入品か？

掲載番号	遺構	種別	器種	法量（cm）	胎土粒（mm）	密度	焼成	含有物	色調	調整	備考
142	SX2001	弥生土器	壺	底（19.2）	0.1 ～ 5.0	やや粗	並	結・石・長・雲・赤	外：5YR5/6 明赤褐 内：7.5YR6/6 橙	底外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	
143	SX2001	弥生土器	台付鉢	底（14.9）	0.1 ～ 6.2	やや粗	やや不	結・石・長・チ・雲・赤	外：2.5YR6/6 橙 内：2.5YR5/1 赤灰	底外：ユビナデ　内：ユビナデ	勝浦川流域からの搬入品か？
144	包含層	弥生土器	広口壺	口（17.1）	0.1 ～ 4.5	粗	不良	結・石・長・雲	外：10R6/6 赤橙 内：10R6/3 にぶい赤橙	口外：ヨコナデ→円形浮文 内：ヨコナデ	勝浦川流域からの搬入品。
145	包含層	弥生土器	広口壺	口（17.6）	0.1 ～ 12.0	やや粗	並	石・長・雲・赤	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：2.5Y6/4 にぶい黄	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	産地不明。在地か？
146	包含層	弥生土器	甕	口（16.0） 頸（13.8）	0.1 ～ 1.0	やや精	並	長・チ・雲・赤	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ハケ→ユビナデ 内：ヘラケズリ→ヨコナデ	吉野川流域からの搬入品か？
147	北側土塁	弥生土器	壺	底（9.8）	0.1 ～ 1.0	やや粗	やや不	石・長・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	底外：ヘラミガキ　内：ユビナデ	在地か？
148	包含層	弥生土器	甕	底 5.2	0.1 ～ 4.0	やや粗	並	結・石・長・赤	外：10R5/6 赤 内：2.5YR5/8 明赤褐	体外：ヘラミガキ（摩滅） 内：ユビナデ　底外：ユビナデ 内：ユビナデ	外面煤付着、搬入品か？
149	包含層	弥生土器	鉢	口（42.3）	0.1 ～ 2.0	やや粗	並	石・長・チ・赤・砂	外：2.5YR5/4 にぶい赤褐 内：10R5/6 赤	口外：ヨコナデ→ヘラガキ斜格子 内：ヨコナデ	在地産？
150	包含層	弥生土器	高杯	口（34.2）	0.1 ～ 2.0	やや粗	やや不	結・石・長・雲・赤	外：2.5YR3/1 暗赤灰 内：2.5YR4/8 赤褐	口外：回転ナデ→沈線 内：ヨコナデ　体外：ヘラミガキ 内：ユビナデ	勝浦川流域もしくは園瀬川流域からの搬入品？
151	包含層	弥生土器	高杯	口（19.5）	0.1 ～ 3.0	やや精	並	結・石・長・雲・赤	外：10YR5/1 褐灰 内：2.5YR4/1 赤灰	口外：ヨコナデ　内：ヨコナデ 体外：ヘラミガキ（摩滅） 内：ヘラミガキ（摩滅）	搬入品か？
152	北側土塁	弥生土器	高杯	頸 4.1	0.1 ～ 3.0	やや粗	やや不	結・石・長・チ・雲・赤	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	底外：ユビナデ　内：ユビナデ	クサレチャート含む。勝浦川流域からの搬入品。
153	包含層	弥生土器	高杯	頸 5.6	0.1 ～ 2.5	やや粗	やや良	石・長・チ・雲・赤・砂	外：5YR6/6 橙 内：5YR7/6 橙	体外：回転ナデ 内：絞り→ユビナデ	在地産
154	包含層	須恵器	鉢	底 9.8	0.1 ～ 3.0	やや精	並	長・黒	外：5PB6/1 青灰 内：5PB6/1 青灰	体外：回転ナデ　内：回転ナデ 底外：未調整　内：ユビナデ	
155	包含層	土師器	皿	高 1.45 口 7.9 底 6.0	0.1 ～ 2.0	やや精	並	長・チ	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR8/4 浅黄橙	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ 底外：回転糸切り　内：ユビナデ	
156	包含層	土師器	皿	口（8.40） 底（6.0）	0.1 ～ 3.0	やや粗	不良	結・石・赤	外：10YR8/3 浅黄橙 内：10YR8/3 浅黄橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ヘラ切り→ユビナデ 内：ユビオサエ＋ユビナデ	
157	北側土塁	磁器	皿	高 2.2 口（10.9） 底（4.5）					外：2.5Y7/2 灰黄 内：8Y7.5/0 あかるいグレイ	口外：回転ナデ→施釉 内：回転ナデ→施釉 体外：回転ナデ 内：回転ナデ→施釉 底外：回転ヘラ切り 内：回転ナデ→施釉	
158	包含層	縄文土器	深鉢	底（5.1）	0.1 ～ 2.0	やや粗	並	石・長・雲・砂	外：2.5Y7/3 浅黄 内：5YR7/6 橙	体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	
159	包含層	土師器	皿	口（5.9）	0.1 ～ 0.1	やや精	並	雲・赤	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR5/4 にぶい褐	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ 底外：回転ナデ　内：回転ナデ	
160	包含層	土師器	皿	高 1.0 口 5.9	0.1 ～ 2.0	やや精	やや良	長・チ・赤	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/6 橙	口外：ユビナデ　内：ユビナデ 体外：ユビナデ　内：ユビナデ 底外：ユビナデ　内：ユビナデ	在地か？
161	包含層	土師器	杯	口（13.5）	0.1 ～ 0.5	やや精	やや不	石・長	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR8/4 浅黄橙	口外：回転ナデ　内：回転ナデ 体外：回転ナデ　内：回転ナデ	内外面赤色顔料塗布。
162	包含層	須恵器	甕		0.1 ～ 1.5	やや精	良	石・長・雲・黒	外：7.5Y5/1 灰 内：7.5Y6/1 灰	体外：回転ナデ→タタキ→ナデ 内：回転ナデ→青海波文	
163	包含層	須恵器	甕		0.1 ～ 2.0	やや精	良	長	外：10BG4/1 暗青灰 内：10BG4/1 暗青灰	体外：平行タタキ 内：青海波文→ユビナデ	
164	包含層	磁器	碗	口（14.6）		精	堅		釉：10YG5.5/3s グレイみのオリーブグリーン 胎土：2.5Y8/1 灰白		

表２　土製品観察表

掲載番号	遺構	器種	長径(cm)	短径(cm)	高さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	胎土粒径	胎土密度/焼成	胎土/組成	色　調	特　徴
1	SH1001	土錘	1.15	1.1	2.5				やや精／並	長・雲・赤	外：5YR7/6 橙 内：5YR7/6 橙	
2	SH1001	羽口	9.1	-	(7.5)	309.5	(1.8)	0.1～4.0	やや精/並	長・赤	外：5PB6/1 青灰 内：2.5YR6/6 橙	
6	SH1001	羽口	-	-	-	-	(2.0)	0.1～3.0	―	―	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/6 橙	
7	SH1001	羽口	(8.0)	(6.8)	(5.0)	177.7		0.1～4.0	精/並	長・雲・赤	外：5YR6/8 橙 内：7.5YR7/8 黄橙	
8	SH1001	羽口	-	-	-	-	-	0.1～5.5	やや精/並	石・長・雲・赤	外：5Y6/1 灰 内：5YR7/4 にぶい橙	
9	SH1001	羽口	-	-	-	-	-	0.1～4.0	精/並	石・長	外：10YR5/2 灰黄褐 内：7.5YR7/6 橙	外：ユビオサエ 内：　-
14	土塁	人形	(9.0)	3.0	8.4				精/量	雲・金雲	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙	
15	土塁	羽口	-	-	-	-	-	0.1～1.5	やや精/並	石・長・雲	外：5Y4/1 灰 内：5YR6/6 橙	
16	土塁	炉壁	-	-	-	-	-	0.1～3.5	やや精/並	石・長・チ・雲・黒	外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：7.5YR5/3 にぶい褐	外：イタナデ？ 内：　-
17	土塁	羽口	-	-	-	-	-	0.1～1.0	やや精/並	石・長・雲	外：10YR5/1 褐灰 内：5YR7/6 橙	外：イタナデ 内：　-
18	土塁	炉壁	10.9	9.8	6.0	435.8	-	0.1～1.0	精/並	石・雲	外：5YR6/8 橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙	外：ユビオサエ
19	土塁	るつぼ	-	-	-	-	-	0.1～0.5	精/並	石・長・雲	外：5YR6/6 橙 内：10YR5/3 にぶい黄褐	外：　- 内：ユビナデ
23	土塁	羽口	-	-	-	-	-	0.1～7.0	やや精/並	石・長・赤	外：7.5YR5/1 褐灰 内：5YR7/8 橙	外：ナデ？ 内：　-
24	土塁	羽口	9.0	7.0	4.1	192.7	-	0.1～9.0	やや精/並	石・チ・雲・赤	外：5YR7/8 橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	外：ユビナデ 内：ユビオサエ＋ユビナデ
25	土塁	羽口	-	-	-	-	-	0.1～3.5	やや精/並	石・長・雲	外：5Y5/1 灰 内：5YR6/6 橙	
32	土塁	人形	(2.6)	(1.8)	(4.2)				精/並	雲・金雲	外：7.5YR8/3 浅黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	
33	土塁	炉壁	23.1	10.8	9.0	560	-	0.1～8.0	やや粗/並	石・長・雲	外：5YR4/6 赤褐 内：5YR6/6 橙	
34	土塁	炉壁	-	-	-	-	-	0.1～0.5	やや精/並	石・長・雲	外：5YR6/6 橙 内：5YR5/6 明赤褐	外：イタナデ？ 内：ユビナデ
41	SK2014	紡錘車	1.7	2.6	0.6			0.1～2.0	やや粗/やや良	結・石・長・雲・赤・黒	外：5YR6/4 にぶい橙 内：5Y3/1 オリーブ黒	穿孔１ヵ所あり、甕体部転用
46	SK2017	羽口	-	-	-	-	-	0.1～6.0	精/並	石・長・雲・赤	外：5YR5/2 灰褐 内：5YR7/8 橙	外:ユビオサエ、イタナデ？ 内：　-
47	SK2017	羽口	-	-	-	-	-	0.1～4.0	精/並	石・長・雲	外：10YR5/2 灰黄褐 内：5YR7/8 橙	外：　- 内：　-
63	SP2201	人形	(7.0)	(3.3)	(1.4)				精/堅	―	外：4rO3.5/5s 赤みのブラウン 内：2.5YR6/6 橙	
165	包含層	炉壁	-	-	-	-	-	0.1～6.0	やや粗/並	石・長・雲・赤	外：7.5YR7/6 橙 内：5YR5/4 にぶい赤褐	外：ユビオサエ 内：　-

表３　石器観察表

掲載番号	遺構	石材	器種	長径(cm)	短径(cm)	高さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	特　　徴
S1	虎口	サヌカイト	剥片	2.8	2.1	0.6	3.5	-	
S2	虎口	チャート	石鏃	2.2	1.6	0.5	1.4	-	
S3	北側土塁	サヌカイト	剥片	5.3	4.2	0.8	18.0	-	
S4	北側土塁	チャート	原石	4.1	3.3	2.1	25.7	-	火打ち石
S5	北側土塁	サヌカイト	剥片	3.4	3.4	0.5	5.6	-	
S6	SD2002	砂岩	敲石・砥石	18.3	15.9	4.7	1953.3	-	
S7	SK2002	サヌカイト	石鏃欠損品	2.4	1.6	0.4	1.8	-	
S8	SK2005	サヌカイト	楔形石器	3.3	3.2	1.0	14.9	-	
S9	SK2009	サヌカイト	剥片	7.9	5.2	1.5	51.8	-	
S10	SK2009	サヌカイト	剥片	4.1	2.8	0.8	6.4	-	
S11	SK2009	サヌカイト	剥片	15.4	10.1	2.6	497.6	-	
S12	SK2009	サヌカイト	剥片	14.2	7.2	2.5	197.9	-	
S13	SP2201	水晶	小玉	0.6	0.6	0.6	0.27	0.1	
S14	SP2203	砂岩	砥石	14.5	6.0	3.3	432.3	-	
S15	SX2001	サヌカイト	石鏃	2.5	1.9	0.6	1.8	-	
S16	SX2001	サヌカイト	石鏃	3.4	2.2	0.5	2.2	-	
S17	SX2001	サヌカイト	石鏃	3.6	2.3	0.4	4.3	-	
S18	SX2001	サヌカイト	石鏃	3.3	1.7	0.6	1.7	-	
S19	SX2001	サヌカイト	石鏃未製品	4.4	2.0	0.4	4.3	-	
S20	SX2001	辰砂鉱石	原石	3.5	2.9	1.7	18.6	-	
S21	SX2001	辰砂鉱石	原石	3.5	2.4	1.8	13.3	-	
S22	SX2001	辰砂鉱石	原石	3.4	2.6	1.8	8.8	-	
S23	SX2001	結晶片岩	柱状片刃石斧	16.8	4.4	3.2	535.1	-	
S24	SX2001	結晶片岩	石斧	9.0	3.0	0.7	33.6	-	石包丁からの転用か？
S25	SX2001	サヌカイト	楔形石器	7.4	6.7	1.2	42.2	-	
S26	SX2001	サヌカイト	楔形石器	5.7	4.6	0.6	34.8	-	
S27	SX2001	サヌカイト	剥片	4.9	4.4	1.4	15.9	-	
S28	SX2001	サヌカイト	剥片	5.1	4.9	1.0	18.2	-	
S29	SX2001	サヌカイト	楔形石器	3.4	2.7	1.1	10.7	-	
S30	SX2001	サヌカイト	楔形石器	3.6	3.4	0.9	12.1	-	
S31	SX2001	サヌカイト	楔形石器	3.2	3.2	0.8	8.2	-	
S32	SX2001	サヌカイト	楔形石器	4.1	3.1	0.7	10.5	-	
S33	SX2001	サヌカイト	楔形石器	4.9	2.8	0.8	13.8	-	
S34	SX2001	サヌカイト	楔形石器	3.4	3.3	1.2	13.7	-	
S35	SX2001	サヌカイト	石鏃未製品	3.9	2.8	0.9	9.3	-	
S36	SX2001	サヌカイト	楔形石器	5.4	3.8	0.8	18.0	-	
S37	SX2001	サヌカイト	石鏃未製品	4.4	3.0	0.9	8.5	-	
S38	SX2001	サヌカイト	剥片	4.6	2.4	1.1	11.7	-	
S39	SX2001	サヌカイト	剥片	7.4	2.6	1.1	27.0	-	
S40	SX2001	砂岩	すり石・砥石	25.7	23.1	6.8	4100.0	-	
S41	SX2001	砂岩	すり石・砥石	16.8	9.7	4.7	1074.1	-	
S42	SX2001	砂岩	砥石	27.1	13.4	16.7	8750.0	-	
S43	SX2001	砂岩	砥石	20.1	10.6	5.4	961.6	-	
S44	SX2001	砂岩	すり石・敲石	14.0	7.1	5.4	637.5	-	
S45	SX2001	砂岩	敲石	9.0	7.9	5.4	495.3	-	
S46	SX2001	砂岩	砥石	16.2	11.1	4.6	695.8	-	
S47	SX2001	砂岩	砥石	9.0	6.6	3.6	204.1	-	荒砥
S48	SX2001	砂岩	砥石	7.8	2.4	1.6	40.6	-	
S49	SX2001	砂岩	砥石	7.7	3.4	2.0	70.4	-	仕上砥
S50	SX2001	砂岩	敲石	8.0	6.2	1.5	68.1	-	
S51	SX2001	砂岩	敲石	10.7	9.9	3.7	618.1	-	
S52	SX2001	砂岩	敲石	7.8	4.9	3.9	207.4	-	
S53	SX2001	砂岩	敲石	9.5	9.2	3.7	373.1	-	
S54	SX2001	砂岩	敲石	11.4	11.1	5.8	1048.1	-	
S55	SX2001	砂岩	敲石	(3.9)	(7.2)	(3.2)	274.6	-	
S58	SX2001	サヌカイト	石鏃欠損品	2.0	1.9	0.3	0.9	-	
S59	SX2001	サヌカイト	石鏃	3.5	1.1	0.7	1.6	-	
S60	包含層	砂岩	敲石	7.5	6.1	5.6	315.1	-	鍛冶用敲石
S61	包含層	砂岩	砥石	17.8	7.6	6.1	1319.2	-	
S62	包含層	砂岩	砥石	8.4	7.5	3.0	321.2	-	荒砥
S63	包含層	サヌカイト	剥片	3.6	2.9	0.8	8.3	-	
S64	包含層	サヌカイト	剥片	3.7	3.4	0.8	9.6	-	
S65	包含層	サヌカイト	剥片	4.9	1.9	0.4	4.1	-	
S66	包含層	サヌカイト	剥片	2.9	3.6	0.8	8.3	-	
S67	SX2001	サヌカイト	石鏃	3.3	1.6	0.6	2.5	-	

表４　鉄器・関連遺物観察表

掲載番号	調査区	器種	長径（cm）	短径（cm）	高さ（cm）	重量（g）	特　　徴
M1	SH1001	鋤先	8.2	4.2	0.5		
M2	SH1001	スラグ	5.0	4.4	1.4		
M3	SH1001	環状留金具	9.2	2.8	1.4		
M4	SH1001	スラグ	7.4	11.0	3.9	300.6	椀形滓
M5	SH1001	スラグ	12.2	9.2	6.7	495.9	椀形滓
M6	SH1001	スラグ	11.6	13.9	6.3	833.0	椀形滓
M7	SH1001	スラグ	10.6	9.2	6.3	386.9	炉壁が残る椀形滓
M8	SH1001	スラグ	11.6	14.8	7.5	989.8	メタル多い
M9	SH1001	スラグ	8.3	6.5	3.7	202.8	メタル有
M10	SH1001	スラグ	10.0	11.6	6.3	451.9	椀形滓
M11	SH1001	スラグ	9.3	8.7	4.6	228.9	
M12	SH1001	スラグ	9.5	6.6	3.8	223.5	
M13	SH1001	スラグ	7.5	6.8	4.0	153.5	
M14	土塁	スラグ	10.4	8.2	5.3	348.1	
M15	土塁	スラグ	13.0	9.8	5.8	581.5	板状鉄滓
M16	土塁	スラグ	10.2	8.6	6.8	307.6	小型椀形鉄滓
M17	土塁	スラグ	11.7	9.4	5.1	414.7	大型椀形鉄滓
M18	土塁	スラグ	7.7	11.3	5.3	288.5	
M19	土塁	スラグ	10.0	7.7	3.7	275.0	大型椀形鉄滓
M20	土塁	スラグ	10.5	10.4	6.0	582.2	大型椀形鉄滓
M21	土塁	スラグ	12.3	18.9	7.3	1153.6	大型椀形鉄滓
M22	土塁	スラグ	9.9	8.8	2.5	297.9	小型皿状椀形鉄滓
M23	土塁	スラグ	11.7	11.3	4.3	393.0	小型皿状椀形鉄滓
M24	土塁	スラグ	10.7	12.6	5.9	680.2	
M25	土塁	スラグ	9.6	12.1	5.9	536.6	
M26	土塁	スラグ	12.2	9.4	4.3	430.9	
M27	土塁	スラグ	8.8	7.4	5.3	305.4	小型皿状椀形鉄滓
M28	土塁	スラグ	7.5	7.9	4.3	197.9	
M29	土塁	鉄製釘	4.2	0.9	0.6		
M30	土塁	鉄製釘	4.2	0.8	0.6		鎹か？
M31	土塁	鉄製釘	7.0	0.8	0.7		
M32	土塁	鉄製釘	5.2	0.8	0.7		
M33	土塁	鉄製釘	4.3	1.0	0.6		
M34	SK2008	小型鑿	4.0	1.0	0.7		
M35	SK2012	スラグ	5.65	3.95	3.2	33.7	ガラス質
M36	SK2017	スラグ	13.6	11.9	4.7	717.5	メタル含む 椀形鉄滓
M37	SK2017	スラグ	11.2	7.8	6.7	371.0	椀形鉄滓
M38	SK2017	スラグ	8.4	11.2	3.4	243.0	椀形鉄滓
M39	SK2017	スラグ	11.1	8.0	5.1	369.4	メタル有 椀形鉄滓
M40	SK2017	鉄素材	3.2	3.1	0.6		
M41	SK2017	釘	4.6	0.7	0.6		
M42	SP2160	鉄鏃	6.2	3.0	0.6		
M43	包含層	方頭釘	4.8	0.5	0.5		
M44	包含層	鉄素材	7.4	1.4	1.0		

図版 1

和食城跡遠景

虎口・土橋・東堀

虎口・土橋・東堀

図版 2

西土塁

北土塁東西方向土層

土橋北側完掘状況

土橋北側堀

北土塁 Tr2

北土塁 Tr4

北土塁虎口付近断ち割り土層

Ⅰ号鍛冶炉

Ⅰ号鍛冶炉

Ⅰ号鍛冶炉周辺出土遺物

Ⅰ号鍛冶炉周辺出土遺物

図版 4

2 号溝状遺構

第 2 遺構面完掘状況

Ⅰ号性格不明遺構完掘状況

Ⅰ号性格不明遺構
遺物出土状況

Ⅰ号性格不明遺構
遺物出土状況

図版 6

Ⅰ号性格不明遺構　遺物出土状況

Ⅰ号性格不明遺構
辰砂鉱石出土状況

65

66

119

121

103

104

56

図版 8

89

49

136

31

126

126

131

128

149

報告書抄録

ふりがな	わじきじょうあと
書名	和食城跡
副書名	床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第97集
編著者名	栗林誠治（編）・大橋育順・辻佳伸・徳島県文化資源活用課
編集機関	公益財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
所在地	〒779-0108　徳島県板野郡板野町犬伏字平山86-2
発行年月日	2022年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村　遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わじきじょうあと 和食城跡	とくしまけん 徳島県 なかぐんなかちょう 那賀郡那賀町 わじきあざみなみかわ 和食字南川 157－1	36368　368-4	33° 51′ 24.39″	134° 30′ 15.78″	2020年 4月1日 ～ 2020年 6月30日	1.220㎡	床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和食城跡	集落 城館	弥生時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	土塁・鍛冶炉・溝状遺構	弥生土器・辰砂鉱石・石器・土師器・鉄器・銭貨	土塁及び櫓台・虎口・土橋

要約	今回の発掘調査では、従来より記録に残る和食城跡の土塁や堀の規模・構造の一端が確認された。和食城跡は北・東・西側を堀と土塁で囲んだ東西110m、南北120m程度の規模を有した不整方形を呈する城館と推定される。 文献との整合性から、和食城跡が阿波九城の仁宇山城跡である蓋然性が高い。 第2遺構面からは弥生時代後期前半の遺構・遺物が確認され、那賀川流域の様相を検討する上で重要な知見を得ることができた。

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第97集

和　食　城　跡

床上浸水対策特別緊急事業（和食・土佐地区）関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　令和 4(2022)年2月27日

編　集　公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒 779-0108　徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番 2
TEL（088）672-4545

発　行　徳　　島　　県
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印　刷　徳 島 県 教 育 印 刷 株 式 会 社